鶴見大学司書・司書補講習60周年記念誌

鶴見大学

学校法人総持学園 創立90周年記念

鶴見大学司書・司書補講習60周年記念誌

鶴 見 大 学

学校法人総持学園 創立90周年記念

鶴見大学司書・司書補講習60周年記念誌

鶴 見 大 学

授業風景

平成 24 年度　資料の整理 (岡田先生)

平成 24 年度　情報サービス演習 (山川先生)

平成 24 年度　図書館情報技術論 (長塚先生)

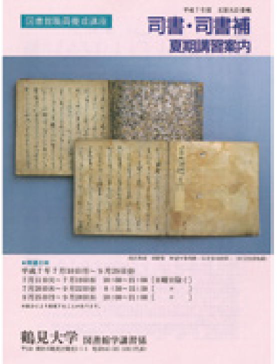
平成 24 年度　情報サービス論 (原田先生)

司書・司書補講習案内

昭和 43 年度

昭和 51 年度

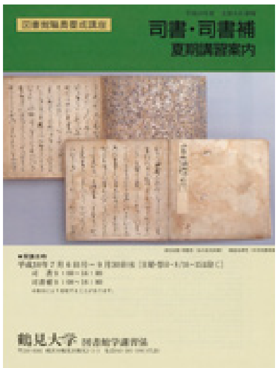
平成 6 年度



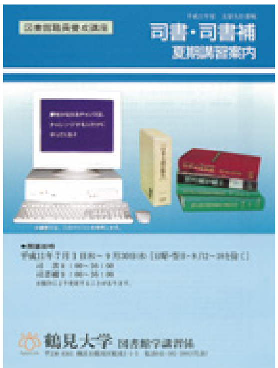
平成 7 年度

平成 8 年度

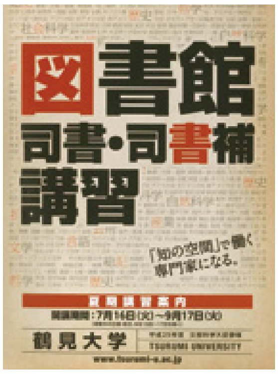
平成 9 年度



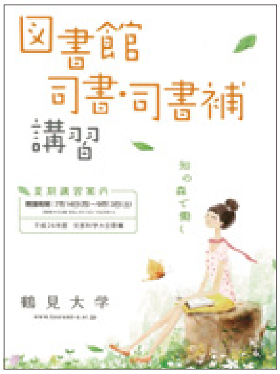
平成 10 年度



平成 11 年度



平成 25 年度

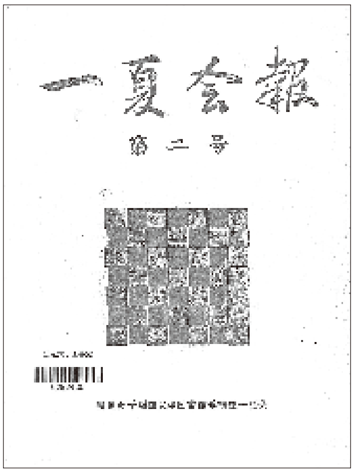


平成 26 年度

図書館学特別講座案内（第 1 回）

一夏会報

創刊号

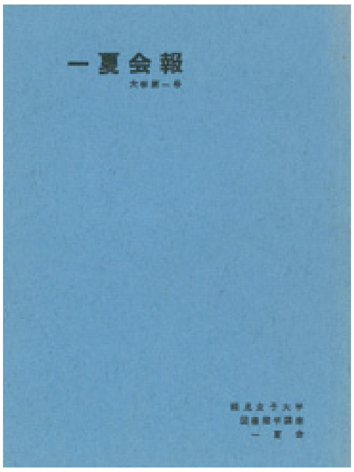


第２号

第３号

第４号

第５号

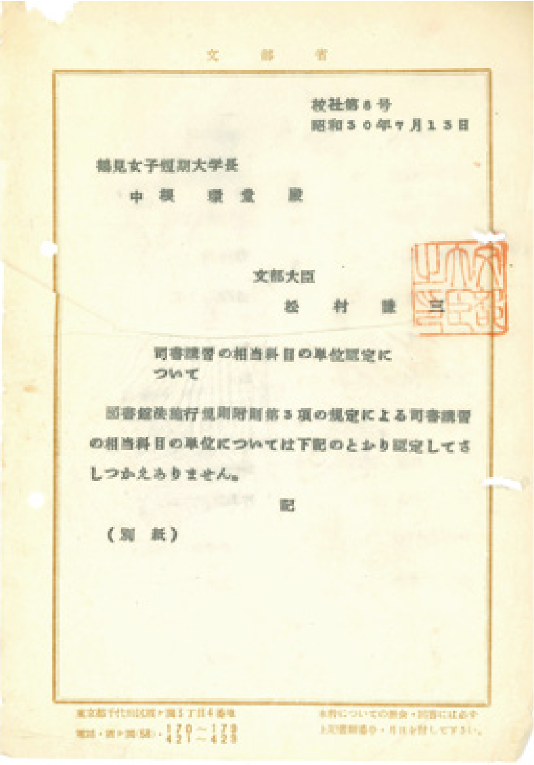


大学１号

第 52 号
（この号よりフルカラーのリーフレットとなる）

第 63 号

文部省通知文書



文部省

校社第8号
昭和30年7月13日

鶴見女子短期大学長
中根　環堂　殿

文部大臣
松村　謙三

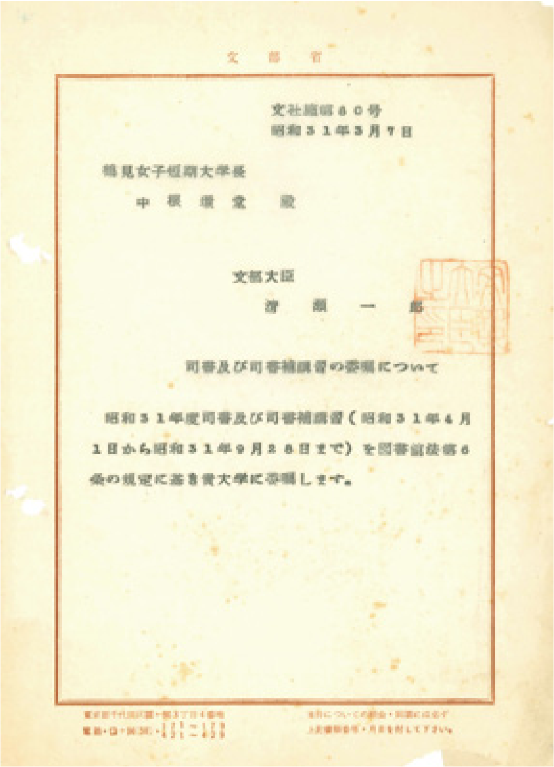
司書講習の相当科目の単位認定について

図書館法施行規則附則第3項の規定による司書講習の相当科目の単位については下記のとおり認定してさしつかえありません。

記

（別紙）

司書講習の相当科目の単位認定について
（昭和 30 年 7 月 13 日）



文部省

文社施第80号
昭和31年3月7日

鶴見女子短期大学長
中根　環堂　殿

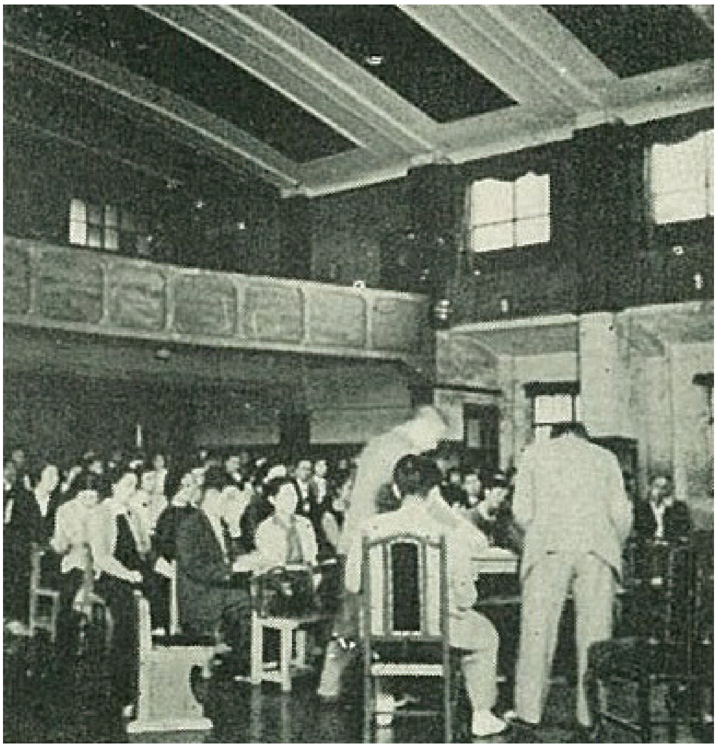
文部大臣
清瀬　一郎

司書及び司書補講習の委嘱について

昭和31年度司書及び司書補講習（昭和31年4月1日から昭和31年9月28日まで）を図書館法第6条の規定に基き貴大学に委嘱します。

司書及び司書補講習の委嘱について
（昭和 31 年 3 月 7 日）

昭和 30 年頃の司書講習の様子



司書教諭の講習ともなれば（「鶴の林」第7巻3号　1955 年）

司書・司書補講習 60 周年を祝して

鶴見大学　学長　伊藤　克子

鶴見大学司書・司書補講習が、本年めでたく開講 60 周年をむかえることができました。心からお祝いを申し上げます。本学は「図書館学の鶴見」として、社会的にも高い評価を得ていますが、その礎を築いたのは、間違いなく司書・司書補講習でしょう。

60 年間といえば、本学の歴史とほぼ同年であり、総持学園が女子短大を開設したその翌年には、早くも講習が始まったということになります。それ以来、送り出した修了生は、１万５千人に上るということですから、これは本学として、どうしてもやらなければならなかった使命であったと思わずにはいられません。その当時、開設に当たって力を尽された先生方のご苦労に思いを致すとともに、将来の社会ニーズを見通して決断された学長はじめ関係者の皆さまに感謝の気持ちが沸き起こります。またこの間、長きにわたって夏休み返上で講師をお務めくださった大学内部の先生、外部からお迎えした先生、講師の皆さまに厚くお礼を申しあげます。しかし、なんといっても忘れてはならないのは受講生の方々で、皆さまの熱意と努力に支えられた 60 年間だったと思います。今一度、司書講習をここまで育てて下さった受講生の皆さまにお礼を申し上げる次第です。

それにしても 60 年前といえば、図書館を取り巻く社会環境はどうだったのでしょうか、私の小学校時代を思い出しても、はたして学校に図書館があったのかなかったのか、それさえもあまり記憶にはありません。言い換えれば、それほど存在感が薄かったということでしょう。終戦後 10 年も経っていないのですから、無理もないことかもしれません。その頃の我が家にラジオはありましたが、テレビが入ったのは、大分後になってからです。皆がそうであったように、当然、私も活字に飢えた子どもでした。身近にあるものは手当たり次第、貸本屋で借りたマンガ、紙芝居、物語、小説はもちろん、母の婦人雑誌まで何でも読んでは、それは子どもの読むものではないと取り上げられたりしたものでした。１冊の本を何百人も回し読むのが当たり前だった時代です。

それが、今ではどうでしょうか。図書館も夢のように立派になりました。どんな町にも村にも図書館が整備され、子供達も学校図書館だけではなく、小さいながらも社会の一員として、堂々と利用できるようになりました。子ども時代の私が見たらどんなにかうらやましがることでしょう。

そして、それからまた何年かの時を経て、今度はデジタル社会・ネット社会の到来です。いま、私のイメージできる図書館の範疇を大きく超えて変貌しようとしていますが、この先はどういう図書館になっていくのでしょうか。ネットの便利さの恩恵は十分に受けながらも、さまざまな顔の並ぶ本の背表紙を見ながら、書架をめぐる喜びがなくなることはないだろうなぁと心配な気持ちも消せません。受講生の皆様は、これからどんな図書館でお仕事をされることになるのでしょうか。

さて、最後になりますが、本年総持学園は創立 90 周年をむかえました。90 周年を祝う記念事業も幼稚園・付属中学高校・大学・短大・研究所など学園をあげて開催されます。どうぞ、機会をみて他の部署の企画にも足をお運びください。また、受講生の皆様、鶴見大学を自分の卒業した大学だと思って、これからもいろいろなご意見をお寄せください。皆様のような図書館司書を１万５千人も育て上げたということを本学の誇りとし、これから先、70 周年、80 周年、そして 100 周年と祝えることを希望しております。

はなはだ簡単ではありますが、司書・司書補講習 60 周年記念のお祝いの言葉とさせていただきます。

司書・司書補講習開設60周年を迎えて

鶴見大学文学部教授
司書･司書補講習主任教授　原田　智子

総持学園創立 90 周年にあたる記念すべき 2014 年に、鶴見大学司書・司書補講習は開設 60 周年を迎えました。本学における司書・司書補講習は 1954 年（昭和 29 年）に、文部省認定の司書講習（1956 年から文部大臣委嘱）と文部大臣委嘱の司書補講習として始まりました。60 年間もの長きにわたり、司書・司書補講習を毎年開催することができましたのも、この間に全国から講習に参加されました受講生の皆様、ならびに講師陣の先生方のお蔭と深く感謝申し上げます。歴代の講師陣を見ますと、わが国の図書館界に 大きな足跡を残された諸先生方がお名前を連ねています。

わが国における第二次世界大戦後の司書・司書補の養成は、1950 年４月 30 日に「図書館法」（法律第一一八号）が公布され、同年９月６日に「図書館法施行規則」（文部省令第二七号）が公布されたことに端を発します。この省令公布により司書・司書補の資格を得るものが学ぶべき科目が決められました。

そのような時代に、総持学園が鶴見女子短期大学を設立して戦後の女子教育の養成に力を入れた翌年の 1954 年４月 24 日に、司書・司書補講習を開講したことは、本学が図書館における専門職としての司書・司書補の仕事に深い理解を示していたことの証しであると思われます。短期大学創設の翌年に司書・司書補講習を開講するには、相当の苦労があったようです。本学の講習開始当時は、夜間、土・日、夏期というように様々な形態で授業が行われていたようですが、現在は、７月中旬から９月中旬の２箇月の昼間の集中授業の形態で開講されています。

私は鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科が創設された 2004 年（平成 16 年）に本学に赴任してから、司書・司書補講習に携わるようになりました。社会人である受講生の授業に対する意気込みや質問攻めに、非常にやりがいを感じます。

この 60 年間の図書館の変化も著しいものがあります。戦後の公共図書館は書庫が閉架式であり、利用者は目録カードを利用して、図書館員の方に読みたい図書を出してもらう必要がありました。その後図書館におけるコンピュータ導入により、蔵書検索も OPAC が使用されるようになり、1990 年代初め頃には図書館の入り口付近の目録カードボックスが消えてなくなりました。新聞や雑誌記事もデータベースで検索できるようになりました。1995 年以降インターネットが普及して図書館の Web サイトから様々な情報発信が行えるようになり、現在では Twitter が導入されたり、デジタルレファレンスサービスが行われるようになったりとサービスの種類や方法も多様化しています。

当然のことながら、これらの進展は図書館情報学教育の変化を意味し、図書館員にとって ICT（情報通信技術）の習得は必須になり、本学の講習では他大学にない特色として無料のパソコン講習を時間割の中に組み込んで実施してきています。特に演習科目では、コンピュータなくして授業が成り立ちません。

戦後の動乱期から間もない 1954 年に産声を上げた本学の司書・司書補講習も、時代の要請に応えて、図書館界へ多くの人材を送ってきました。私が日本各地の図書館を訪れるとそこには、本学の講習で司書を取得されたという図書館員の方々のお話を伺うことが非常に多く、思いがけない出会いが生まれております。これも伝統ある鶴見大学の司書・司書補講習のお蔭であると感謝しています。

司書・司書補講習は単年ごとに文部科学大臣（旧文部大臣）の委嘱を受けて開催される事業ですが、本学はこの 60 年間絶えることなく継続して委嘱の認可を受けて参りました。これからもこの伝統を引き継ぎながら、21 世紀の時代に呼応した図書館員育成に努めていきたいと思っています。

目　　次

授業風景 ………………………………………………………………………… (1)
司書・司書補講習案内 / 特別講座案内 …………………………………… (2)
一夏会報 ………………………………………………………………………… (3)
文部省通知文書 / 昭和 30 年頃の司書講習の様子 ……………………… (4)

司書・司書補講習 60 周年を祝して ……………………………… 伊藤　克子

司書・司書補講習開設 60 周年を迎えて ………………………… 原田　智子

日本の司書養成と鶴見大学司書・司書補講習 ………………… 岡田　靖 ……… 1

鶴見大学司書・司書補講習の 60 年間の歩みと将来展望 ………… 原田　智子 ……… 5

鶴見大学司書・司書補講習 60 周年を迎えて　～特別座談会～ ……………………… 13

担当講師の思い出　平塚 禅定・岡野 裕行・小泉 徹・渋谷 嘉彦・武田 元次郎 ……… 19
松本 勝久・岡谷 大・今 まど子・小川 俊彦・田村 俊作

修了生の思い出　山本 宣親・雨森 弘行・外田 祥子・遠藤 征広・中山 昌也 ……… 30
戸塚 隆哉・古根村 政義・鈴木 隆・宮本 嘉彦・北川 恵美子
菊地 由美子・鈴木 恵津子・橋本 典尚

資料 ……………………………………………………………………………… 43
鶴見大学司書・司書補講習年表 ………………………………………… 45
一夏会報について ………………………………………………………… 46
歴代図書館長 / 歴代司書・司書補講習主任教授 ………………………… 48
鶴見大学図書館学講習特別講演会 ……………………………………… 49
鶴見大学図書館学特別講座概要 ………………………………………… 51
司書講習修了者数・期間等一覧 ………………………………………… 54
司書補講習修了者数・期間等一覧 ……………………………………… 55
司書資格の科目・単位数の変遷 ………………………………………… 56
司書補資格の科目・単位数の変遷 ……………………………………… 57
歴代講師一覧（司書） ……………………………………………………… 58
歴代講師一覧（司書補） …………………………………………………… 69

あとがき ………………………………………………………………………… 74

日本の司書養成と鶴見大学司書・司書補講習

鶴見大学名誉教授
前司書・司書補講習主任教授　岡田　靖

１.創成期

日本における近代図書館の創成期を見ると、司書という言葉は 1889 年に公布された東京図書館官制にみられる。そこには司書７人を置くと記されている[1)]。また 1897 年に公布された帝國図書館官制においてもみることができる[2)]。図書館ということでみると 1899 年に図書館令が公布されている。ここではいわゆる公共図書館だけではなく、学校図書館の設置にも触れている[3)]。1900 年には文部省の図書館管理法が出されている。ここでは図書館の業務についても細かく触れられている[4)]。1906 年には図書館令が改正され、ここでも司書をおくと定めている[5)]。これまでの段階は司書の養成ということではなく、図書館というものの施設及び制度的な充実を図っている。さらにこれらの系譜をたどっていくと、1921 年には公立図書館職員令が公布されている。これは何回か改正されたが、1950 年図書館法公布に際して廃止されている。

司書養成という点では日本文庫協会主催で 1903 年に行われた図書館事項講習会が最初にあげられる[6)]。その後 1908 年には文部省主催図書館事項講習会が開催される。日本図書館協会（1908 年日本文庫協会から改称）の第２回図書館事項講習会が 1916 年に開催されている。これらの講習会は新たな司書養成というよりも、現職の図書館職員のための知識と技術向上を目的としている。

図書館学校形式でいえば 1921 年の文部省図書館員教習所開設が最初であろう[7)]。ここの入学資格が中学校または女学校卒業となっていることが図書館に対する意識の表れではないだろうか。これ以降 1925 年には文部省図書館講習所、そして 1945 年には戦争の影響で一時閉鎖となる[8)]。

図書館という観点からも、司書養成という観点からもこれらの事は何れも戦前の話となる。
この文のタイトルからすると戦後の事が中心となるので、これらについては詳しくは触れない。

２.戦後：図書館法公布まで

戦後図書館法公布以前にもいろいろな動きがあった。1946 年には同志社大学図書館学講習所が開設され、1947 年には戦前までの文部省図書館講習所を帝國図書館附属図書館職員養成所と変更して再開した。これはその後帝國図書館の国立図書館への移行、さらに 1948 年国立国会図書館設立に伴い、1949 年文部省図書館職員養成所と名称変更した。

1948 年には司書養成とは異なるが、米国図書館使節の提言から国立国会図書館法が制定され、同年６月に開館した。ちなみに戦後間もない焼け野原の東京で（もちろん筆者もまだ４歳。記憶の外である）国立国会図書館として耐えられる建物はそうはなかったと思われる。現実として知っている者も少なくなってきたが、筆者の高校時代までそこに有ったのでよく覚えている。それは現在の迎賓館であった。また、この年には京都大学にも図書館学校が開設されている。但し、これは１年で閉校している[9)]。

この時期でさらに大きな影響をその後に与えたと思われるのが IFEL(Institute for Educational Leadership) 講習会である。
これは連合軍最高司令官総司令部 (GHQ/SCAP）の傘下の民間情報教育局 (CIE) が日本の教育指導者の養成のために行ったものである。その中に図書館に関する講習も行われている[10)]。
1948 年から 1952 年にかけて８回ほど開催されている。ここではアメリカの図書館事情を中心に講習が行われた。そこで学ぶことにより受講者は日本の現実との比較において大きな衝撃を受けた。その受講者が発行した「IFEL 図書館学」にはその後日本の図書館学の発展、司書養成に大きな影響を及ぼした方々が参加されている。そこにはアメリカの図書館事情に驚きつつ、自分たちの目指す図書館像もハッキリととらえられていた[11)]。

1949 年には関西大学に図書館学講習所が開設され、東京大学では東京大学図書館学講習会が開催されている。1950 年には東洋大学に図書館学講座が開講されている[12)]。

３.図書館法公布以降Ⅰ：講習

1950 年４月には図書館法が公布され、それにともない同年９月図書館法施行規則及び細則が公布された。この法律が後の司書養成に大きな問題を提起した。それについては後程述べる。

図書館法公布によりそれに基づいた講習が行われるようになった。1951 年に初めて文部省による図書館専門職員養成講習の第 1 回が東北大学、東大、京大、名大、九大で開催された。この講習会は 1955 年まで各地の大学で開催された[13]。また私立大学でも講習が行われるようになった。

初期のころとしては愛知学院が 1952 年に、鶴見大学が 1954 年に開催している。その後 1960 年代に入ると何校かが開催し、現在まで継続しているところも、閉講している所もある。1950 年代開講で現在まで継続しているのはこの 2 校だけである。

本来講習による司書養成は当時の状況から現職の職員に専門的知識と技術を持ってもらい、資格を与えるという目的であった。しかし、現実には現職者ではない受講生のほうが多かったようである。本学の講習においてもその傾向は表れている。その傾向はその後も同じ状態である。近年はますますその傾向が強く、現職者はほんの一部というところがほとんどである。社会人になってから図書館に興味を持ち、資格を得て司書を目指す。或いは司書課程のない大学の学生が資格を取りたいために受講する。最近の傾向では派遣会社に登録していて、資格を取得することで有利になるというような理由で受講するというケースも増えている。これに関して言えば我々自身が矛盾を抱えている。それは派遣または委託の職員を増やし、専従者の縮小に拍車をかけることになる。このことについては、委託問題の是非にかかわってくるのでこれ以上は触れない。またここ数年応募者の数が減少傾向にある。原因の一つに就職の難しさがあげられる。そこには委託や派遣との問題があるのは事実である。

直接の司書の養成ではないが、間接的に本学の講習が日本の司書講習に貢献していることもある。その一つが、本学の講習の長い歴史の中で、本学で資格を取得し、さらに勉強を続けられて図書館学の教員となった方もいらっしゃる。これは司書養成の基本的な部分での貢献だと思われる。

もう一つは貢献というよりはちょっとしたエピソードとしてここに記しておきたい。それは新しく開講される大学が本学の講習係を大変頼りにして下さって、何かと申請における相談が持ちかけられることである。申請書類について、施行規則の解釈について、受講資格についていろいろな質問が寄せられる。これは本学が関東地区ではもっとも古くからの開催校であるという事が要因ではある。しかし、古いという事だけではなく、本学の事務局、特に講習係が地道な努力をしてきている証であると思われる。毎年担当者が変わるところもあるようだが、本学は同じ担当者が事務手続きを行っている。これについては賛否あるとは思うが、その経験値によってスムースな運営が可能となっている。このように本学の講習は司書養成という直接の使命以外でも日本の講習に貢献している。

1968 年には図書館短期大学でも司書講習が開催された[14]。この講習は本来の目的に沿った講習であった。対象は原則として現職者に限定され、人数も 30 人程度であった。この講習は 1981 年から図書館情報大学に受け継がれた[15]。この講習も専門養成機関としての図書館短期大学においては内部矛盾を抱えることとなる。図書館学科の助手として専門教育と司書講習の両方を担当し、その後 2004 年に専門教育を中心とした鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科を立ち上げた筆者も矛盾を抱えることとなった。

4. 図書館法公布以降 II：図書館学校

1951 年にアメリカの強い後押しで慶応義塾大学文学部に Japan Library School が開設された。これが日本で初めての大学学部レベルでの継続して行われた司書養成機関である。この後しばらくの間は慶應義塾大学 1 校だけが大学レベルの司書養成機関であった。

1964 年には 3 月文部省図書館職員養成所が廃止となり、4 月に図書館短期大学が設置された。しかし、これはあくまで短大であり、図書館界の熱望であった 4 年制大学のレベルには達していなかった。4 年制大学には 1979 年の図書館情報大学設立まで待たなければならなかった。筆者は 1975 年 8 月から図書館短期大学の最後（1981 年 3 月）まで図書館学科の助手として勤務をした。その経験から全くの私見ではあるが、図書館短期大学は短大とはいえ学生の優秀さは相当なものであったと思っている。それは特別養成課程（別科）だけではなく、図書館学科、文献情報学科の学生諸君についても同じであった。それと共にカリキュラムにおいてもかなり充実していた[16]。それを裏付けるものとして、卒業生諸君の多くが現在図書館界の中枢として活躍している現実がある。

その後でも、関東では東京大学、中央大学、駿

河台大学、鶴見大学でも専門教育の学科なり専攻が設立されている。

５.図書館法の抱える問題点

1950 年に公布された図書館法はスタートから問題点を抱えていた。それは、その第五条に「左の各号の一に該当する者は、司書となる資格を有する。」とある。その第一項に「大学を卒業した者で第六条の規定による司書の講習を修了したもの」。更に第二項に「大学を卒業した者で大学において図書館に関する科目を履修したもの」と明記されている事である。それは司書の資格を得るには大学卒業が条件とされているが、司書養成そのものは大学の授業ではなく講習で行うという意味である。その詳細である科目名や単位数等については図書館法施行規則に規定されている。第五条第二項にある「大学において図書館に関する科目」とは、図書館法施行規則にある司書講習の科目を指している。その授業はいわゆる司書課程と呼ばれる資格科目として開講されている。そのために大学の司書課程は文部科学省の相当科目認定を受けなければならなかった。これは大学の授業として行うが、科目と単位は司書講習の規定によらなければならないという事を意味している。

この基本には司書養成、あるいは図書館そのものに対する日本における認識の問題がある。1921 年の文部省図書館員教習所の入学資格が中学校卒業もしくは女学校卒業となって以来続いているものである。また Japan Library School を設立する際に、アメリカ側の評価としては東京大学に設立したかったようである。しかし、大学での研究対象としての学問という範疇には入れなかったという事も同じ認識ではないだろうか。その後図書館法及び図書館法施行規則は何回か改正をされ、単位数の増加はあったがこの基本線は変化がなかった。

それが第 169 国会（常会）において「社会教育法等の一部を改正する法律（図書館法の一部改正を含む)」が成立し、2008 年６月に法律 59 号として公布された。この改正によって今までの講習中心であった司書養成が初めて大学の学部教育となった。

第五条が大きく変わったのである。それまでは「左の各号の一に該当する者は、司書となる資格を有する。」となっていた。そしてその第一項に「大学又は高等専門学校（最初の図書館法にはこの文言は無かった）を卒業した者で第六条の規定による司書の講習を修了したもの」となっていた。それが改正で第五条が「次の各号のいずれかに該当する者は、司書となる資格を有する。」となり、その第一項が「大学を卒業した者で大学において文部科学省令で定める図書館に関する科目を履修したもの」と変わったのである。第一項からは「講習を修了したもの」という文言がなくなったのである。そして第二項に「大学または高等専門学校を卒業した者で次条の規定による司書の講習を修了したもの」と定められている。第二項で初めて司書講習が出現している。

これは司書の養成は基本的には大学教育の中で行うことを明記している。そのうえで司書講習は、文部科学大臣の委嘱を受けて行う。その科目と単位数は大学の授業として規定されている（図書館法施行規則第一章第一条）ものと全く同じ表が第二章第五条に示されている。この改正で長い間司書講習中心であった日本の司書養成が大学教育のレベルとなった。ここにやっと関係各位のご努力によって、図書館界も「もはや戦後ではない」という時期に到達した。

６.司書養成のこれからの問題点

図書館法改正ですべての問題が解決したわけではない。やはり司書養成には、専門学科での養成、司書課程での養成、そして司書講習という 3 元のスタイルは残されている。本学においても専門学科としてのドキュメンテーション学科、それ以外の文学部の３学科は司書課程で、そして夏期の司書講習となっている。

司書講習も初期の目的に戻ればまだまだ必要性はある。それは司書の資格を持たないのに図書館に配属された方にたいする対策としてあげることができる。もちろん資格のない人を図書館に配属するという人事に問題はある。また司書補についても同じことが言える。省令の改正によって司書補の資格がなくとも司書の講習が受講可能にはなっているが、その条件に合うことも難しい方に対して、司書補、司書への道を閉ざすことなく講習を開催することは意義がある。そこには当然専門職としての知識と技術の修得にはカリキュラムが不十分であるという声もある。しかし、以前は司書講習の科目と単位をもとに行われたが、改正後は大学教育の中のカリキュラムとして省令で定められた科目と単位を実行しなければならない。

それは講習が大学教育と同じレベルで行われなくてはならないということになる。時間としても殆どの講習が90分授業を15回行うことで講義は２単位、演習は１単位を与えている。これは大学の半期の授業と全く同じ時間数である。このように考えると大学の司書課程との違いがどこにあるかという事になる。改正以前でもこの条件は同じであったが、改正以前と後の大きく異なる点は大学教育のレベルで司書養成が行われ、司書講習はそれに付随する形となったことにある。このように考えると改正後は司書講習も大学教育のレベルで行われている。そうすると前述したが、図書館の現場にいらして、司書の資格を取得しようとしている方にとって、大学教育のレベルで司書の資格が取得できる司書講習という方式は大変有効な手段と言える。むしろここで考えるべきことは司書課程、司書講習での資格取得に対してどの程度の専門性を持たせるかという事が問題であろう。

それに加えて専門学科における資格と同じ程度の資格と考えるのかという問題がある。専門学科での養成、司書課程での養成、司書講習での養成を異なるものとするのか。加えて大学院での養成がある。現在ではすべて同じレベル（資格としては）となっている。しかし、すでに資格を持って現職として働いている方については日本図書館協会の認定司書制度がある。これはもちろん資格取得方法による区別ではない。申請者の現職としての仕事に対しての評価である。1970 年代には日本図書館協会図書館学教育部会から１級司書、２級司書なる制度を提案されたが、多くの反対で頓挫した事は筆者にも記憶に残っている。現在であればもっと異なった結果になったのではないかと思われる。これらの事からすべてを同じレベルにするという考えは難しいのではないかと思われる。形はどうなるかわからないが、司書課程・司書講習による養成、専門学科による養成、それに大学院による養成。 この３つの養成をどう段階づけるか、あるいはそのままにしておくのかは、今後の司書養成における重大な問題である。

参考文献

１）東京図書館一覧 . 東京図書館 , 1895. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー , http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/897128.
２）帝國図書館一覧 . 帝国図書館 , 1912. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー , http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1907912.
３）図書館令（明治三十二年年十一月十一日勅令四百二十九号） http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318108.htm
４）文部省編 . 図書館管理法 . 文部省 , 1900. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー , http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991346.
５）法令全書 . 明治 39 年 . 内閣官報局 , 1887-1912. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー , http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/788045.
６）図書館ハンドブック . - 第６版補訂版 . - 日本図書館協会 , 2010. - xvii, 673p
７）同上
８）図書館短期大学史：十七年の歩み / 図書館短期大学［編］. - 1981. - 151p
９）前掲　6）
10）前掲　6）
11）IFEL 図書館学 / IFEL 図書館学会 . - 創刊号
12）前掲　6）
13）前掲　6）
14）前掲　8）
15) 図書館情報大学史 : 25 年の記録 / 筑波大学［編］. - 2005. - xvii, 372p
16) 前掲　8）

鶴見大学司書・司書補講習の60年間の歩みと将来展望

鶴見大学文学部教授
司書・司書補講習主任教授　原田　智子

1．はじめに

第二次世界大戦後の1946年（昭和21年）に公布された現行憲法の精神に基づいて1949年に制定された社会教育法のもとに、1950年４月30日に「図書館法」（法律第一一八号）が公布された。そして、同年９月６日に「図書館法施行規則」（文部省令第二七号）が公布されて、司書・司書補の資格を得るものが学ぶべき科目が決められた。これにより、戦後のわが国における司書・司書補の養成教育が開始されたといえる。1950年３月31日に図書館法案が衆議院本会議で可決成立した翌日の４月１日に、東洋大学は最初に図書館学講座を開講した。そして、1951年４月１日には、慶應義塾大学文学部に図書館学科が開設され、東京大学と京都大学の教育学部に図書館学講座が開設され、天理大学に図書館課程が設置されるなど、わが国における戦後の司書の養成教育が本格的に始動した。

戦後間もない社会的にも未だ混乱の中、1953年４月１日に、中根環堂学長・学園長就任のもとに鶴見女子短期大学国文科が設立された。「図書館学の鶴見」と一般に目される礎を築いた源泉が、この翌年1954年４月に開始された文部省認定の司書講習および文部大臣委嘱の司書補講習であった。

現在の鶴見大学における司書養成教育は、大別すると三種類に分類することができる。一つ目は、歴史的にもっとも長い期間実施されている司書・司書補講習における教育である。二つ目は短期大学および文学部における司書課程における教育である。三つ目は2004年４月に設立されたドキュメンテーション学科における専門科目としての司書教育である。

本稿では、1954年に開始された鶴見大学における司書および司書補の養成教育の60年間の歩みをたどり、現在の状況を確認しながら、将来展望について述べる。

2．司書・司書補講習の開設経緯

1954年４月24日に文部省認定の司書講習と文部大臣委嘱の司書補講習が開始され、開設当時は、これを図書館学講座と呼んでいた。すでに東洋大学では1950年４月より図書館学講座を開講しており、鶴見女子短期大学国文科の開設に尽力のあった松浦貞俊東洋大学教授の進言に基づいて図書館学講座の開設が実現した。また、鶴見女子短期大学の中野愚堂学監が、東洋大学と深い関係を持っていたため、開設にあたっての有用な教示を得ることができた。

初年度の1954年度は、４月から９月までの前期と、10月から翌年３月までの後期の２コースに分けて、それぞれ土曜日と日曜日に集中講義の形式で実施された。そして、この後期から、司書教諭養成コースも設けられ、司書・司書補・司書教諭の３つの資格を与える図書館学講習になった。

２年目の1955年度以降、一般社会人からの要望を受けて、夜間講習が設けられ、前期の期間がそれに充てられて、土・日講習は後期のみになった。加えて、７月と８月に集中的に行われる夏期講習も新たに設けられ、前期（夜間）、夏期（集中）、後期（土・日）の３種類のコースが開設されることになった。このような多様な開設形態は、司書あるいは司書補の資格を取得したいとする人々の高いニーズを満たしていたと思われる。

さらに開設まもない鶴見女子短期大学国文科の学生の司書資格取得希望者にとっても多様な開設形態は好都合であった。短大開設当初の専門科目に「図書館学」（４単位）が設けられていたが、司書資格取得者の便宜を図る目的であったようである。しかし、短期大学の学則には、1953年度入

学生に対しては、図書館司書資格と司書教諭資格は、図書館学講習として、学則外の課程という扱いになっていた。

1956 年３月７日に、司書補講習とともに司書講習においても文部大臣より委嘱を受けることになり、1963年度まで図書館学講座という名称で開講された。その後、図書館学講習という名称となり、1968年度から司書・司書補講習と呼ぶようになり現在に至っている。

一方、1969 年度より、土・日講習が廃止され、５月から翌年１月までの夜間講習と、７月から９月に開講する夏期講習の２種類のコースに整理された。夜間と夏期講習の２コース制は 1984 年度まで行われたが、1985 年度以降は現行の７月から９月までの夏期講習のみ行われるようになった。また、1978年度から、司書補講習は司書講習志願者激増のため対応できなくなり、1984年度まで司書補講習は夜間のみ開講されていた。

表１　1954 年度における司書の開講科目

	科　目　名	講師名
必修科目	図書館通論	武田　虎之助
	図書館実務	和田　吉人
	図書選択法	弥吉　光長
	図書目録法	加藤　宗厚
	図書分類法	加藤　宗厚
	レファレンスワーク	弥吉　光長
	図書運用法	北嶋　武彦
	図書館対外活動	沓掛　伊左吉
	児童に対する図書館奉仕	竹田　平
	視聴覚資料	鈴木　勉
甲群	特殊資料	武田　虎之助
	図書館史	佐藤　博
乙群	社会学	半田　孝康
	社会教育	石田　清一
	ジャーナリズム	中野　愚堂
	図書及び印刷史	松浦　貞俊

３．開講科目の変遷

３．１　1954 年度から 1967 年度

司書および司書補の資格を得るための科目（司書の講習科目）は、図書館法施行規則によって規定されている。図書館法施行規則は、1950年に最初の制定・公布があり、その後、図書館を取り巻く社会環境や時代の変化に即して、司書の講習科目は、３回の改訂がなされて今日に至っている。一方、司書補資格に必要な司書補の講習科目はこの 60 年間にたった１回の改訂がなされたに過ぎない。

当然、司書・司書補講習においては、これらの科目を開講し、受講者が所定の単位を修得できるようにしなければならない。開講科目は、必修科目のすべてを、選択科目は必要な単位数を受講者が取得できる範囲で開講している。表１から表６に示した選択科目については、本学における開講科目を示している。

鶴見大学における開設時の司書取得のための科目および講師名を表１に示す。単位数は「図書目録法」のみが２単位で、他はすべて１単位であった。したがって、必修科目が 10 科目、選択科目甲群が２科目、選択科目乙群が４科目の合計 16 科目 17 単位が開講されていた。これらの科目による授業が 1967 年度まで実施された。講師陣は表１に示したとおりであるが、開設時には武田虎之助学芸大学教授、加藤宗厚国立上野図書館長、松浦貞俊東洋大学教授等が大きく貢献された。さらに 1956 年度から岡田温図書館短期大学長の協力も得られ、充実した講師陣のもとに講習が実施されるようになった。

開設当初の司書補の科目と単位数を表２に示す。司書補の科目は、必修科目が９科目、選択科目が３科目の合計 12 科目 16 単位が開講されていた。科目担当者の記録は、残念ながら残っていないが、司書の科目担当者が多く含まれていたのではないかと推測される。

開講当初における受講生の数は、司書・司書補講習ともに 50 名内外であった。1967 年度は前期（夜間平日）、夏期（７月から９月）、後期（土・日昼間）に各司書・司書補講習ともに 80 名定員

であった。

表２　1954 年度における司書補の開講科目

科　目　名		単位数
必修科目	図書館概論	一
	図書整理法	二
	図書の目録と分類	三
	閲覧と貸出	二
	参考書解題	一
	製本と修理	一
	視聴覚資料	一
	図書館統計	一
	複写技術	一
選択	図書館史	一
	社会教育	一
	ジャーナリズム	一

３．２　1968 年度から 1996 年度

1968（昭和 43 年）年３月 29 日に図書館法施行規則の一部を改正する省令（文部省令第五号）が発令され、同年４月より司書資格の修得科目が大幅に変更された。ただし、司書補資格の修得科目には変更がなされなかった。

鶴見大学で開講した司書資格の修得科目名および単位数を表３に示す。甲群が必修科目で９科目15単位、乙群と丙群が選択科目で各群からそれぞれ２科目以上２単位以上修得し、合計 13 科目以上 19 単位以上の単位を修得しなければならない。

受講生の数は、次第に増加していき、とくに司書講習は 1970 年度前後より希望者が定員の３倍にも及び、選考を厳しくするような事態にもなってきた。1968 年度は、土・日講習 (ただし、土曜日は夜間開講) と夏期講習ともに、司書、司書補ともに各120名を定員とした。しかし､翌年度には、夜間の司書、司書補講習の定員を各 50 名、夏期講習を司書 120 名に変更した。1978 年度には、司書講習は夏期に２クラス編成として合計 240 名の定員とした。司書補は 1978 年度から夜間のみ開講していた。1985 年度以降、夜間講習は廃止

表３　1968 年度以降における司書の開講科目

科　目　名		単位数
甲群	図書館通論	二
	図書館資料論	二
	参考業務	二
	参考業務演習	一
	資料目録法	二
	資料目録法演習	一
	資料分類法	二
	資料分類法演習	一
	図書館活動	二
乙群	青少年の読書と資料	一
	図書及び図書館史	一
	図書館の施設と設備	一
	資料整理法特論	一
	情報管理	一
丙群	マスコミュニケーション	一
	視聴覚教育	一
	社会教育	一
	人文科学及び社会科学の書誌解題	一

され、夏期講習のみになり、司書講習は 100 名または 120 名、司書補 50 名の定員になった。

表３に示した司書の科目のうち､「参考業務演習」､「資料目録法演習」､「資料分類法演習」の３科目は、各３クラス開講して演習の教育指導を充実させた。受講生の大半は一般社会人であり、鶴見大学（1973 年に鶴見女子大学から名称変更）における本講習は社会人教育としても重要な役割を果たしていた。二十歳代の受講生が中心であったが五十歳代、六十歳代の受講生にも年齢層が広がっており、この様子は現在も変わらない。

３．３　1997 年度から 2011 年度

1996 年（平成８年）８月 28 日に図書館法施行規則の一部を改正する省令（文部省令第二七号）が制定・公布され、司書資格の修得科目のねらいと内容、ならびに司書補資格の修得科目とねらいが発表された。また、同日文部省告示第一四九号

をもって、司書及び司書補の講習において履修すべき科目の単位の修得に相当する勤務経験及び資格等を定める告示が公示された。

1997 年度から始まった司書の開講科目を表４に示す。今回の改正省令から、科目のねらいや内容が明記され、これまでの目録・分類等に重きをおいた司書の講習科目の内容から、図書館サービスや情報サービス、レファレンスサービスや情報検索にも対応できる司書の育成にも重点をおいたカリキュラム内容になった。

わが国においても 1995 年以降、急速にインターネットを利用する人々が増え、情報のネットワーク化、コンピュータによる図書館の OPAC の普及等、情報化社会における図書館の役割が変化してきており、21 世紀の図書館員養成に必要な改正であったと受け取れる。

表４　1997 年度における司書の開講科目

科　目　名		単位数
必修科目	生涯学習概論	一
	図書館概論	二
	図書館経営論	一
	図書館サービス論	二
	情報サービス概説	二
	レファレンスサービス演習	一
	情報検索演習	一
	図書館資料論	二
	専門資料論	一
	資料組織概説	二
	資料組織演習	二
	児童サービス論	一
選択科目	資料特論	一
	コミュニケーション論	一
	図書館特論	一
	図書及び図書館史	一
	情報機器論	一

一方、司書補の講習科目のねらいも大幅に見直された。表５に示したように、すべて必修科目となり 11 科目 15 単位となった。この 60 年間に行われた唯一の改正である。新たな科目として「情報検索サービス」が加わり、「製本と修理」と「複写技術」などの紙メディアを対象とする科目は必修科目から削除された。「図書館統計」については各科目内に吸収されたと考えられる。

表５　1997 年度以降における司書補の開講科目

科　目　名		単位数
必修科目	生涯学習概論	一
	図書館の基礎	二
	図書館サービスの基礎	二
	レファレンスサービス	一
	レファレンス資料の解題	一
	情報検索サービス	一
	図書館の資料	二
	資料の整理	二
	資料の整理演習	一
	児童サービスの基礎	一
	図書館特講	一

３．４　2012 年度以降

2009 年（平成 21 年）４月 30 日に図書館法施行規則の一部を改正する省令（文部科学省令第二一号）が制定・公布され、司書の講習の科目のねらいと内容が発表された。また、図書館法が 2008 年６月 11 日にその一部が改正（法律第五九号）された。この改正により、図書館法第五条における司書となる資格を有する者の記載の一項と二項の順序が逆転し、改正後は、以下のように変更された。

一 大学を卒業した者で大学において文部科学省令で定める図書館に関する科目を履修したもの

二 大学又は高等専門学校を卒業した者で次条の規定による司書の講習を修了したもの

すなわち、旧法律では司書の講習を修了したものが先にあり、司書の講習の科目が大学教育でも充当される形をとっていた。

2012 年度の司書・司書補講習より、現行の司

書の講習の科目にしたがい、鶴見大学における開講科目は表６に示す通りとなった。

表６に示した甲群は必修科目で11科目22単位、乙群は選択科目で鶴見大学の司書講習では、４科目を開講し、うち２科目２単位以上を履修できる。表５で示した旧省令科目と比べて、表６で示した新省令科目では、「生涯学習概論」、「図書館制度・経営論」、「児童サービス論」の必修科目である甲群の科目がすべて２単位となったのは、15 年間の教育実績をふまえ、図書館を取り巻く環境の変化を勘案してその履修内容の充実を図ったものである。旧省令科目では選択科目であった「情報機器論」が、新省令科目では「図書館情報技術論」として内容を改めて必修科目となったことも、ICT（information and communication technology）やSNS（social networking service）の現状と今後の活用を考慮されてのことと思われる。乙群の選択科目が大きく見直されたことも今回の改正の特徴であるといえる。乙群の科目数は２科目多くなり７科目となったが、本講習ではそのうち表6に示した４科目を開講している。

表６　2012 年度以降における司書の開講科目

科　目　名		単位数
甲群	生涯学習概論	二
	図書館概論	二
	図書館制度・経営論	二
	図書館情報技術論	二
	図書館サービス概論	二
	情報サービス論	二
	児童サービス論	二
	情報サービス演習	二
	図書館情報資源概論	二
	情報資源組織論	二
	情報資源組織演習	二
乙群	図書館基礎特論	一
	図書館サービス特論	一
	図書館情報資源特論	一
	図書・図書館史	一

現在の図書館において、コンピュータ技術は必須である。本学では、この点を重視し、パソコンをツールとして活用するための第一歩として最低限必要な文字入力スピードとソフトウェアの知識を習得するための無料「パソコン初心者講習」を2001 年度以降継続して実施している。他大学にはみられない本学の司書・司書補講習の特色の一つになっている。

３．５　まとめ

わが国では、図書館に従事する専門職としての司書および司書補の養成教育は、1950年に公布された図書館法と図書館法施行規則の法的根拠のもとに開始され 64 年間が経過している。現在までに、司書資格のための科目は３回の改正を経て科目の種類やそれらの内容について、社会的要因などに配慮し修正・変更しながら改められてきた。

この 60 年間は、印刷物を中心としていた時代から、インターネットによるネットワーク社会やデータベース、電子書籍、電子ジャーナルなどの電子化された資料なども扱う時代へと変化した。図書館で扱うメディアの多様化も著しい変化の一つである。21 世紀の図書館で働く時代の要請に応えられる司書養成が科目の改正にも反映されてきており、その時代の要請に即した講習を心掛け、図書館界に本学の修了生を一人でも多く送ることができればと思う。

４．受講生と講師陣

４．１　受講生と修了生

鶴見大学の司書・司書補講習の受講生は、現職の図書館員、企業などに勤務する社会人、主婦、大学院生など、さまざまなバックグランドをもった方々である。受講生の居住地域も神奈川県と東京都を中心に、全国の地域にわたっている。遠方からの受講生のために、夏期の間、女子寮の一部を提供して希望者に便宜を図っている。

講習開始時の受講生数は、司書と司書補の受講生は各 50 名前後を目安としていた。ただし、初期の頃は、鶴見女子短期大学の学生も受講生数に

含まれていたので、実際の修了者数は 1954 年度が司書 64 名、司書補 46 名であった。司書の修了者数は 1979 年度の 400 名が最多で、司書補の修了者数の最多は 1972 年度の 243 名であった。

年代ごとの修了者数の 1 年間の平均人数を示したのが、図 1 である。図 1 では、実線が司書の平均修了者数を示し、点線が司書補の平均修了者数を示している。司書、司書補ともに、1970 年代の修了者数が多く、司書が 256 名、司書補が 152 名である。1985 年度以降、司書は定員 120 名で募集している関係から、修了者数は平均 130 名となっている。司書補は 2011 年度以降受講者希望が減少している影響で修了者数も減少している。大学への進学率の増加の影響が考えられる。

開講から 2013 年度までの 60 年間の修了者数は、司書が 9,879 人、司書補が 4,988 人の合計 14,867 人である。司書補の修了生の中には、図書館での実績を積んだ後、司書講習を受講し、念願の司書資格を修了した人もいる。

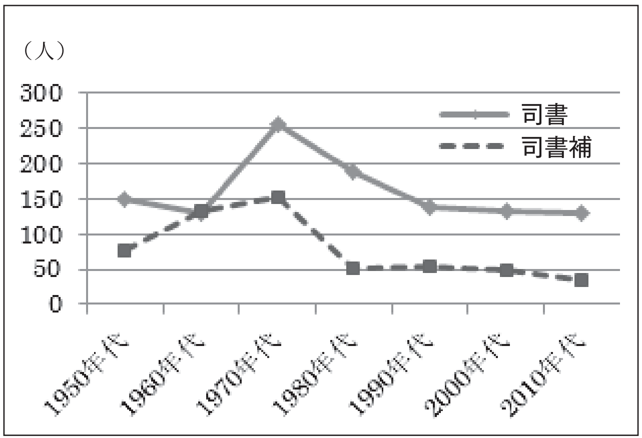


図 1　司書および司書補の年代別平均修了者数

4．2　講師陣

司書・司書補の講習を実践するうえで、その授業を担当する講師陣の果たす役割は重要である。

司書・司書補講習を開設した 1954 年度の科目担当講師名は表 1 に示したとおりであり、当時の様子については前述したとおりである。その後の中心的な講師陣として、武田虎之助学芸大学教授、加藤宗厚国立上野図書館長、岡田温図書館短期大学長等の協力を得られたことは本講習の発展に大きな影響をもたらしたといえる。

1954 年から 2013 年度までの 60 年間に授業を担当した講師の総数は 247 名に及んでいる。図書館界における精鋭された著名な講師陣にお願いし、理論に基づく図書館情報学の知識習得や、実践的な演習が展開されている。この講習に携わった講師の氏名と担当年は資料編を参照されたい。

歴代の講習主任教授は、1963 年 4 月から武田虎之助教授が、1975 年 4 月から岡田温教授が、1980 年 4 月から中村初雄教授が、1982 年 4 月から田辺広教授が、1988 年 4 月から角家文雄教授が、1989 年 4 月から丸山昭二郎教授が、1997 年 4 月から武田元次郎教授が、2004 年 4 月から岡田靖教授が就任されてきた。そして 2012 年 4 月から筆者が就任している。

5．『一夏会報』の発行と受講生の交流

1954 年 9 月に、中野愚堂学監が中心となって、講習生の会として「一夏会」が発足し、機関誌『一夏会報』が同年 12 月に創刊された。

一夏とは、僧がこもって修行する陰暦 4 月 16 日から 7 月 15 日までの 90 日間を指して言うが、開講当時の前期講習の期間がそれと多少重なることから名付けられたという。『一夏会報』は、創刊号から 1956 年 9 月出版の 5 号まで刊行された後、二度休刊している。1961 年 9 月に復刊したが、さらに 1963 年 9 月に再復刊し、その後 2013 年 11 月発行の 63 号まで継続しており、今後も継続して年 1 回発行される予定である。講師や受講生の名簿や集合写真が掲載されていた時代もあり、司書・司書補講習の貴重な記録資料となっている。近年は個人情報保護の問題もあり、講師や受講生の代表の方々の記事を掲載している。

『一夏会報』は受講生の大切な思い出の記録と同時に、ともに同じ目標をもった同志の集まりとなった交流の場としての大きな役割も果たしている。さらに、当初から現在に至るまで受講生同士はもちろん、講師と受講生の交流の輪が受講中を通じて広がり、講習が修了した後にもずっと交流が続いているという話を聞くことが多く、教師冥

利に尽きる嬉しい話である。例年、開講式では緊張しながら静かに開講式を待つ姿が印象的であるが、２ケ月後の閉講式の時には、友人の輪が広がり大変賑やかな様子に交流の輪の広がりを嬉しく拝見している。

６．特別講座の開催

鶴見大学の司書・司書補講習では、単に司書・司書補の科目修得だけに留まらず、図書館員として幅広い知識や世界的な視野に立った現代の図書館動向を知ることを目的として、特別講座を開催している。

今から33年前の1981年度に、最初の「図書館学特別公開講座」を、司書講習修了者の現職者向けに、講演会的な公開講座を４日間、100名定員で、２日間ずつ２名の講師によって開催した。その後 1983 年度から、より実務的、継続的な指導を目指し、「図書館学特別上級講座」を２コース開催し、定員を 30 名として５日間開催した。この時、司書講習修了者、司書補講習修了者あるいは大学・短期大学で司書課程を修了した者という受講対象制限を設けていた。

1990年度には、第12回図書館学特別講演会が開催されたが、同時に９月から 10 月にかけて、上記の実務的な講座の名称を「図書館学特別講座」と改めて、3 コースの特別講座を開催した。主に目録データベースに関する「情報処理」、古典資料の収集・整理・保管方法などの「古典資料」、蔵書保存の課題と対応の「資料保存」の３コースに関して５日間から 10 日間開催し、各コース 50 名定員として本学教員および外部講師による実践的な講座が開講された。

その後、大学図書館、専門図書館、公共図書館におけるコンピュータ化や電子図書館に関する図書館サービスに関する新展開についての講座を 50 名定員で開催しており、2000 年度まで継続された。2001 年度から 2004 年度までは、特別講座の開催は休止されたが、2005 年度から司書・司書補講習期間中に講演会形式の「特別講座」を再開した。

2005 年度から 2012 年度まで、鶴見大学ドキュメンテーション学会との共催で、海外から講師を招き、「鶴見大学デジタルライブラリー国際セミナー」という名称で「特別講座」を開催した。この間、シンガポール、米国、台湾から８名の講師を招いて、諸外国における最新の電子図書館やデジタル時代の図書館事情について講演会を開催した。2013 年度には国立国会図書館の国会議員への立法補佐サービスについての講演会を開催した。

2014 年度は「特別講座」の代わりに、60 周年の記念式典、記念講演、祝賀会を開催する予定である。

このように、鶴見大学の司書･司書補講習では、単に文部科学省で定められた科目に留まらず、その時代に必要な知識や演習、見学等を含めて、継続的な現職者教育も実践してきた。また、海外における最新事情の講演会を開催し、グローバル社会における図書館事情を知る機会を設けてきた。司書あるいは司書補資格取得を目的にしていた受講生にとって、新しい時代に即した図書館の役割や在り方についての興味や関心を提供する良い機会となっていると思われる。

７．将来展望

2014 年度司書および司書補の講習実施大学は、司書が 12 大学、司書補が５大学である [1)]。司書および司書補講習共に開催しているのは鶴見大学を含めて５大学である。桃山学院大学以外は、すべて７月から９月までの夏期に開催している。毎年文部科学大臣の委嘱を受けて開催されるが、隔年で開催している大学もある。

わが国における司書資格取得者は毎年 1 万人を超えるといわれている一方で、2013 年度の公共図書館で働く図書館員の司書保有率は [2)]、専任職員が 52.7%、兼任職員が 10.5%、非常勤職員が 68.0%、臨時職員が 39.8%、委託・派遣が 56.3%、図書館長が 19.4% である。すなわち、専任職員、非常勤職員、委託・派遣では 50% を超えているものの、兼任職員や図書館長の司書保有率は非常に低い数

値を示している。

図書館法第四条によれば、司書および司書補は、次のように定義されている。

図書館に置かれる専門的職員を司書及び司書補と称する。

2 司書は、図書館の専門的事務に従事する。

3 司書補は、司書の職務を助ける。

このように、司書および司書補は専門的な業務を遂行する図書館職員である。そのためには、当然専門的な知識や技術を持って、その業務を遂行しなければならない。しかし、現状では図書館職員全員が司書・司書補の資格を有しているわけではない。ここに、司書・司書補講習の役割が存在する。現在、司書補資格は講習による取得方法しかない。一方、司書資格取得の場合、短期大学では２年間、四年制大学では４年間で学習する内容を、約２箇月という短期間で修得するには司書講習が有効である。2008 年の法改正により、図書館法第五条で、大学を卒業した者で大学において文部科学省令で定める図書館に関する科目を履修したものが、第六条の司書及び司書補の講習より優先されるようになった。司書資格取得のための単位数も４単位増加して 24 単位以上となった。そのため、司書講習のような集中講義では、じっくり学ぶことが難しい反面、科目間の内容の連携などは理解しやすい場合もあるであろう。

図書館は生涯学習の場であり、読書や娯楽など個人の生活文化を向上させる場でもある。また、インターネットでは不十分な情報を獲得できる場でもある。21 世紀の図書館は、能動的に情報を発信する場でもある。わが国においても IC タグ導入館が少しずつ増えてきており、自動貸出機の設置館も増えてきている。司書や司書補が図書館のプロフェッショナルとして、21 世紀のデジタル時代にできる人的な図書館サービスがますます求められているのが現状である。

鶴見大学の司書・司書補講習においては、21 世紀の進展するデジタル時代に有能な力を発揮できる司書・司書補の養成に力を入れる必要がある。それと同時に、以前実施していた現職の司書・司書補講習修了者に対するリフレッシュ教育を実践するために、講演会形式以外に継続的な「特別講座」の再開を検討していく必要があろう。図書館という情報サービス機関で働く人材育成に必要な継続的な教育は、図書館の現場で経験を積んだ人々に、プロフェッショナルとして上位のステップに一歩踏み出せる機会を提供するものである。省令科目だけに留まらない、新しい時代の要請に即した司書養成教育体制が今後ますます求められていくであろう。

鶴見大学における 60 年間の歴史と伝統を礎にして、21 世紀の図書館職員養成に新たな一歩を踏み出す時が、今、始まったのである。

引用文献

1）平成 26 年度司書及び司書補の講習実施大学一覧． http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/03/24/1291933_1.pdf （参照　2014-6-30）

2）日本の図書館統計　http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/ 図書館調査事業委員会/2013_p24-25.pdf （参照　2014-6-30）
数値は、統計データから筆者が割合を算出。

参考文献

1）「鶴見大学の歩み」編集委員会編 . 司書・司書補講習 . 鶴見大学のあゆみ .1979,p.86-91.

2）堀込静香 . 司書講習と特別講座―図書館学の鶴見といわれるようになって　特集図書館学教育の現状と今後の展望 . 図書館雑誌 . 1995,Vol.89,No.6, p.434-435.

3）丸山昭二郎 . 司書・司書補講習の 40 年 . 一夏会報 (40 周年記念号).1994,44 号 ,p.2-4.

4）丸山昭二郎 , 他 . 鶴見大学の『図書館特別講座』について　特集／研修 . 現代の図書館 . 1993,Vol.31,No.3,p.171-178.

鶴見大学司書・司書補講習60周年を迎えて
～特別座談会～

平成26年5月16日　鶴見大学会館に於いて

平成26年5月16日、鶴見大学会館に於きまして鶴見大学司書・司書補講習60周年にあたり有岡章氏（元鶴見大学入試センター参与）、原田智子氏（鶴見大学文学部教授）、岡田靖氏（鶴見大学名誉教授）、長谷川氏（鶴見大学学術情報事務長）を迎え特別座談会を開催いたしました。

鶴見大学における司書・司書補講習について時代背景をふまえ懐かしいエピソードや創成期の講習の様子からこれからの講習の展望など白熱した内容の座談会となりました。

司会　本日は60周年ということで有岡様、岡田先生、原田先生、長谷川様に、鶴見大学における司書・司書補講習の全体像、発端から現在に至るまでを中心にお話を頂きます。

有岡　短大が発足したのが昭和28年で、ものすごく大変だったんだと思います。この頃は。当時のいろんな人から話を聞いて、知るところだけなんですけれども。建物もない、人がいたかもしれないけれど、もっと前を言えば鶴見女子高校。それが母体なんです。その上に短大をつくった。

司会　どうぞ詳しくお願いします。

有岡　中根環堂先生が中心なんです。中根先生は、高校が出来上がって、次に短大を作るというときに、相当苦労されたと思うんですけど。高校の施設だとか、やっと何年か経って、今の歯学部の位置にあったところには小さい木造の校舎が二棟くらいあって、ここから離れてるんですけれど、そこに校舎を作って、それは文学部をつくるためにつくったんじゃないかと思うんですけど。寮なんかを利用しながらやったとか何とかっていう、とにかく物が何もなかった。だから歯学部の時も大変だったかもしれないけど、この最初っていうのは何もないところから生まれた大学だというくらいです。

總持寺が関わる大学っていうのはそういうことだと思いますけど。それで短大を発足させて司書講習というものがあるということがわかってですね。これは東洋大学がすでに開講していました。地方の学校も多かった。やっぱり地理的には近い東洋大からいろいろ教わったり、借りたり、人の応援を願ったり、そういうことはやりやすかったらしいです。その力添えも大きかったと思います。それで中根先生は少しでも、大学をつくっていくためにいろんなことをやりたかったわけです。

国文科でスタートしてますから、あんまり大学を設置する趣旨から離れたものをいきなりやるというのもいかがなものかというので、司書講習は大いに結構なものじゃないかと。

司会　どなたが中心となってですか？

有岡　松浦貞俊先生。その方が、鶴見がまだ短大をスタートしたばかりでいろんな提言をして下さった。それからこちらの、中根環堂先生の右腕っていいますか、学監として仕事した中野愚堂先生が東洋大学と非常に関係が深くてそういう繋がりでいろいろ教えてもらったということです。東洋大学自体もやっぱり中心的に担当していた人は和田吉人先生だっていいますからね。

司会　そういたしますと鶴見における司書講習の立ち上げ当初は東洋大学がモデルになったと考えてよろしいでしょうか？

有岡　はい、モデルはそうです。ただ、事務的なことは中野愚堂先生が中心です。

長谷川　なるほど。当時は愛知学院も開講していたのですか？

有岡　はい。ただ愛知学院は場所的に遠いですしね。

司会　関東ではその当時はどれくらいあったのですか？

有岡　これはあんまり記憶が定かでないけど、特に司書教諭の講習は国立大学が何校か開講していたようです。

岡田　東京では東大とか慶應とか、そういうところが戦後すぐ司書講習を一応やっている。でもそれは続いてないんですね。しかも文部大臣委嘱の講習というよりも、自分たちで始めたような形なんですね。昭和26年に慶應のライブラリースクールが出来てたちきえになったんじゃないかな、そういう講習は。で新たに文部大臣委嘱の講習が、今有岡さんがおっしゃったように鶴見や関西では桃山が始めたんじゃないですか。

有岡　時期的にはだいたい同じくらいじゃないかな。

司会　当初講習が立ち上がったときに、遠方から来られた受講生さんたちや先生方の手配等で大変ご苦労されたと思われるのですが。

有岡　そうそう、それが大変。先生方も受講生も人を集めることが大変。大学が、中根環堂先生も、それから中野愚堂先生も、図書館プロパーの先生じゃないんですよ。しばらく経って武田虎之助先生が来るまでは、本当に伝を辿りながら人を集めてきた。とにかくスタッフを集めた。それから今度は受講生ですよ。受講生集めるのも大変だった。

司会　受講生の方というのは学生さんが多かったのでしょうか？それとも一般の仕事されてる方？

有岡　本当は司書講習ですから一般の方を募集したかったんですがなかなか集まらなくて、学生を入れざるを得ない。それから学園の、中高の先生や、大学の職員、その人たちにも受けてもらいました。

司会　夜間コースというのもやられていたのですか？

有岡　ずっとやっていたんです。15 単位の時代は夜間講習と土日講習と夏期講習と、一年中やっていた。

長谷川　４月から９月が夜間コースで、７月８月で集中をやって、10 月から３月までは土日講習をやってたんですね？

有岡　だからそれくらいで終わってたから、一年で三つもやれたんです。少し重なるときもありました。あれだけ受講生集めるのに苦労したにしては、もうちょっとコンパクトにしたほうが経営的には良かったと思うんですけどね。とにかく中根学長以下が熱心だったんです。司書教諭など、どんどんどんどん広げていくというような。

司会　創成期の話ですが、一番苦労されたことはございますか？

有岡　うーん。直接私もいないから、わかりませんけれど、想像するにはやはり人の問題でしょうね。

司会　先生の手配？

岡田　そうですね、当時図書館のことを教える先生がいなかったんですよ。で、図書館職員養成所とか、その前の、戦前にやった、図書館職員教習所があったんです。それともうひとつは関西に青年図書館員連盟というのがあって、そこの出身の人たちが、その後図書館短期大学で教えていた。ですから当時、最初のほうに言った、昭和 26 年に慶應のライブラリースクールが出来て、その後に、慶應のライブラリースクールは続いてますけど、まだ大学院も出来てなくて、ですからそういう時代の人たちがずっと教えてらしたんです。だから僕たちもそれに近い方に教わったというか。

有岡　養成所の卒業生っていうのはいっぱいいました。

岡田　いましたね。もう今は、ほとんどが大学院出て、慶應とか東大とか筑波大とかの人が多くなった。当時はそんなことないですから。戦後すぐで、教員を集めるのが非常に大変だったらしいです。

有岡　さっき言ったように図書館のプロパーの人がいませんから、東洋大学に頼んで来てもらうというのが最高なんですよ。それで先生がきちっと埋まるかどうか。

司会　当時の講習受けられた方というのは、その後のお仕事はどういったところの図書館が多かったのでしょうか？

岡田　現職者の人も多かった。

有岡　多かったのではないですかね。だから後で出て来るんだけれども、司書講習に対する批判論等は現場の人を再養成するという目的とは全然違うんじゃないかということも反対の理由のひとつだったと思うのですよ。

長谷川　最初から受講生は集まったですか？

有岡　そんなに集まるわけはない。だけど図書館短大はそれだけでやれたんだよね。人数が少ないし。

岡田　少ないですね。図書館短大の講習は 30 人くらいですからね。全然規模が違う。図書館情報大学もやっていましたけれど、僕が鶴見へ来て２～３年目にもう筑波の図書館情報大学は講習止めた。だから初期の講習は要するに日本には図書館学はないし、養成機関もないし、アメリカの図書館っていうものを見て、やっぱりコレじゃいかんっていうので始めたんですよね。国立国会図書館が出来たそのしばらく後に、1950 年くらいかな。日本の国会図書館の人たちがアメリカに行っていろいろなものを見てきたことも大きな影響を与えているんですよね。

有岡　その辺の話は大事な話なんですよね。うちの話だけでなくて、背景というのはそれは非常に大事です。

司会　当時は図書館に司書講習を受けなかった方も図書館で働いていらっしゃったということですか。

有岡　そりゃもちろん。

岡田　それはたくさんいましたよ。

有岡　多分採用の仕方もそうでしょう。この資格があることが採用の条件ではなかっただろうから。

原田　昭和 25 年に図書館法が出来て、そこで司書とは専門職であるということが条文に書かれて、そこからですよね。

岡田　戦前にはそういう資格がなかったんですよね。

原田　図書館で働く人はみんな図書館職員だけれど、司書は公共の図書館に勤める専門職ですというのは初めて図書館法で明記されたわけです。それが昭和 25 年、1950

年です。それに図書館法施行規則のところに、図書館司書の科目が規定されて、その後３回変わっています。

司会　司書講習の役割と、司書講習を受けて職場でどういうアドバンテージがあるのかをお聞きしたいと思うのですが。

有岡　司書講習の役割って言うのは本学の役割ですか？本学は対社会に対する役割ですかね。それだとだいぶ意味が変わってくるわけだけれど、古い話をしますと、總持寺が能登から鶴見に移ってきたんですよ。能登の總持寺が火災で全部燃えちゃって無くなっちゃったんですね。そこで、跡地に再建するより布教に力を入れるためにも、時代を見据えて、首都圏に移転したのです。この布教というのが、設置母体である總持寺の大きな役割で、そこで、布教するには学校がいいということになって大正時代に学校をつくられたんですよ。そういう風にして少しでも世の中との接点をいろいろな形でつくりたかった、ということはありますね。司書講習もやっぱりそれは変わらないんですよ、その点は。
　その当時、さっき言ったように、夜間でしょ、夏でしょ、土日でしょ。もうその仕事に専従しないと仕事がさばけないんですよ。そういう職員は今いないと思います。

長谷川　日曜の授業のときには有岡さんも出勤したんですか？

有岡　もちろん。教室に行ってね、石炭くべるんです。火が消えないように。

長谷川　そのときは後期が土日だったから…。

有岡　土日コースで来ている人、夜間コースで来てる人、夏に来る人、っていう感じで。こちら側としては１年中やってたような感じ。

岡田　だから有岡さんは年中休みなしでしたね。

有岡　いや、やってるほうは大変ですよ。事務員がいろいろしなきゃいけませんしね。

司会　基本的な質問なのですが、司書と司書補というのは分けられているようなのですが、こちらはあの難易度が違うのですか？

有岡　受講資格が違うんですよ。

原田　司書補は高校卒業なんです。司書は日本の場合は短大あるいは大学卒以上の資格が必要なんです。だから高卒の人は司書をいきなり取ることは出来ない。

司会　高校卒業の方が司書を取りたい場合は？

原田　司書補をまず取って、３年以上実務経験があると、今度は司書の講習を受けることが出来るようになる。

長谷川　連絡会の話を聞かせてください。

有岡　よく続いてるなと思って感心している。

長谷川　それは何のためにやり始めたのですか？

有岡　いや、やっぱりよそがどうしてるのかなっていうのがみんなあったんだよ。それで最初は別府の中川さんなどがいらして、受講料はどうとか、そんな話も本当はあった。でもそれも大事なんですよ。

岡田　そうですね。今や結構、司書・司書補講習開講大学連絡協議会で話しているみたいです。

有岡　そうですか。

岡田　特に平成８年ですか、省令改正があって、単位数が変わったでしょ。そのときにずいぶんどうするっていうのはやっていましたね。

有岡　受講料をどうするかっていうのは、大学によっていろいろ事情が違ってるんですけど、受ける側にしてみれば関係ないんですよね。そりゃ高いより安いほうがいい。だからそこはね、あんまり事情があってもなるべく近い、この範囲でやったほうがいいんじゃないかとか、そういう話はするんです。

司会　一夏会報というものが、資料に昭和 29 年 12 月と書かれてありますが、これも立ち上げ当初から創刊されているのですか？

有岡　はい。途中ちょっと途切れたこともあるかもしれないけれど。それは受講生が集まって自主的にそういう会報をつくったんですよ。それで一生懸命に熱心にやってるときはいいんですけれども、やっぱり時間が経つとなかなかみんな集まりませんよね。結局大学がそういうところをバックアップしようということになって続くようになったわけです。

司会　司書の資格を取るのに講習の他に学科や課程があると思うのですけれども、やっぱり講習の方が期間が短いということもあって他に比べて大変なこともおありでしたか？

有岡　学科や課程と講習とはっきり別れてきていて、本来はそうでなくてはいけないのですけれども。大学の学生が受けるというのは授業に組み込まれてやりますので、それは扱いが全然別なんです。皆さんも大学のときに教職課程ってあったでしょ？あれと同じです。教職課程と同じように司書課程があって、少し難しいことを言えば平成 18 年までは司書講習が中心で、それに基づいて学内の司書課程が作られたんです。

岡田　要するにそういうように学生でも取れるし、社会人でも取れる。社会人が取れるのが司書講習になったと。だからそういう意味でいうと、司書の資格を得るには司書課程が大学にもあるし、その他本学のドキュメンテーション学科だと、それが専門の学科ですから、専門科目として卒業所要単位になる。そういう養成もある。それに司書講習もある。ですから今、創成期の頃は司書講習

しかないという時代だったわけです。あとはさっきいったように昭和26年から慶應のライブラリースクールが出来て、やっとそこで日本の正規の図書館教育が始まったといわれているんです。

司会　有難うございます。

原田　あとは図書館短大ですね。

岡田　はい。図書館短大が国立の専門の職員…、図書館職員養成所というのがあって、母体がそれで、昭和40年にそれが短期大学になった。それが図書館情報大学になって…、という道のりもありましたね。

「別科」というシステムが司書課程だけでなく、国立大学のいろいろな所にありました。図書館短大の学生だけではなく、一般社会に出て、もしくは大学卒業した後に入学し、１年のみのコースです。

原田　１年で資格をとってしまうんですよね。

岡田　そういうコースもありました。今はもうありませんけどね。

司会　同じ資格を２ヶ月でとか、１年でというのは、何が違うのかなと思ってしまうのですが。

岡田　それは我々の間でも非常に問題になって、例えば、こちらの原田さんと僕が、専門の学科でも教え、司書課程でも教え、司書講習でも教えるという大矛盾を抱えながら教員をやってたわけですよ。それはもうある一部の、我々の仲間の先生たちは司書講習が日本の図書館学教育をダメにしたという考えの方はかなりいます。

原田　ただ、日本の場合は図書館に勤めるための資格というと、司書課程が一番日本の大学では多いんです。しかし、すでに卒業した人が取るチャンスがないから司書講習で取るというのもひとつの方法としてあるわけです。あとは専門で勉強しようという人は慶應ですとか、何箇所か専門として学べる大学にいくことになります。

岡田　一応鶴見も入れたほうがいいんじゃないですか？

原田　そうですね、うちも。鶴見大のドキュメンテーション学科は今年10周年ですけれど、何箇所かあるんですね。図書館実習は選択科目なので、博物館と違って必修ではないので、しているところとしていないところがあります。

岡田　逆に言うと図書館実習を必修にしているところは、僕の知ってる限りでは昔は東海大学しかなかったです。慶應は図書館・情報学科という専門の学科ですから。これはもう必修でした。

原田　資格取得者は、年間だいたい10,000人から12,000人くらいといいます。

司会　OBの方からお便りとか来るものなのでしょうか？

原田　来ることありますね。つまりここの講習を受けた後、こういうところに勤めて仕事してますよ、とか。時々いただきますね。

司会　60周年を迎えるにあたりまして、他の大学の方から鶴見大学の司書講習を参考にしたいとか、教えていただきたいとか、そういったご依頼というのはあったのですか？

有岡　新しいところはほとんどそうでしょう。聖徳もそうだし、亜細亜もそうだし、聖学院も同じでしたね。

岡田　そうですね。特に地方の女子短大とか、そういうところは、それをひとつの売りにして。コレは実は現代でもそうなんです。学生を呼ぶために司書の資格が取れますよというのがかなりあります。

有岡　あんな苦労をみんな、簡単に講習をやれるわけない。

原田　まずは教科書だとか辞書だとか、いろいろな関連資料を備えなければなりません。今までの講師の先生のお名前を拝見して本当にビックリしました。私も本学にきて11年目ですけれども、ここに来るまでは、鶴見大学というと司書教育で有名というのはもちろん知っていたのですけれど、具体的な講習のことまでは知らなかったので、先輩に申し訳ないです。ここに呼ばれるまではわからなかったんですけれど、私もお名前を見たときに凄いなと思いました。もちろん私もよく存じ上げてる先生方も多いですけれど。相当質の高い講習をしてたのではないでしょうか。

司会　鶴見大学の講師の先生を当初集める打診をされたのは有岡さんのお役目でしたのですか？

有岡　いやいや、それは今までやってた先生の繋がりがありますから、その先生方にお願いして。それで今話が出ました、主任教授がおりまして、今は原田先生ですが、当時もそういう方がおられたんですね。それ以前はそういう立場の方はいないんですよ。さっき言ったようにプロパーの先生がいませんから、せっかく来てもらった先生方を引き止めておくだけの力があったかどうか、そこが問題だったんですよ。誰かに言われたから来たとか、一年だけやればいいだろうとかね。そんな人も中にはいたかもしれない。で、それでそういう意味でも大変だったんですけれども、その主任教授で武田虎之助先生が来られてからですね、それから固まっていくわけです。講師をほとんど決めるのは主任教授の先生が全部決めます。実際の主任教授を誰がやるかが大きな問題なんです。誰でも出来るものではない。

長谷川　主任教授というのは？

有岡　武田虎之助先生が鶴見の主任教授になったということは、もう館界では有名な先生ですからね。それで、鶴見の名前が上がったのも間違いないんです。それまでは何となくやっていた先生方も、あの先生が鶴見に来るなら…。そういう面がものすごく大きかったです。

司会　武田先生は鶴見にいらっしゃる前はどちらの大学に？

有岡　前はね、東京学芸大学。東洋大学にもいらっしゃいました。その前には文部省にいたんです。それで武田先生はご高齢でね、昭和 49 年に亡くなられて、武田先生でかなり順調にいった時に、次は誰か。それがやっぱり後続くか続かないかの大問題だった。それが岡田温先生だった。この先生がまた、図書館のエリートですよね。あの、帝国図書館、それから国立国会図書館、図書館短大というようなところで責任者といいますか、それこそ図書館界で知らない人はいない。そういう人が２代続いた。これはものすごく大きいですね。鶴見の講習の最大の特徴じゃないでしょうか。

司会　鶴見大学の図書館。すごく貴重な文献がたくさんあるとお伺いしたんですけれども、そちらとこの講習は関係があるんですか？

有岡　図書館は実習、演習の場ですよね。そういう意味ではありますよ。

原田　貴重書というか、特にレファレンス、今は情報サービス演習という科目になりましたけれども、その前のカリキュラムまではレファレンスサービス演習だったんですけれど、レファレンスブックで調べ物をしたりという演習は、鶴見はかなりレファレンスブックが揃っています。

岡田　貴重書というのが約 12,000 点かな。特に源氏物語関係とか、シェイクスピア関係とかあるんですけど、この規模の大学としては異例にあります、それは確かに。それは先ほどちょっと言ったように大学側が図書館というものをどう考えていたか。司書講習も含めてね。だから司書講習に力を入れてると同時に図書館にも力を入れてくれたんで、さっき有岡さんがおっしゃった武田虎之助先生のような方を呼んでくるとか。それからその図書館の予算も、その当時古い時のことは僕は知りませんけれども、僕は 33 年前に赴任して来た当時から、当時３～４万の大学の学生がいる図書館と同じくらいの図書館予算を学校側が認めてくれていた。ということで、貴重書も集めやすかった。それとともにそれを、集める人材も図書館の中で、それは有岡さんもかなり関係してらしたと思うんですけど、養成をして、でその人たちが集めたということがありますね。貴重書の集め方も有岡さんが事務にいらしたときにはかなりなされたんじゃないですか？

有岡　図書館作る話は昭和 40 年後半か、もっと後の昭和 50 年代…。

岡田　うちの父がここに赴任した当時に図書館を作ろうという話があって、それで呼ばれたみたいなことを。

有岡　それで当時、三輪先生が学長で、やっぱりその図書館学をやっている鶴見にふさわしい図書館にしてくれと。コレはやっぱり大きいんですよ。みんなの前で学長がそういう発言するってことは。それはねそんなのは必要ないんじゃないかとかそんなのいっぱいありましたよ。で、あの中に研究室全部入れるという話もありました。そういうのを鶴の一声っていうのかな。それで、ああいう図書館が出来た。我々は図書館学関係の先生方に実際の演習のためにどういうような設計にするのか注意した方がいいかって話は、建築中にはずいぶん話しましたよ。

岡田　また、それも今。短大が出来たことも、もちろんあるのでしょうが、ここですぐに講習をやったということがずっと 60 年続いている。その続いている理由がずっと来ているんです。

司会　司書講習は現在も、充実されてるものですけれども、60 年間やられてきて、今現在のあり方と、社会に出たときの役割だとか、近年インターネットや新しいビジネスが出ていると思うのですけれども、そういったことをどう考えていらっしゃるのかお聞きしたいですが。

原田　日本でインターネットが一般に普及して 20 年くらいですよね。ですから当然もう岡田先生が就任されていらっしゃる頃からデジタル時代に強い図書館司書を養成しなければいけないと思っていました。まずはコンピューターを操作出来るということで、パソコン講習を無料で岡田先生が最初講習されていたのですけれど、今は持ち時間の関係で、他の方に講師をお願いしています。うちは講習を無料で 10 コマしています。特に、中にはまだちょっとキーボード操作が容易でない方もいらっしゃるので、そういう方は必ず受けてもらうことにしています。初心者の方には必ず受けていただかないと演習科目で難しいです。これは本学の講習の目玉商品のひとつになっています。他の大学ではしていても、１コマくらいです。講習の中に、文部科学省の指定の科目以外にそういう時間を設けているわけです。これからの図書館というのは、利用者にその本を貸すだけではなくて、情報サービス、レファレンスサービスにも力を入れなくてはいけません。ホームページも全ての図書館にありますので、情報発信も出来るような司書の養成に力を入れています。司書講習の開催校で、これだけのパソコンの授業を実施してるところは他にはないと思います。

岡田　ないですね。２～３回の講習やるところはあるんです。結構あるんですけど、うちは 90 分を 10 回やるんですよ。無料でね。というのは、みなさんはどう思ってるのかわからないけど、世の中一般的に報道で伝えられるように、世の中の若い者あるいはほとんどの人がキーボード叩けてコンピューター出来ると思っているのは、誠に大嘘です。ほとんどの人が逆に出来ない、という現状です。こんな現状を僕は突きつけられて、「あーこれは授業にならねーや」で、僕さっきちょっと年代間違えたみたい。平成８年に省令が改正になって、さっき 18 年って言ったような気がする。平成８年に省令改正になって、コンピューターを重要視するようになったんです。そして、平成 22 年にまたさらに変わった。コンピューターも、今、原田さんがおっしゃったようにコンピューターを非常に重要視しているのです。

原田　今の図書館は印刷物だけではなくて、新しい図書館に行かれると分かると思うんですけれども、自分のパソコンを持ち込んで自由に使える場所が提供されていて、Wi-Fi が使えるところもあります。インターネットも印刷物もみんな使える環境が増えていますから、当然それに対応できる、利用者に対してそういうサービスをいろ

いろ出来る司書がいないといけません。そういう意味では当然パソコンの基本操作が必要になります。

長谷川　有岡さんの時に始められたアドバンストコースもやっぱり時代の要請ですか？

有岡　修了生だけでやるとなかなか成功しないかもしれない。全部含めていいですよ。丸山昭二郎先生はそういう考え方。それでいいと思う。

長谷川　アドバンストコースも別に参加無料でみんな完全公開ですね。

原田　今は司書資格を取るための講習ですけれど、今後はもしかすると、そういうリカレント教育というか、その上に、実際に現場に立って何年か実務経験をした人のための教育も必要になるでしょう。

岡田　10 年くらい前までやっていましたが、いつの間にか立ち消えた。

原田　文部科学省が決めている、今、13 科目 24 単位以上、その前の平成８年の改正のときは 14 科目以上 20 単位以上だったんです。だから４単位増えているので、かなり講習の授業がキツイです。２ヶ月でやるというのは。大学で実際に教えている講師の先生も多いわけです。兼務という形です。そうすると、大学側も文部科学省から 15 回授業しなさいという縛りもあって、どこの大学もやりくりに困っています。

司会　この２ヶ月っていう期間は、文部科学省で決まっているのですか？

岡田　期間は決まってないです。

司会　司書講習の時に使用するテキストは、毎年改訂されるのですか？

原田　市販のテキストを使われる方もいらっしゃいますし、ご自分で作られたものを配布される先生もいらっしゃるので、それは先生にお任せしています。もちろん授業科目間の調整はやります。ですから大学と同じで講義要項を書いていただきますし、評価方法ですとか、大学のシラバスを作るのと同じようなものを作っていただいています。それを受講生に配布しますし、授業の最初にはオリエンテーションでお話をしないといけないわけです。あとは参考書ですとか、ビデオを使ったりとか、授業方法は全て担当講師が決めます。演習科目ですと、演習を実際にやるわけですけれども、講義といってもいろいろなやり方があります。主に先生が講義をすることもあれば、グループワーク形式の授業をされる先生もいらっしゃいます。あとは、図書館学なので、例えば図書館サービス論とか、実際に図書館を見てきてレポートを書いたりとか、課題を出されている先生もいらっしゃいます。内容については文部科学省でこの科目についてはこういう内容をやるようにと、公開されています。もちろん教科書などもそれに沿って市販のものは作られますので、基本的な内容を網羅している形になります。受講生はとにかく健康管理が大変だと思います。

有岡　そういう問題になってくると、司書講習がどうなのか。

原田　大学で４年間で学ぶほうが、かなり身につくとは思います。例えば 15 時間分の最後はテストが多いわけです。午前中そこまでやっていて、一生懸命覚えたものを頭を切り替えて、次に新しい科目にぱっと入るわけですから。結構大変だと思います。たまたまひとつかふたつかを集中で学ぶというのはあっても、全部の科目を朝９時から４時間、５時間のコマを夕方までやっていくというのは相当大変なことだと思います。

岡田　平成８年の改革の時もそうだったんです。それで止めた学校は多いんです。それが何かというと、先ほどちょっとお話に出た、コンピューターを必修にしたんです。コンピューター室がないと出来ない。少なくとも 50 台くらいは並んだ部屋がないと出来ない。それが平成８年の頃はないとこがざらだったんです。それが結局あきらめざるを得ないというので、司書講習を止めた、司書課程を止めたというところがかなり多いです。ですから、本来司書講習というのは現場にいて司書の資格のない方を司書の資格を持つようにして専門職に、という意味合いがあったんですけれど、これは難しいところで、平成８年の改革の時、僕も何回か教育部会で検討したときに、文部科学省は言ってました。司書教育の入り口として考える、と。専門職の養成というよりも、入り口ですよ。その時の担当官が言ってました。

長谷川　そのように変わってきた。

岡田　そうです。平成 22 年の時に専門職性を強く出して単位数を上げて、それは原田さんも先ほどおっしゃってたように、紙資料だったものが、例えば CD などの媒体になった。そこまでは、まだ良かったんです。現物があるから。今は Web 上の資料があるでしょ。形がないわけです。それをどうするかというので、それは目録の授業なんですけれどそういうものをきちっと捉える規則を、架空ではない目に見えないそういうものをどうやって具象化するかという一規則を考えなくちゃいけない。そのような規則がアメリカでは出来上がっているけれど、日本も平成 28 年にそういう規則が出るのかな。そんな風に、今動いています。

司会　本日は、貴重なお話をいただき誠にありがとうございました。

鶴見大学図書館学講習の思い出

ＮＰＯ法人 市民の図書館・ふじさわ 平塚　禅定

私は昭和 27 年３月文部省図書館職員養成所卒業後、講座創立の頃からお世話になりました。60年の長い歴史とともに、「図書館の鶴見、司書・司書補・司書教諭講習」が輝かしい人材養成を充実させました。私にとって鶴見大学図書館学講習は、社会人として就職してからの、自ら学ぶ第２、第３の学校となりました。特に公共図書館に関する学習は、そこで出会った諸先輩や、受講生から学んだものが全部と云っても過言ではありません。ですから、現代的に云う生涯学習のテキストは、鶴見大学、そして交流した諸先輩、受講生たちは、生涯学習としての図書館学のライフワークを支えてくれた学友と考えています。

３つの柱にわけてお話してみます。

Ａ、諸先輩のてほどき指導

Ｂ、受講生からの生の情報交流

Ｃ、一夏会報と利用案内

Ａ、諸先輩のてほどき指導

創立当初の学監中野愚堂先生は、若造の私に組織のあり方や、物ごとをおこす、先見の明を開眼させて下さり、私的なことですが、總持寺において仏前結婚まで導いていただきました。父が能登に總持寺があった頃修業をつみ、その後、私も別院で修業したことの御縁によるものと、ありがたいことです。

武田虎之助先生は恩師、教え子の間柄ですが、特にわが息子のように言葉をかけて下さり、ある日の会話では、仙台、気仙沼、青森、秋田と特色のある公共図書館について、一つひとつ丁寧な運営方法など解説をいただきました。その後のシラバスづくりは、大先生自ら原案（あの頃は複写による）を話しながら具体例をあげたものを示して下さり、以来、それが土台となって「閲覧と貸出」を教えて参りました。その後、司書コース、青少年の読書と資料、司書教諭コース、学校図書館の利用指導と複数課目を担当することになりました。公共図書館については、武虎大先生の教えで、まず、現地を見学せよの激励をうけ、当時の異色ある運営をしていた山口、岡山、高知、枚方、常滑、富山、金沢、新潟、長野、松本、八王子、日野から町田、千葉、市川、浦安、柏、出島（農村モデル）、埼玉、朝霞、川口、川越、高崎、足利等の他、神奈川県内市町村殆んどを見学したことになります。先生の頭の中には、仙台といえば山中さんという固有名詞がでる位で、どの図書館でも、大先生のお名前のお陰で貴重な資料や運営の苦労話を伺うことができ、次年の講義ノートには新鮮で力強い事例をあげた講義ができ、私の中にも公共図書館かくあるべきの話題が蓄積されました。「図書館へ行く道を聞いているあのおじさんは、きっといい人にちがいない」の碑のある気仙沼など。

３人目の先生が駒澤大学の先輩、図書館学の嚆矢として尊敬している加藤宗厚先生です。特に印象的なことは、先生が病床にあった時（川崎市生田病院と記憶していますが）、お見舞いに参上したおり、先生はベッドの上に食事用机を置き、図書館用カード箱で、「正方眼藏要語索引」作成の作業を続けておられ、「先生何しておられるのですか」の私の素朴な質問に、「ここはゆっくりできるところなので安心して勉強作業しているのだ」と平然と返事をしてくれたので、何事もきっちりとしないと気がすまない先生らしいなあと驚きとともに、カードによる索引づくりに真剣にとりくむお姿に心臓のとまる思いになったことがあります。何事にも徹底して取り組めよ、ということを行動で示し教えておられたのだと今更肝に銘じている次第です。

Ｂ、受講生から生の情報・交流

全部で何人の受講生と交流があったか数えたこともありませんが、私も現職のあった頃は、いろいろ話し合う機会も持てませんでしたが、定年退職してからは、昼食をともにしたり、講習終了後も同窓会的なお付合いをさせていただいている人たちがいます。新・旧図書館の特色をふまえている職場の人など、食事中も情報交換、お互いの質問に自分たちで応答するなど、これこそ自学自習の場であると力強く感じていました。翌日は世話係が交代で店探がし、話題提供者も変更するなど、毎日楽しい一刻でした。そんな中で就職の話も出て、他県なのに窓口になってくれたり、

臨時、非常勤から正規職員になるまで面倒見てくれた人など枚挙にいとまなしの状況です。何回もお世話になった静岡の人もその一人です。それぞれの公共図書館が立地条件、住民意識などの違いを理解しながら、こちらが現地の図書館を訪ねたくらい勉強できたのも宝物と思っています。それらの人々から貰った広報など貴重品として講義中展示したこともあります。

C、一夏会報と利用案内

私が定年退職を迎える頃、時代は昭和から平成になり、世の中は生涯学習時代と呼称されるようになりました。住民の学習要求や情報機器の一般化が進み、1988 年社会教育審議会社会教育施設分科会が「新しい時代（生涯学習・高度情報化の時代）に向けての公共図書館のあり方」に関し中間発表をしました。ユネスコの生涯教育委員会に参加した波多野完治先生がポールラングランの提言を生涯教育と訳されたのも関連がありました。しかし、一生涯教育勉強をしなければならないような印象があるのを、自ら学び、自ら考え、自らの生活に活かす学習を考えようと、生涯学習（論語第一編、学而編）というように用いられるようになりました。

これを学んだのを機に、図書館の世界「神奈川における図書館の変遷、明治・大正・昭和」を調べ分析しようと計画を立てました。

当然「通俗図書館設置ニ関シ富豪家ニ望ム」を読んだり、故郷「埼玉県秩父郡横瀬村図書館創立と通俗巡回文庫―明治期埼玉県図書館事情」「神奈川県通俗教育主事（現社会教育主事第１号　村瀬米之助と大正６、７年頃の通俗教育運動)」「受講生と生涯学習社会を考える」の発表の場として『一夏会報』を活用させていただいた。調べることの楽しさと、発表できる場のあることに支えられて、平成時代の10年にわたって足跡を残せました。特に、鶴見の講習に参加した職員が 10 数人を数える藤沢市公共図書館について、「80 年代後半からの旗手としての藤沢市総合市民図書館　そのⅠ、そのⅡ」には、市民を代表して文化向上への感謝の心を捧げられたのは「一夏会報」が与えてくれた貴重な資料となったものです。

また、私の図書館観を開いてくれた数多くの館報利用案内の中から、施設見学とともに、受講生に伝えることができた二つを紹介します。

（ア）市川市中央図書館利用案内　p.1 貸出確認システム（図書館の資料は市民の財産です。中央図書館ではコンピュータですべての資料を管理していますが、より的確な管理をするため、正確に貸出手続きがされていない場合に、出口でお知らせするシステムがあります。外に出られる際にブザーによるお知らせがありましたら、ご面倒ですがカウンターまで戻り再度貸出手続きを行ってください）″○印筆者付す″ 公共図書館でこの制度を採用するには職員全体でのサービス全般の上にたち長期間の研究討議がなされたことでしょうが、幅広い他のサービスができたことにより地域住民の支えになったので、第１号としてスムースに導入でき、この図書館が他の模範と云われる努力につながると声を大口にして講義したものです。

（イ）南足柄市立図書館利用案内

ご当地代表、足柄山の金太郎さんが本を両手で差しあげている表紙で親しんでから、p.1 いぬ　p.2 にわとり　p.3 さかな　p.4 ヨット　p.5 ごりら　p.6 ロボット　p.7 ながぐつ　p.8 はち　p.9 くるま　p.10 とけい　それ以上は、とけいがベースになって、 いぬ、にわとり、さかな、と夏の表示が絵で示され、幼児にもわかって貰えるようクイズになっており、親子の会話があってから「誰でも　どこでも利用できる図書館を目指して」と進めるように作成されているのです。子ども時代に、このクイズで親しんだ利用者が成人し、わが子を連れての利用を想像する夢が一枚一枚に形づくられていること、受講生に親子になって考えて貰った数は大変なものです。

これらは、施設見学の誘発剤になり、見学者の報告も楽しいものでした。

このように私にとって鶴見の図書館講習は、先輩講師に指導して貰い、受講生から生の情報をわけてもらい、それらのまとめを一夏会報に載せてもらえたという生涯学習の貴重な時間を与えて貰った、まさに生涯学習学校ということができ、人生の第２、第３の学び舎ということになったわけです。

司書・司書補講習の思い出

皇學館大学文学部国文学科助教　岡野　裕行

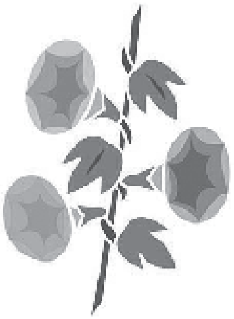
鶴見大学の司書・司書補講習には、演習科目の「資料組織演習」の講師として、2009年と2010年の２年間お世話になりました。夏の講習の講師をお引き受けするのはこれが初めての経験でしたが、当時は他大学でも同じ「資料組織演習」の講義を担当していたこともあり、二つ返事でそのお役目をお引き受けすることにしました。

講師のお仕事をお引き受けした頃は、自分が生まれ育った茨城県に住んでいたため、講習の期間中は電車を乗り継いで都内を縦断し、はるばる鶴見駅まで１時間半ほどの時間をかけて毎日通っていました。真夏の暑い時期に連日の長距離移動は体力的にも堪えましたが、講習生の皆さまは約二か月間にも及ぶ時間を資格取得のために勉強を続けながら過ごしているわけなので、そちらのほうが講師の立場よりもよほど大変な日々だろうと想像しながら、教室のドアを毎朝開いていました。

資格の取得を目指して毎日教室に通ってきていた講習生の皆さまの表情には、明確な目的意識を持った鋭い眼差しが並んでいました。通常の大学の講義では二十歳前後の若い学生たちだけを相手にすることが多いわけですが、司書・司書補講習には実にさまざまな立場の方がいらっしゃっていて、どの講義の時間も気を抜くようなまねはできず、うかつなことは言えないようなほどよい緊張感がありました。また、講習の取りまとめをしてくださっていた岡田靖先生には、期間中の講義の終了後に、ほかの講師の先生方とご一緒に鶴見駅前の中華料理店へとご案内いただき、これからの図書館のあり方を楽しく語らせていただきました。鶴見大学周辺でいただいた食事のなかで、最も印象的に思い出として記憶に残っている場面です。

その後、筆者は2011年から三重県伊勢市にある皇學館大学に赴任することになり、それに伴って鶴見大学の司書・司書補講習の講師を辞退することになりました。新天地である伊勢でも引き続き図書館司書課程の講義を担当しておりますが、鶴見大学での講師の経験はそのまま現在の伊勢での仕事にも繋がっているように思います。講習を担当していた当時は今よりも年齢が若かったこともあり、講義の進め方も若干荒っぽいところがあったように振り返っておりますが、あのときの経験のおかげで、講師としての自分が大きく成長したように振り返っております。

鶴見大学の司書・司書補講習の歴史の一端に関わることができたこと、そして鶴見という土地にこのようなご縁をいただけたことに改めて感謝し、節目の60周年となる長年の活動へのお祝いの言葉を申し上げたいと思います。



「複写技術」とカールソン：90年代の鶴見大学司書講習

立教大学図書館教育研究支援課主幹　小泉　徹

「複写技術」という司書課程科目はWindows95がリリースされた直後の1996年ごろまで続いていたようである。当時私は立教大学法学部図書室に勤務し、法律雑誌業務のほか、レファレンス、文献複写業務、パソコン通信で(！)で判例検索などを行っていた。鶴見大学から聞き慣れない「複写技術」の担当を依頼された時、最初は戸惑ったのを覚えている。

しかしどのような科目なのかと調べてみると、レファレンスの補助的業務として司書補科目に位置づけれられているようであった。さらに電子複写機そのものについて調べてみると、たいへん興味深いOA機器であることがわかった。現在でも複写機やレーザープリンターに用いられるいわゆるゼロックス技術（普通紙への電子コピー技術）は、1930年代にカールソン（Chester Floyd Carlson、1906 - 1968）というカリフォルニア工科大卒でニューヨークの特許事務所に勤める発明家志望の弁理士が、庬大な書類作成を効率的に行う方法がないかと考えて発明したものだった。彼はニューヨーク公共図書館に通って光電導現象に関する文献からアイディアを得、亡命してきたオーストリアの物理学者を助手に雇い、自宅の台所に化学薬品を持ち込んで新しい複写技術を開発して自ら特許申請したのであった。その後彼の技術はゼロックス社の礎となり、実用化され世界中で複写機が使われるようになった。

私も夏休み中に、本業の法学部図書室で著作権法の条文をコピーし汗だくで講習の準備をしたのを覚えている。ちょうど紺野美沙子さんのテレビ科学番組でカールソンのコピー機発明を紹介していたのでテレビ局に電話し、ディレクターの方からビデオを貰って授業で受講生と一緒に楽しく視たのを覚えている。当時はテレビ局もあまり著作権にこだわることなく大学の講習ということで気軽に提供してくれた。

著作権法は、当時は今よりも図書館現場で注目されることが少なかったが、盛夏に鶴見大学の急坂を登って講習を受けにきてくれる受講生に負けじと、著作権法を初めて序文から最後まで読み通した。同法が図書館と非常に関わりが深く、図書館員の存在意義を認めてくれる数少ない法律であるのを知った。今考えると、鶴見大学からは私も勉学の機会を与えてもらったようなものであり、鶴見大学には無い法学部の図書室に勤め「複写サービス」も行っている私が、講師として適任に映ったのかもしれない。受講生には社会人の方が多く、熱心に質問してくれる方もいて、カールソンが公共図書館に通って勉強している姿をほうふつさせた。その後、「複写技術」という科目も無くなり鶴見大学とも縁遠くなったが、夏期講習が終わってから訪れた総持寺本堂の禅宗らしいがらんとした佇まいには、学生の頃読んだ道元の著書を思わせるものがあったのを覚えている。

現在私は、貴重書のデジタルライブラリーや図書館資料の展示などを担当している。資料を選び、撮影やウェブサイトの作成を外部企業に委託し、研究者に解説を依頼することなどが業務で、当時の延長線で仕事をしているとも言える。考えてみると、「複写（複製）」という概念は図書館には欠かせないものである。古典籍や手稿本などを除けば、図書館の蔵書のほとんどは複製物であり、現在ではコンピュータ画面に映し出される画像や動画も含めると私たちの接するかなり多くのものが２次的３次的複製物とも言える。さらに複製のテクノロジーは3Dコピー技術など留まるところを知らない。作家の執筆方法もワープロ入力となり、自筆原稿と呼べるものすら存在しなくなってきているのは淋しいが、文化や思想・哲学など人類の歴史が引き継がれ、発展していくのも複製技術のおかげである。複製技術は、今日では図書館の各分野で益々広範囲に利用されるようになっている。

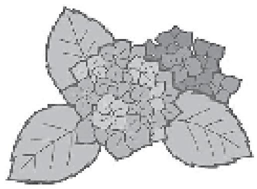
司書・司書補講習と私

相模女子大学名誉教授　渋谷　嘉彦

鶴見大学司書・司書補講習が本年 60 周年を迎えたとのお知らせを頂き、一昨年まで講師としてお世話になっていた身としては、やはり特別の感慨が涌いてくる。記念誌の原稿依頼に際して、講習に関わる履歴を調べてもらった処、昭和 53 (1978) 年度から平成 24 (2012) 年度まで 35 年間に亘ることが分かった。間接的な関わりまで含めれば、更に 10 年位遡る。私は、昭和 43 (1968) 年３月に図書館短期大学別科（特別養成課程）を岡田温学長（後に鶴見大学図書館長）より証書を拝受して修了し、横浜国立大学附属図書館に團野弘之事務長（後に鶴見大学教授）の面接試験を経て奉職した。参考係を新設するための採用であったが、当時團野事務長は、鶴見大学司書講習の講師として「資料目録法」を担当されていて、その演習資料の素材集めのお手伝いをした思い出がある。その後、私は昭和 48 (1973) 年に図書館短期大学図書館学科助手に転任し、その助手時代の後半に岡田温先生のご子息である岡田靖先生と同じ学科の助手として研究室を共にすることとなった。助手の仕事のうち授業に関わるものは、「資料目録法演習」、「資料分類法演習」、「参考業務演習」を担当することであり、その経験を経て昭和 53 年度の司書講習から岡田靖先生と一緒に「資料目録法演習」を担当することになった。当時の鶴見大学図書館長は岡田温先生であった。岡田靖先生は、図書館情報大学を経て、鶴見大学の専任になられたわけであるが、私も昭和 51 (1976) 年４月に相模女子大学に移籍した。相模女子大学は、岡田温、岡田靖両先生に非常勤講師として長くお世話になったが、私も鶴見大学司書・司書補講習に長く勤めさせて頂くことになった。

調べて頂いた担当科目一覧を見ると、多少の曲折はあるが「資料目録法演習」の後、昭和 58 (1983) 年度から「参考業務演習」、平成９ (1997) 年度から「情報サービス概説」、そして平成 23、24 年度に「図書館概論」を担当している。

なお、司書補講習については昭和 55 (1980) 年度から昭和 61 (1986) 年度まで「資料の目録と分類」を担当しているが、これは夏休みではなく夜間講習であった。「参考業務演習」は、現在の図書館が新設されるまでは、１号館の中にあった図書館で行われ、冷房がなく暑かった記憶がある。講義科目も、大学会館が出来るまでは１号館や５号館の教室で行われていた。司書講習の受講者は、講義科目の場合 130 名を超えていたが、大学の司書課程の受講生と比べて私語が全く無く、授業に集中しているので、長時間の講義でも疲れ方が少なかった。また、図書館の現場を経験している者も多く、質問が多いこともあり、授業の進め方やテキストを作成する際の参考になることが多かった様にも思う。図書館法改正以前、国庫補助を得るために図書館長は有資格者でなければならなかった時代には、比較的高齢の館長（あるいは館長候補者）が若い受講者と交流し、一緒に頑張っている様子も見られた。司書講習については、専門職制度の観点から、予てより批判的な考え方があり、私自身長く日本図書館協会図書館学教育部会の幹事として、検討、議論を重ねてきたが、司書講習が果たしてきた役割とその歴史的意義を否定することはできないと思料する。その中で先導的な位置にあった鶴見大学司書・司書補講習の足跡に敬意を表したい。



雑　感

鶴見大学名誉教授　武田　元次郎

今年で鶴見の司書・司書補講習が 60 周年を迎えると聞きまして、以前同講習に関わった者としてお祝を申し上げたいと存じます。年の流れとともに次第に記憶もうすれ、曖昧模糊となってきましたが、思いつつままに在職当時の事柄を書き記してみたいと思います。

私が最初に講習に関わったのは、昭和 44 年の夏からでした。当時はまだ歯学部開設以前で、小規模な女子大のイメージの学園でした。そのころ関東圏で講習を開講していたのは、鶴見と東洋大学だけで、関東以外からの受講者も今より多かったと思います。講習の主催者として危惧する事は、受講者が定員を充たすだけ集まるかどうかという点です。

幸いにして司書講習の鶴見の名前が全国的に浸透していたようで、定員割れする状況は皆無でした。その理由は、鶴見の講習は講習規定に忠実で、有能な講師陣を集め、また武田虎之助・岡田温の両先生という全国的に知名度の高い方々をトップに迎えたことなどに基づくと思います。

現在は鶴見駅近くに大学会館ができ、講習の授業や事務も大学本来の授業と独立して実行されていますが、以前は文学部・短大部の校舎を使っていました。現状と異なり、空調設備や授業に必要な情報機器などが未整備で、暑いさなか冷房のない教室で、汗だくで授業が行われていました。途中から一部講習で使用する教室だけ空調が取り付けられ、ほっとした思いをしました。また、立派な図書館が完成する以前は、大学校舎２階に設置されていた図書室を使う講習科目もありました。

講習の受講者は、当然のことながら、全般に鶴見大学在校生より年配者が多く、鶴見の学生よりずっと熱心で真剣でした。授業中私語や居眠りする人はいませんでした。講習本来の目的は、公共図書館で働く、資格のない人に資格を与えることにあるので、受講志望者を選考する際には、現職者は優先的に受講を許可していました。極めて稀でしたが、県立図書館長の受講者が二人ほどいました。千葉県立と神奈川県立の館長でした。多分全科目受講ではなかったでしょうが、神奈川県立の館長は、来学の往復には、公用車を使っていたようでした。

詳しい状況は知りませんが、遠方からの受講者のために、ある時期まで大学の学生寮の利用を認めていたと聞いています。また。閉講式終了後、以前の何年間か、本山の団体参拝者用の大広間で終了打ち上げパーティを挙行していました。またある年には、当時文学部教員として在職されていた、中根専正先生の肝いりで、大学校舎の屋上に提灯の照明をぐるりと綱を張り巡らせて、まるで屋上のビアガーデンの趣きで、終了を労ったことを懐かしく思い浮かべています。

鶴見大学を 10 年ほど前に定年退職した後、２年間だけ桜木町近くに開校した通信教育大学で、資料組織法の科目を担当しましたが、視力低下で読書も儘ならない状況で、ただ、趣味の活動を中心にすごしています。

最後に、鶴見大学及び司書・司書補講習の益々のご発展を祈念いたしまして、筆をおくことにします。

夏期講習会の思い出

相模女子大学准教授　松本　勝久

　私がこの鶴見大学の夏期講習会を担当するようになったのは、前回のカリキュラム改訂で「情報検索演習」が新設されてからのことからのことでした。私の本務校に岡田靖先生が出講されていたことからお声かけ頂いた訳でした。そういうことで、ずいぶんと年月が経過しているわけです。しかしながら、その翌年からは、学部のほうにも出講することになりました。さらに、それから何年か経たあと、「情報機器論」の担当者でもあったからでしょうか、司書補のほうでそんな内容で「図書館特論」をと、依頼されたわけです。というようなこともあって、一年中通ってきていますので、逆に特別な思い出というものがありません。

　ただ、振り返ってみると、この間に、情報検索の世界では、主立ったデータベース・システムのインターネットへの移行、そしてまさに多くのウェブ・サイトの開設による情報提供はもはや当たり前のことになりました。たとえば、国立国会図書館が全レコードをOPAC に提供してくれるようになったのが、2002 年 10 月のことでした。それまでは、書誌情報の検索すら苦労したことが思い出されます。一方で検索のツールとしては何といってもサーチエンジンの出現です。その便利さに慣れきった人たちに、あまりにも使い勝手の良くない OPAC を使わせるのもいかがなものかと考えたりします。さらには、ディスカバリや音声入力、JSON や SKOS による交換となるとどうなるのでしょうか？

　もっとも、この科目は、サーチャーというスペシャリストが行ってきた情報検索に関わる理論や実務を学ぶというよりは、図書館利用者が求める一般的な「情報」をデジタル情報資源から提供したり、調査を支援することに力点を置くべきだろうと考えてきました。すなわち、ネットワーク上の情報資源は特殊なものではなく、紙媒体のものと同等に扱われてしかるべきと考えるべきです。そういう意味では、今回のカリキュラム改訂でレファレンスサービス演習と統合されて、情報サービス演習となったのは、その通りだと考えています。

　したがって、演習課題もレファレンス課題のようなものを使用してきたし、近年は、レファレンスの様式での回答を求めてきました。ただし、有料のデータベースはまだまだ存在するわけですし、ビジネス支援などを目的として導入される図書館も多くあります。そのために、受講生に主要な有料データベースを是非体験してもらいたいと考えるところです。事務局は、その趣旨をくみ取って面倒なそしてかなり無理な交渉を行っていただいていることに感謝するしだいです。

　もう一つの「図書館特論」のほうは、図書館のハイブリッド化による可能性をメインテーマに据えてきました。もちろん、ただディジタル化して従来の業務の自動化を推進しようと考えてきたわけではありません。ディジタル化したり、さらにはネットワーク化することによって、これまで図書館の利用の困難であった人々にもサービスができるようになるのではないかと考えてきたわけです。具体的な例は、視覚障害者へのアクセシビリティの改善です。公費で運営される施設・機関が、実際上、障害による差別／利用の制限を行っているのは良くないと考えるからです。とはいえ、短期間のうちに、こういうことに関心をもってもらったり、理解してもらうことはなかなか難しいです。

　最後に、私は（他大学のですけど）夏期講習会で司書資格を取得したこともあって、受講生の方々の苦労は経験しています。多少でも、受講生の味方になれればよいなと考えて講習会に臨んできたつもりです。

司書講習の思い出、感想、その後、現在

法政大学講師　岡谷　大

このたびはご丁寧にもお声をかけていただき誠に感謝申し上げます。

思えば今から７年くらい前に、思いがけなくも夏期講習の講師の依頼をいただき吃驚するやら、責任を感じて緊張したことを昨日のことのように覚えております。

実は私もかつては某大学の夏期の司書講習生でしたので受講そして終了がいかに大変かはわかっているつもりでした。しかし今回は教える側でしたので受講生の場合とも違ったいろいろな経験をさせていただきました。パワーポイントはもちろん、毎回の準備に追われました。またさすがに司書講習だけあって、図書館の現場に即した鋭い質問などへの対応にいろいろ手を尽くしました（この時自分も成長していたのかもしれません)。

図書館情報学の学問的高さはもちろん維持しなければなりませんが、例えばインターネットやＳＮＳなど時代の流れに敏感に対応し、最新技術をもキャッチアップしていかねばなりません。一方で受講生のレポートからもこうした理論面、技術面もさることながら底に流れる学問へのひたむきな姿勢も感じられます。学問にこころざすものすべてに共通することであり、例えば図書館思想などは授業でも盛り上がるところですが、司書講習全体がタイトなスケジュールなのでほどほどにせねばなりません。またそのような授業で取り上げるトピックスの、偏らないが要点をとらえた説明などはその都度苦心を要します。また試験とは別にレポートを課したのですが、採点は大変でしたが試験の前の受講生の理解度チェックには役だったかなと思います。

受講生の皆様にどの程度ご満足いただけたか、ともかくも無事終えましたことを感謝いたします。これにはいちいちお名前を挙げませんが、事務のスタッフや他の科目の先生方のご支援等によるものと思います。

私の方はその後いくつかの出講の機会をいただき、図書館情報学の研鑽を積んでおります。とくに図書館情報学の教育の在り方や、関連するトピックスとしては概念・用語学（ターミノロジー学）や、情報と文化を考える情報文化学、さらに図書館情報学の哲学からの深まりを模索しております。

おわりに伝統ある貴講習会や貴学のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げ擱筆させていただきます。

鶴見大学司書・司書補講習開講60周年おめでとうございます。

中央大学名誉教授　今　まど子

鶴見大学では、1954（昭和 29）年という早い時期に司書・司書補の講習が開始されているのです。その頃の図書館はほとんどが閉架式、館内閲覧のみで館外への貸出し、レファレンス・サービスも、まだ行われていませんでした。

1950 年４月に「図書館法」が公布され、その時点で公共図書館の職員であった方々は５年以内に司書又は司書補の講習を受け、資格を取得することが規定されたのです。そこで文部省は講習を行って資格を出す必要に迫られ、1951 年７月から東京大学や京都大学など国立の５大学で、２カ月間の講習を開始したのです。52年に講習校は国立の 10 大学に倍増し、53 年から東洋大学と愛知学院大学の私立大学２校も講習を開始しました。そして 54 年には鶴見大学が文部省委嘱講習を開講したのです。今では司書・司書補の講習を行っている大学は私立大学の方が多くなっています。

中村初雄先生がお声をかけて下さったので、1980 年から鶴見大学の夏季講習で「資料分類法」を担当させて頂きました。私は分類法を教えるのは好きでした。戦後しばらくは、図書館毎にそれぞれ独自の分類法が使われていたのですが、もし「日本十進分類法（ＮＤＣ）が日本の図書館で広く使われるようになれば、大学や講習で一度勉強すれば、習ったことが即実務で役に立ちますし、どこの図書館へ異動しても別な分類法を勉強し直さなくてよいのですから、「ＮＤＣ」を広めようと、かなり気を入れて授業をしてきました。

その頃、私は中央大学で教えていました。大学は 20 歳前後の若い学生を対象にして授業を行いますが、夏季講習ではすでに図書館実務についていて、その必要から資格を取りに来ている方々、定年後を見据えて資格を取ろうとしている年配の方々など社会人の受講生も多く、若い学生たちとは違った思いがけない質問が出たり、説明の仕方にも一工夫必要だったり、講習の１年目はマゴマゴしましたが、張り合いのある日々であったことも、懐かしく思い出しております。

鶴見大学［司書・司書補講習の思い出］

逗子市立図書館長　小川　俊彦

図書館史をひも解くとわかることですが、昭和 25 年に図書館法ができ、新制度の公立図書館には、専門的職員である司書を置くことが求められるようになりました。しかし、法律ができるまでの図書館職員養成機関は、文部省の図書館講習所だけであり、図書館で働いている有資格職員は非常に限られていました。
そこで国は、現に図書館で働いていて資格がない職員を、司書として育成するために各県にある国立大学に、司書養成講座を設けました。

大学にとっては、本来の目的以外の講座開設でありましたし、図書館数自体が少なかった、つまり応募者が限られていたということもあって、国立大学での司書養成講座は数年で終わり、代わって募集対象区域を特定しない私立大学が司書養成を受け持つようになります。鶴見大学の司書養成講座は昭和 29 年の開設ですから、私立大学としては恐らく一番早かったはずです。

私立大学に代わっても、当初の司書講習は現役図書館員のための育成という目的が強かったと思います。また、図書館建設の促進のためということもあって、国から建設のための補助金が出ていましたが、その交付条件では図書館長が司書であることが求められていました。そこで、多くの自治体は図書館長となるべき管理職を司書講習に派遣します。したがって、この時代の受講生は公費での受講生が大変多い時代でした。当時は大田区立図書館で働いていましたが、毎年何人もが派遣されて鶴見大学の司書講習を受けていました。

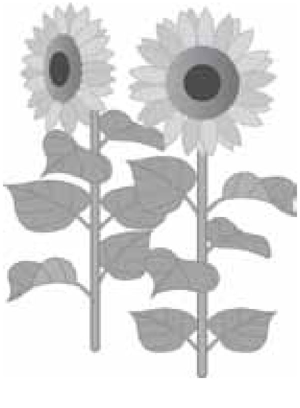
建設費の補助金交付要件が改正されたこと、またバブルがはじけたこともあって、今では公費で派遣してもらっている職員はいない、とは言えないにしてもわずかになり、資格をとって図書館を目指したいという受講生が中心になってきています。

現に働いている仕事を休み、受講料や旅費・宿泊費のことを考えると司書を目指すのも大変なことですが、しかし受講料や旅費丸抱えで受講する人にとっても、「単位を落としました。申し訳ありません。」で済むことではないので、様々なストレスがあることを聞いたこともありました。

公費で学ぶか、自分が工面して学ぶかという違いはあるにしても、講習中に最も強く感じたことは、一度社会人を経験していると、学ぶ意識、あるいは理解力が違うということで、これは毎年の講習で感じたことでした。

司書課程がある大学で、単位取得を目指して受講してくる学生のうち、何人かは図書館員になることを目指しているので必死で頑張りますが、多くの学生は比較的簡単に資格が取れるから、と司書資格取得を考えていたようです。

夏の暑い盛りに司書講習を受ける人たちには、図書館員を目指す、図書館の専門的職員になるという、大きな目標がありましたので、常に必死さが伝わってきていました。



鶴見は私の図書館人生の原点である

慶應義塾大学文学部教授　田村　俊作

本稿の執筆を思い立って，改めて手許にある鶴見大学関係の書類を取り出してみた。昭和 49 年 8 月 31 日付の司書講習修了証書，昭和 49 年度の『一夏会報』，そして附属図書館司書の辞令。

『一夏会報』には講師や受講生仲間のなつかしい顔が並んでいる。入院中にもかかわらず，講習のためにと教壇に立った講師。講習で知りあい結婚に至ったカップル。暑い夏だったが，特別に大変だったとかつらかったという記憶は残っていない。それでも，せっかく治りかけていた病気がぶりかえして大変な思いをしたのだから，通常の大学の授業の程度でなかったことは確かだ。

その後，紆余曲折を経て慶應義塾大学の大学院に進学し，図書館情報学の研究者になった。紆余曲折の中には 1 年足らずの附属図書館の勤務経験も含まれている。大学教員となった後は，今度は講師として司書講習に臨むことになった。また，修了者を対象とする特別講座の講師にもなった。そのようなわけで，私は鶴見大学で図書館司書への手ほどきを受け，教員としても育てられてきた。げに鶴見大学は私の図書館人生にとって原点とも言えるところなのである。

講習のときの講師がどのような人たちであったのかを理解したのは，講習後に図書館情報学の各領域に対する知識を深めるにつれてである。武田虎之助先生が入院中だったため，石井敦先生が図書館通論と図書館活動の 2 科目を担当した。石井先生の歴史観・図書館観は非常に明確で，反発を覚える部分はあったものの，市民の利用を軸に図書館サービスを組み立てようとする考え方は良く理解できた。先生の『図書館の発見』（日本放送出版協会 , 1973）は講習中に読んだように思うが，『中小都市における公共図書館の運営』（日本図書館協会 , 1963）や『市民の図書館』（日本図書館協会 , 1970）を読んだのは講習後だいぶ経ってからである。公共図書館について学ぶうち，最初に石井先生に教えていただいたことは，大変幸運であったと思うようになった。英国の移動図書館車のスライドを見せてくれたときに「トークン式」という貸出方式について触れ，未返却本が大量に出るやり方だが，英国ではそれでも良いとしている，との話は，1990 年代半ばに紛失図書問題が起きたときに思い出した。

資料分類法と同演習では，日本十進分類法の構成とその適用法を詳しく指導された。担当した加藤宗厚先生のテキストを後年見返すと，書名から主題がどの程度検索可能かとか，関連したトピックに広く目配りしていることがわかるが，講習当時の私がその意味を理解していたとは思えない。ファセット分類法や事後結合索引法について学んだのはもっと後になってからである。また，先生と青年図書館員連盟や国立図書館･富山県との関係などを知ったのも，ずっと後のことである。

他の講師達，青木一良先生，竹田平先生，関晶先生，といった方々の講義の様子についてはほとんど思い出せないが，講義を受けたことを覚えているのは，後になって，戦後における図書館サービスの展開を見ようとして先生方の著作を読んだからであろう。このように鶴見の講習の意義を，私は後の私自身の歩みの中で作り上げていったように思う。

実際，鶴見の講習が意味を持ってきたのは修了後であった。修了生達で作った勉強会に参加したこと，資料組織関係の研究会に参加して，関野真吉先生や岩淵泰郎先生などの先達から教えを受ける機会を得たこと，岡田温先生や丸山昭二郎先生などの国立国会図書館関係者を知るきっかけも，みな鶴見大学つながりであった。

講習で感謝したことがもう一つある。鶴見は資料組織関係が厳しいという当時の評判通り，目録と分類は鍛えられた。目録では，団野弘之先生に基本記入の作成法を仕込まれた。分類では，加藤宗厚先生により日本十進分類法の百区分を暗記させられた。これらはいずれも後にレファレンスサービスで大いに

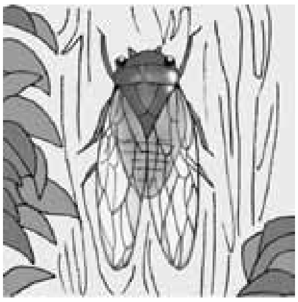
役立った。書誌類の記載内容を理解し，また主題検索に精通することは，レファレンスサービスのイロハだからである。後年私自身が講習で資料分類法演習を担当することになって，教える側から鶴見の教育の厳しさを改めて実感することになった。基準点に達しない受講生は容赦なく落としたが，一方でなるべく多くの受講生が基準点に達して合格してほしいとの思いもあり，授業がわかりやすくなるよう，毎年いろいろ工夫した。

講習を受けてからもう 35 年，講師を辞めてからでももう 20 年以上経っている。こうして講習にまつわる思い出を振り返ってみると，私は講習で学んだことを咀嚼しつつ図書館情報学研究者としての道を歩んできたことが良くわかる。講習で学んだことは，何よりもまず現場で役に立つツールであり，現場の業務手順であり，現場での考え方だった。それらを他のものの中に位置づけ，図書館員による図書館サービス提供の実践と利用者によるその利用というテーマに組み込んでゆく作業は，私の図書館情報学研究の重要な一部である。

受講生諸君に言いたい。講習ははじまりだよと。２か月という短期間のうちに学んだことを十分に咀嚼できる人は稀だろう。その内容を吸収し，自らの図書館人生に組み込む作業は，修了してからなのだ。

図書館司書への道が狭く厳しいことを知りつつ，不安を胸に大学の坂を上っていった日々を思い出す。さらにまた，就職口を求めて上っていった日々も。図書館への道は狭いが，閉ざされているわけではない。どうかあきらめずに機会を求めていってほしい。

鶴見大学司書講習 60 年の歴史に参画していることは，私の誇りである。講習から得たものの割に十分にお返しできていないことを申し訳なく思いつつ，今後もその成果を咀嚼し続けて行きたいと考えている。



までまでコーヒー飲んで　―その②―

司書補　昭和62年度修了　司書　平成２年度修了　山本　宣親
（富士市在住）

突然だが、44 歳のひとり息子が幼児の頃だ。「までまでふんどししめて」（むかしむかし・童心社）がえらく気に入って、わしに本読みを何度もせがんだ。わしゃいつか覚えてしもうて、息子が気に入ったこの口調で読むようになった。

その後、異動した図書館でストリーテリングを語る切っ掛けにもなったのよ。調子に乗って「平成２年度一夏会報」にもこの文体で寄稿したのさ。めでてぇ本記念号に再度の機会を得て、ありがてえこった。今回もその「までまで…」の語り口調で書かせてもらうが、どうかごめんなせえよ。

鶴見の修行で、わしゃ図書館の大切さに気付いた。そこで自己申告してよ、富士市立図書館で退職まで仕事したさ。その後も再就職と大学の非常勤講師で、ありがてぇことに 21 年間も図書館との縁を得ただ！それだけではねえ、今も「おはなしじーじ」として、子供たちに「ストリーテリング」を語ってるだ。「おはなし」もかなり増えた。だどもわしが最も気に入ってるのは、この「までまで…」だぁ。「三枚のお札」の別話もあるが、わしゃこれがええ。「までまで…」だけは今もこれで語ってるだ。どうか、後も気楽に読んでくだせえ。

それにしても図書館は、大変な時期を迎えてるだなぁ。150 段を登った鶴見の山寺で修行した頃とは状況が変わっとる。あの頃学んだこたぁ「図書館はヒトから人間になるところ」という教えだ。食物を摂取して動物は成長する。でも人間になるには知恵と心、内面の成長が伴わねば。それに必要な栄養素が本だ。本は他人の経験を自分のものに出来る、頭脳の外にある記憶装置。今の人だけでねえ、百年千年と続く時代へ伝え社会の進歩発展に役立つ。図書館はそうした文化だあ。だが目に見えねえ価値は民主主義や平和も同じで、金やハコものに目が奪われてる人たちにそれを理解してもらうことは難しい。優れた活動の図書館や司書も見られるが、近頃はニセモノ図書館が出現しちょる。運営を民間に委託したり、正規職員を減らし非正規を増やすなどがそうじゃ。図書館の理解の次元が低く本質を見誤っとる。

今こそ本物の図書館を世間に知らせ広める司書の出番だ。わが国では医師や教員のように司書が公認されていねぇ。病院長や学校長に退職した水道部長や道路課長が就任することはねえが、図書館では現実だ。それを多くがおかしいと思っていねぇ。これを正すのも司書の役目だ。図書館に専門職の司書が必要だってこと広く知ってもらわねば。「そうだ！そうだ！」と言う声が多くなれば、法律や条例は変わるだ。医師や教員制度もそれなりの末に今のようになった。初めからあったわけでねえ。図書館界はそこが足りねえ。だからよ、司書は本と人をつなぐだけではねえ、図書館発展の原動力とならねば。何と意義ある役目でねえか。それにはコミュニケーション力をもっと磨くことだ。図書館関係団体に所属し、全国の仲間と力を合わせることもええぞ。本は好きだが人間は苦手なんてのはいけねえよ。身だしなみを整え質の高えサービスを実践するだ。見えねえ仕事を見えるようにするさ。さすれば市民の支持は広がり、世間も図書館の大切さがわかるようになるさ。図書館が大切にされる社会は、民主主義や平和も大切にされる。司書と図書館関係者は時代のターニングポイントの鍵さ握ってるちゅうことだ。

おっと、演説ぶっちまったなあ。えっ？　当時の鶴見の様子をもっと聞かせろだと？　字数がちっとオーバーしてもええってかあ！そんじゃま、そうさせてもらうべ。までまで、まずはコーヒー飲んでからにすべえ。

わしゃ司書補と司書両方を受講した。ありがてぇことに公費でよ。富士市では初めてのことだと。責任感じてな、ちったぁ修行せねばとこころに決めた。だども、前半と後半は夜間、中間は昼間と修行時間帯が違う。夜の修行が終わって帰宅すると夜中の 12 時。昼間は東海道線各駅停車、始発に乗るためバイクさ走らせた。朝５時に家さ出る。雨の日はきつかった。突風でバイクが転倒し怪我した時は試験日だった。休むわけにゃいかね。駅前の洋品店と薬局で衣服さ取り替え傷を処置して、何とか電車に間に合った。

静岡県内では三島市と静岡市から通う人がいた。それも私費でよ。もっと遠方の人は横浜市内に宿泊した。勤務先を辞めて受講する人もいた。図書館で働きたい人がこんなにもいるのか！と、わしゃ驚き頭が下がった。

熱心な人が多く、教室で前の席を確保するために早くから来てた。わしも早く来て最前列のど真ん中を確保した。やがて座席は定まった。後で気づいたが、前列は私費の人後ろの席は公費の人たちが多かった。

休憩や昼食時間は、気の合ったグループで過ごすようになった。授業が終わると鶴見駅近くの安酒場で「飲みニュケーション」を重ねた。時には講師も加わって熱く語り合った。

ある日女性数人から「お酒ダメな人向きの会もやって」と来た。早速「ティラミスを食べる会」や「シュークリームを味わう会」を横浜駅の地下街でやった。それだけではねえ、「中華街で夕食を楽しむ会」もやった。これは好評で講習が終わってからもやった。こうした言い出しっぺをわしゃ先立ってやった。それはわしの性質（たち）もあるが、年長者とも見られたからだろう。講師に国立国会図書館の職員がおったので、お願いして同館の見学会を講習が休みの日にやった。集まった８名に同館職員が丁重に案内し説明してくれた。わしらは初めて見る施設内部に感心し、中でも地下８階建もの大規模な書庫と機能に驚いた。この見学会は後に静岡県内の図書館関係者に呼び掛けて行い、参加者 18 名の意識が目覚め、それ以来県内での学習会や集いが活発に行われるようになった。

講習日程が後半の頃になると講習生の仲間意識は増した。修了式の夜は鶴見駅近くで打ち上げが行われ、講師も加わって大いに盛り上がった。それから数年間、東京在住者が幹事役となって都内で懇親会が何度か行われた。そのひとつに柴又帝釈天近くにお住いの講師が案内役となって、寅さん映画おなじみの場所の見物を兼ねた思い出深い親睦会もあった。

さて、肝心の授業のことだ。鶴見に来た甲斐があった！と満足した講義もあったが、そうではない講義が多かった。午後は睡魔との闘いだ。わしは不満に感じた講義を反面教師とすべえと考え観察した。その結果次のことがわかった。

①「えー」「あのー」「そのー」など不要な言葉が多い。②主語に続く述語が離れすぎている。③不要な修飾語を多用する。④Ａの話しにＢ・Ｃが割り込む。⑤引用資料が古い又は不適切。⑥受講生の顔を見てない。⑦声量が小さい又は発声が悪い。⑧姿勢・態度が悪い。など

わしゃそれから学んで「話す時は書くように、書く時は話すように」と心掛けるようにした。話すことも書くことも自分の考えを相手に伝え理解してもらうことが目的だ。そのための有効な手段と思ったからだ。これは後にわし自身のために役立つことになったぞ。でも、その時はまさか考えもしなかったことだが…。

司書補の選択科目でレポートの課題が出た時のことだ。ひとりでは難しいと思い「この指とまれ！」と呼びかけたら６人が集まり、グループで取り組んだ。参考資料の多くは鶴見大学図書館で借りたが、「グループ室」を使用させてもらえなかった。講習生はダメちゅうことだった。仕方ねえ鶴見会館の有料会議室を借りて討議した。提出期限までに３回集まって課題を仕上げた。今は講習生も学生と同じということだが、当時はそうだった。

講師はレポートの出来栄えと取り組み方にえらく感心してくれた。それからはグループと講師の交流が続いた。それが縁となって、富士市立新中央図書館開館のいきさつを出版した。（拙著・図書館づくり奮戦記・日外アソシエーツ・1996 年）その後、「図書館森時代」（拙編・日本地域社会研究所・2005 年）ほか共著の機会を得、全国各地の図書館や市民団体から講演や研修の講師依頼が多数あった。また県内２大学の司書課程授業を担当することにもなった。わしゃ事情があり高卒で地元の市役所に就職した。それがまさかの展開となった。担当は「図書館経営論」。しかし、例え１科目であっても学生のこころに残り、図書館発展に役立つメッセージを伝えよう！と熱い思いで教壇に立った。それが鶴見で出会った講師と職員、講習生へ報いることでもあろうと考えてょ。

長え話はまだ続くがまたの機会として、コーヒーもう一杯どうだ？　え、酒の方がいいってか！　はっは。

来し方をかえりみて

司書補　昭和36年度修了　雨森　弘行
（元三重県立図書館長）

いまから半世紀以上も前のことですが、大学受験を前にして突然、父の事業が破産し、病人を抱えたわが家は、住まいを含む生活の立て直しを迫られました。そのため私は受験を断念し、直ちに働きに出ることにしました。様ざまなアルバイトを経て、１年後には幸いにも、地元の弘前大学の医学部の図書館に非常勤職員として採用されることになりました。職場のスタッフはみな親切な人たちで、専門的な業務でも懇切に指導して貰えました。そんな環境のなかで上司から頂いた助言もあって、自らの人生の方向転換を決心したのです。

まず１年後に初級公務員試験に合格し、正規の公務員に任用されました。次に司書補の資格取得です。大学図書館の職員としては制度上の必要条件ではありませんが、専門的な業務を行うための要件として、職員はみな司書資格を持っていました。有難いことにこの大学では、その資格取得は研修出張として扱われていたので、先例に倣って鶴見女子大学の講習を受講することにしたのです。これが、図書館界に入る最初の転機になりました。

その講習で学んだ「ランガナータンの図書館学の五法則」は、今でも私の職業倫理の基軸になっています。

それから３年後に司書資格の取得に臨みますが、今度は在京の大学での講習を受講してこれも無事に修了することができました。そのとき授業の中で、人事院が国立学校の図書専門職員採用のための国家試験制度を前年度から始めたことを知り、職場に復帰してから速やかに申込みをして、仙台まで出掛けて行って受験しました。しかし、まだ大学教育も受けていないわが身にとっては、壁が厚すぎました。それでも諦めずに、翌年度の挑戦では入念に準備を重ねて臨んだことが奏功して、上級試験に合格することができたのです。

一方、幸運にもその年に弟が大学を卒業して、地元に就職することができました。そこで、かねてからの約束に従い、家族の世話を今度は弟にもお願いして、面接案内を頂いていた東京教育大学（後の筑波大学）の図書館に転勤したのです。それが第二の大きな転機になりました。そして上京と同時に、ようやく８年ぶりに懸案であった大学進学も実現して、４年間で卒業することができました。そのとき私はすでに 30 歳になっていました。

結局、私の 70 年余の人生の中で、副業の場合も含めて 11 回に及ぶ転勤を伴いながら、16の大学や機関において図書館に直接・間接に係る仕事に従事したことになります。その間、国の学術情報システムの構想策定とそれに伴う学術情報センター（NII の前身）の創設や、図書館情報大学（後に筑波大学に統合）の創設に関わることができたほか、全国の国立大学での図書館間相互利用の制度化や、館種や地域を越えた図書館ネットワークの構築など、図書館界における歴史的なインフラ整備の仕事に参画できたことは幸運でした。

こうして来し方をかえりみると、最初のキャリアアップの段階では、一般に想定されている順序とは逆向きに歩んだことになりますが、肝心なのは、どんな順序で、いつどこで学んだかということよりも、学んだことをどのように仕事に生かして、それらをどれだけ社会に役立てることが出来たか、ということではないかと思っております。

この司書・司書補講習の制度については、その存廃の議論もあるようですが、少なくとも、人生のある時期に不測の事態に陥った私のような者にとって、この制度はいわばセーフティネットのようなものであったといえます。そのことを思うと、国にはこの制度を今後ともぜひ継続して貰いたいし、鶴見大学にはその 60 年の伝統と実績を生かしつつ、新たな工夫をも加えながら、その内容も一層充実させて頂くことを心から望んでおります。

夏期講習の思い出

司書　平成18年度修了　外田　祥子

1998 年に大学卒業後、音楽大学の附属図書館での職を得たのをきっかけに、職場を変わること数回、現在 2014 年に至るまで、大学の図書館に関わる仕事を続けてくることができた。司書資格については仕事をしながらも、いつかは、とずっと思っていた。実は通信教育での取得を目指したこともあったのだが、挫折してしまった。そしてついに2006年夏、職場より３ヶ月弱の講習期間中の休職の許しを得、鶴見の司書講習に通うはこびとなった。鶴見大学の主要キャンパスからは少し離れた別棟の、まだ新しいであろう建物で、今更ながら勉強するにはうってつけの素晴らしい環境であったのだな、と思い返しているが、通っている当時は、あまりそういった感想が前面に出ていなかったことが、今考えると不思議な感じがする。やはり、久しぶりの勉強ということで緊張し、そうした余裕もなかったということだったのだろうか。一緒に受講した方のなかには、既に図書館で働いている方も大勢おられ、お仕事の話など伺うにつれ、普段はごく限定的な業務内容であった自分に比べ、なんと多岐にわたる大変なお仕事をこなされていることかと驚くとともに、まだまだ勉強も経験も足りていないのだということを痛感し、もちろん良い刺激ではあったのだが、当時はなんとなく引け目のようなものを感じていた。こうした講習を受けると、勉強するのがもちろん第一の目的ではあるのだが、多くの人と交わることができるというのもひとつの醍醐味というのか、実はこちらのほうもなかなか重要なことであったのだなと、今になっては思う。また、講習中の一番の思い出といえば、たしかアメリカの農学図書館の方をお招きして、ということであったと記憶しているが、講演会が行われたことである。実を言うと当時はまったくピンときておらず（完全に勉強不足の所以である）内容もあまり理解できていなかった。このような素晴らしい機会があったにも関わらず、ほとんど活かせていなかったではないかということが再確認されるに至り、われながら残念でたまらない。

成績のほうはさておき無事単位を取得することができ、講習終了後は何事もなかったかのように元の職場へと戻り何事もなかったかのような日々であり、このまま何事もなく続いていくのかと思っていたのであったが、またもや転機が訪れ、手にした司書資格を元手に３度目の転職と相成ったのであった。１年半後のことである。その後、いろいろありながらも、文京区にある筑波大学東京キャンパスでの履修証明プログラムである図書館経営管理コースを受講し、こちらも 2014 年3.月に無事修了することができた。そしてここでも、一緒に受講したみなさんとお近づきになることができた。勉学が主たる目的であったのはもちろんのことだが、それにも勝るとも劣らない大きな収穫となったといえるのではないだろうかと思っている。その他ときどき勉強会や研修などに参加したり、認定試験に挑戦したりと、充実した日々を過ごしている。といいつつも、周りでご活躍のみなさん方を見渡せば、自分などはまだまだパワー不足の感が否めないのだが、刻々と流れ行く多量の情報に翻弄されながらも勉強の日々である。講習当時を振り返ることで、度合いはたいしたことはないにせよ、確実に成長してきているのかな、と思うことができた。よいきっかけをいただき感謝している。

「鶴見の夏」

司書補　平成元年度修了 **遠藤　征広**
（公益財団法人 弦 地域文化支援財団）

井上ひさしさんから「司書の資格を取って下さい」と、その頃、言われた。

「その頃」というのは、1987年（昭和62年）、井上さんの生まれ故郷の山形県小松（川西町）に遅筆堂文庫（ちひつどうぶんこ）が誕生した頃だ。

井上さんは、蔵書家で、あまりの本の多さに自宅の床が抜けたという逸話がある。エッセーでも書かれている。

遅筆堂文庫ができる３年前、井上さんのご自宅を訪ねる機会があった。家に入って、本当にびっくりした。エッセー等で書いているように家中が本だらけで、まさに本の中にお住まいをしている井上さんだった。本で床が抜けるとはこういう状態なのだとわかった。

その時、家からあふれている本を見て、「小さな図書館を小松につくりたい」という企画書を作った。まったくの思い付きだったが、その企画書を大胆にも井上さんへ渡した。タイミングがよく、その企画書が通った。企画が膨らみ、あふれている本ばかりか、すべての本を郷里の小松へ移し、図書館をつくることになった。井上さんの全蔵書を小松へ移すのに11トントラックで４台を必要とした。

87 年８月の開館時に冊数を数えたら 75,000 冊あった。一人の作家が持つ本の量ではないと思った。

さらに後日談になるが、毎年５千冊以上が井上さんから小松へ送られた。亡くなってからも続き25年間で22万冊になった。

2008 年に、遅筆堂文庫の分館が山形市にできた。小松の蔵書から３万冊を山形市のシベールへ移して、遅筆堂文庫山形館となった。一緒に劇場の「シベールアリーナ」も誕生した。

話をもどす。出来たての遅筆堂文庫で働くことになった私に井上さんが司書の資格を取りなさい、という指示を出されたのだが、どうこたえるかを思案した。

大学の夏季講座、大学の通信講座、迷ったが、鶴見大学の司書・司書補講座を受講することに決めた。

89年、鶴見大学で受講となった。受講料は、６万７千円。受講の合間には、こまつ座の劇団の仕事もありハードだったが、32 歳にもなっていたので 90 分の講座に慣れるのが一番たいへんだった。

待ちに待った授業が８月31日から始まった。「図書館施設」だ。
この授業は、菅原峻先生が手掛けた図書館の設計で具体的に講義された。先生は、図書館建設の第一人者で、図書館建設をたくさん手がけられている。授業では、先生の体験に基づいて図書館ができる過程、注意点など懇切丁寧に教えてくれた。

私には、遅筆堂文庫を建設することがわかっていたので、一言一句聞き漏らさずにノートをした。今も大切な宝物だ。この宝物のノートは、その後、２つの遅筆堂文庫をつくる際に大いに役立った。

さらに先生には、２年後、遅筆堂文庫建設のアドバイザーにもなっていただいた。

「遅筆堂文庫物語　小さな町に大きな図書館と劇場ができるまで」（日外アソシエーツ刊）という本を98年に書いた。
まさか自分が「遅筆堂文庫」ができるまでのドキュメントの本を出すなんて、夢にも思わなかった。

井上さんから、本の移動で何があるかわからないから、「記録」を残しておきなさいというアドバイスをいただいていた。この何があるかわからない、という意味がわかった。本の執筆というハプニングだ。トラブルではなかった。

執筆のきっかけは、日外アソシエーツに勤務の編集者・北原圀彦さんからのＦＡＸからスタートした。北原さんは、なんと、講座で「ジャーナリズム」を講義されていたのだ。そういうご縁が鶴見の89年の夏に出来ていた。

今は、山形市にある「遅筆堂文庫山形館＆シベールアリーナ」で働いている。

思えば、生涯に二つも図書館つくりに参画するとは思ってもみなかった。鶴見の夏に、想像もしなかったことだ。

もう一つ、私の人生を大きく変えた井上さんがお亡くなりになるとは思ってもみなかった。

鶴見大学司書講習の思い出

司書　平成15年度修了　中山　昌也
（東京大学）

鶴見大学の司書講習に出会ったのは今から11年前。大学院を修了後、自分の学んできたことを活かせる仕事を探していた時でした。大学院の在学中に図書館員の方々にお世話になったこともあり、図書館の仕事はどうだろうと、簡単に考えたことが始まりです。

図書館員になるにはどうすればよいのか、調べてみると、どうやら司書の資格というものが必要らしい、ということがわかりました。そこで、司書の資格をとる方法を調べました。当時、すでに子どもがおり、いつまでも学生生活を送るわけにもいかず、また学費の面でも厳しいものがあったので、大学に入りなおす方法や、通信教育課程で取得する方法は諦めざるを得ませんでした。そんな時、短期間で取得でき、経費も割安な司書講習という選択肢があると知り、すぐに実施している大学を探しました。通学や宿泊をする資金もなかったので、自宅に近い学校を探したところ、鶴見大学に出会ったわけです。

早速募集要項を取り寄せ、申し込みをしました。その時の作文のテーマは「インターネットの発達と図書館の将来」。今読み返すと少し恥ずかしくなるような内容ですが、無事に合格し、夏の３ヶ月の講習が始まりました。自宅から講習会場までは自転車で約１時間。夏の暑い時期でしたので、会場に着く頃には汗だく。着替えを用意して通学していました。

司書講習で一番驚いたのは、高校生以来の連続講義でした。そしてすぐに試験。１日も欠席できないその過密スケジュールに、覚悟はしていたものの、慣れるまでに少し時間がかかりました。当時は子どもがまだ１歳。いつ風邪を引き、熱が出て保育園を休ませなければならなくなるかわかりません。当時、妻は仕事をしていましたので、当然、私が休む必要があったわけですが、それをしてしまうと、資格取得は先送りになってしまいます。妻にあの頃の思い出を聞くと、いつ子どもの熱が出て、お迎えに行かなければならなくなるか、ずっと気が気ではなかったと話してくれました。幸い、子どもは熱を出すこともなく、１日も休まず講習には出席できました。私が資格をとれたのは、何よりもまず、家族の協力のおかげです。

講義の中で最も思い出深いのは目録の講義です。司書講習で初めて目録という仕事があることを知りました。大学の頃にカード目録やOPAC を使っていても、それが「仕事」には結びついていなかった、というわけです。大学院の頃、参考文献のリストを作成することだけは大好きだった自分にとって最適な仕事ではないか、と雷にうたれた気持ちでした。その他、レファレンスの実習も思い出に残っています。実習では鶴見大学図書館を使わせていただき、色々な参考書を引っ張って調べた記憶があります。ウェブ上で調べることが容易になってきた現在の講習では、どのように行っているのか、気になるところです。

講習修了後はもちろん図書館の仕事を探しました。ただ未経験ではなかなか採用してもらえず苦労をしました。そんな時、「こんなお仕事どうですか？」と司書講習の担当の方から電話をいただき、とてもありがたかったのを覚えています。講習修了後、半年して国立国会図書館の非常勤の仕事に就き、晴れて図書館の仕事に携わることとなり、さらにその半年後、現在の勤務先に就職することとなりました。11 年前、夏のあの３ヶ月が今の私の原点になっています。

なかなか御礼を伝えることができず申し訳ない気持ちでいましたが、このような機会を与えてもらい、当時の思い出とともに、鶴見大学司書講習への感謝の念を伝えられることを、大変嬉しく思います。ありがとうございました。これをきっかけに、司書講習とのつながりを復活させ、現在の受講生や修了生と交流できるようなところまで発展できたらうれしいなぁと勝手に思う今日この頃です。今後も鶴見大学の司書講習から、多くの図書館員がはばたくことを期待しています。

鶴見女子大学司書講習を受講して

司書　昭和41年度修了 戸塚　隆哉

私が受講したのは、昭和41年(1966)の前期(4－9月)の夜間講座でした。もう50年近い昔のことです。当時は、鶴見大学でなく「鶴見女子大学」の時代で、山門を入ってすぐ右側の木造2階建ての校舎の2階が教室でした。トイレは男子は教職員用を使っていました。

定員は、司書および司書補各80名だったと記憶しています。科目によって、別々に講義が持たれました。司書コースの当時の科目および講師は下記のとおりです。

科　目	講　師
必修科目	
図書館通論	武田虎之助(鶴見女子大教授)
図書館実務	沓掛伊左吉(神奈川県立図整理課長)
図書選択法	北嶋　武彦(東京学芸大助教授)
図書目録法	加藤　宗厚(駒澤大図長)・
	団野　弘之(横浜国大図書館事務長)
図書分類法	加藤　宗厚
レファレンスワーク	北嶋　武彦
図書運用法	服部金太郎(図短大教授)
図書館対外活動	石井　敦(神奈川県立川崎図奉仕係長)
児童に対する図書奉仕	竹田　平(横須賀市立図長)
視聴覚資料	関　　晶(神奈川県立図視聴覚課長)
選択科目	
成人教育と図書館	小川　　剛(鶴見女子大)
特殊資料	武田虎之助
図書館史	岡田　　温(図書館短大学長)
社会教育	三輪　全龍(鶴見女子大学監)
ジャーナリズム	佐々木秀雄(神奈川新聞社社長)・
	花井清二良(神奈川新聞社副主筆)

講義時間は、17:30-20:30の3時間。私は、大学卒業後、アルバイトをしながらの通学でした。アルバイト先の近くには、もうなくなりましたが、横浜アメリカンセンターがあり、そこの図書室に休憩時間に通っては、アメリカのLibrary Journalをパラパラ見ておりました。

講義が始まり、これはまったくの偶然でしたが、卒業大学の先輩・同期の2人と巡り合わせました。母校の図書館に勤めるゼミナールの3年上の先輩、神奈川県内の公立図書館に勤め始めた同期の友人で、女性が多い部屋で、前から4列目あたりに陣取った男3人は目についたことと思います。

講義では、必修科目の中の「図書目録法」「図書分類法」「図書選択法」に特に関心がありました。卒業して、就職先で、教わった先生方の著作物に触れることで、凄い先生方が講師陣におられたことを改めて実感した次第です。

コースが終わりごろにさしかかったところ、服部金太郎先生に呼ばれて、「ドクメンテーション協会が人を探している。どうか」とのお声がかかりました。「ドクメンテーション(ドキュメンテーション)ってなんだ?」。講義ノートをひっくりかえしてみたら、北嶋武彦先生の講義で、「図書館が本を中心としたところに対し、先端技術を駆使して、本に限らず情報全般を積極的に収集しユーザーに提供する、従来の図書館業務の先を行く技術」といったメモがありました。"おもしろそう"とのことで、協会事務局に面接に出かけ、10月1日付けで採用となった次第です。保証人は、服部金太郎先生でした。以来、その後、情報科学技術協会と名称を変えて、昭和の時代(昭和41—63年の22年間)お世話になりました。

協会では、主要活動である国際十進分類法(UDC)の出版と普及および資料整理の受託、会誌編集などに携わりましたが、司書コースでお世話になった、加藤宗厚、武田虎之助、服部金太郎各先生方の「分類法」「目録法」などの著作物ではずいぶん勉強させていただきました。

特に、UDCの歴史をたどる中で、青年図書館員聯盟の機関誌「圕研究」における下記2文献は、衛藤利夫『図書分類ノ論理的原則』(間宮商店、大正15)に続く貴重なUDCを紹介した文献です。

・加藤宗厚．分類概論Ⅳ．圕研究、1933-Ⅱ、p.85-95(昭和8年)
・武田虎之助.CDU解説．圕研究、1934-Ⅱ、p.127-163(昭和9年)

夏期講習の思い出

司書　昭和54年度修了 古根村　政義
（神奈川県立図書館）

今から35年前の1979年に行われた鶴見大学の夏期講習で司書の資格を取りました。この資格のお蔭で現在の職にあるのかと思うと、人生の転機となる大学３年の夏でした。当時、私の叔父さんが横浜市の図書館に勤めていて、「司書という資格を持っているとずっと図書館で働くことができるのだが…」と会うたびに話していたので、図書館は魅力的な職場なのかなと思っていました。

しかし、当時通っていた大学では、司書の資格を取ることができず、大学の図書館の掲示で鶴見大学の夏期講習開催の案内を見ました。大学２年の修了単位があれば、応募できるとのことで３年の夏休みを利用して受講することにしました。

講習は、７月２日のオリエンテーションから始まりました。確か、最初に「今回で取れなくても単位が取れるまで何回か講習を受けることができる」と説明され、かなり取得は難しいのかなと不安を覚えました。

何回か受講しているうち、いつも座る位置が同じ人たちが、演習などを通してグループになりました。５、６人だったと思いますが、私は最年少でした。その中に、出版社の資料室の人がいて、本のことを良く知っていて色々教えていただきました。大学の先生が挙げていた洋書が手に入らないことを話した時は、何日か後に買ってきてくれて、どの書店に行けばあるか教えてもらいました。その後、よく本を買いにその書店に行きました。また、レファレンス演習のレポートを作成するために、まだ新しかった広尾の都立中央図書館にもこのグループで行きました。私は簡単な問題しかできなかったが、現場に出ていた人は、実際にどんな資料を使えば回答できるか分かっていて、経験が必要な仕事だと実感しました。

９月８日の最後の講義（確かテストだったような）までびっしり詰まっており、終った後はやりきったという充実感がありました。

講義の終了後、修了書が来るまで資格が取れているかどうかは判らないという状況だったのですが、２ヶ月間一緒に勉強し仲良くなった受講者達と、鶴見駅前の中華飯店で打ち上げを行い、別れを惜しみました。

私が司書資格を取った当時は、今はもう過去のものとなった目録カードの作成の実習を行う資料目録法という講義がありました。その後、図書館で働くようになって10年くらいは、目録カード作成が仕事の基本でした。まず、基本カードを書き、書名・著者名・件名や参照カードなどの副出カードを何枚も書きましたが、目録の電算化により目録カード自体がなくなってしまいました。しばらく、県立図書館で図書館システムの担当を行い、パソコン通信での市町村図書館とのオンライン化、インターネットによる一般公開化を行い、図書館の所蔵資料をより身近のものとして利用する環境を作ることができたと思います。

現在、さらに情報の電子化が進み、目録情報だけでなくコンテンツも自宅に居ながら入手することができるようになりました。見たいものが特定できれば、ピンポイントで資料を入手できます。今後、これだけ情報があふれている状況で、カード目録からコンピュータ目録に変わった時と同様に図書館の役割や司書の在り方はどのように変わってゆくのか、興味があります。やはり、司書は、誰もが必要な情報にたどり着くサポートをするための欠かせない役割を担ってゆくと思います。

司書講習の夏１９８１

司書　昭和56年度修了　鈴木　隆
（川崎市立多摩図書館長）

昭和 29（1954）年に鶴見大学で図書館司書及び司書補養成のため講習が始まって 60 年、心からお祝いを申し上げます。また、修了生の一人として感謝申し上げます。

私が受講したのは昭和 56（1981）年で、その 27 年目でした。今から 33 年前、井上ひさし著『吉里吉里人』がベストセラーで、テレビでは岡本太郎が「芸術は爆発だ」と叫んでカセットテープのＣＭをしていて、向田邦子が飛行機事故で亡くなった年でした。ワープロもまだ、一般的ではなく、講義で配布された資料はタイプライター打ちが多かったです。そして、気候は前年より気温が１度低い夏でした。

その夏、さまざまな理由で司書講習の受講者が集まりました。私のように図書館職場からの者や大学卒業前の学生も多かったのですが、文部省（当時）の補助金（1999 年に廃止）を得るために館長の司書資格が必要で、そのため遠方から来た還暦過ぎの受講者もいました。県人会館に泊まって２ケ月半をそこから通う人や、前年、講習途中で体調を崩し、その再挑戦の方もいました。

なんのきっかけだったか、何人かの大学在学中の受講生たちと鶴見駅前の喫茶店で毎日のように「反省会」をするようになっていました。何を話したかは、もう覚えていませんが、いまだに、年賀状のやり取りが続いている人もいます。最近もそのうちの一人に、今年５月、岡山市の図書館総合展で会うことができ、それぞれの図書館の情報交換をしました。

いくつかの印象深い授業があります。

石井敦先生の「図書館通論」では、「佐野友三郎」の名前がずいぶん私の中に刷り込まれ、最近、佐野友三郎氏が書いたものを読み直す機会があり、そのときに石井先生の、体を斜めにしてマイクを持った姿を思い出しました。

小川剛先生の「社会教育」では、その講義の中で市民の方が話をされる機会があり、その講義の方法に驚きました。ナチス・ドイツへのフランス人の無言の抵抗を描いたヴェルコール著『海の沈黙』を紹介され、感銘深く読みました。

谷昌博先生の「情報管理」は、学術論文などの取り扱いや資料の評価などを紹介されましたが、私には難しい授業でした。最終日の全体会で、何人かの先生にささやかなプレゼントをさし上げましたが、私たちの能力不足をお詫びする気持ちで谷先生にもプレゼントをお渡ししました。

講師からの言葉では、「できるだけ多くの図書館を見よ」、「話をするときは本を紹介せよ」などが印象に残っています。

また、図書館職員として知っておくべき知識をどの講義でもふれていただき、講師の先生方の細やかな配慮を感じました。

講師のなかには、鬼籍に入られた方も多いと思います。感謝を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。あの夏があって、今の私があります。あのときの学びが基本となって業務ができています。この文章を書きながら、そんな思いを改めて感じています。

あれから33年、その間に私は、18年間、スポーツ施設や青少年教育施設・教育委員会事務局に勤務し、久しぶりに図書館にもどってみて、自分の力不足・理解不足を感じるときがあります。インターネット環境での図書館のあり方や電子書籍の扱いなどについて、司書講習の講義の中で、どう取り扱われているのか、再度学び直したいとも思っています。

川崎市立図書館の職員も毎年お世話になっています。ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、今後もよろしくお願いいたします。

最後に、鶴見大学でのこの講習が今後も継続して発展し、80 年、100 年と続いていくことをお祈りいたします。ありがとうございました。

私の人生を変えた司書講習の思い出

司書　昭和56年度修了　宮本　嘉彦
（岡山市立中央図書館長）

大学生になっても将来どんな道に進みたいのか、はっきりした目標もなく、毎日を過ごしていた。３年生になって何がきっかけだったのか覚えていないが、就職するためには資格は多いことに越したことはないとの軽い気持ちで、貴大学の図書館司書夏期講習に申し込みをした。でも、最初のオリエンテーションで１単位でも落とすと司書資格が取得できないと聞いた途端、私の甘い考えは吹き飛び、大学時代では一番ハードで充実した日々を送ることとなった。

講習を受けていく中で、複数の講師の方から何「中小レポート」の内容を実践した前川恒雄氏と日野市立図書館の活動、そして「市民の図書館」へと続く日本の図書館の発展過程を聴いて、小学生のわずかな期間しか公共図書館を利用したことがなく、本を読んで勉強するところとしか思っていなかった図書館のイメージが大きく変わった。

図書館が民主主義社会を支える上で重要な役割を担っていること、特に司書は黒子に徹し、一人一人の知りたいことに応えるために、それぞれに応じた資料を適切に提供する。決して自分の考えを押しつけるのではなく、多様な価値観や考え方を持った資料を幅広く収集し、市民の方に考える材料（資料・情報）を提供する。そんな図書館の魅力に引き込まれていった。

また、この講習が社会人の方と接する初めての機会となった。図書館員を目指すために会社を辞めてきた方、既に図書館で勤められている方など、年齢も境遇も異なる様々な人が司書資格を取得するために集まり、真剣に受講している姿に熱いものを感じ、私も図書館で働きたいと真剣に考えるようになった。

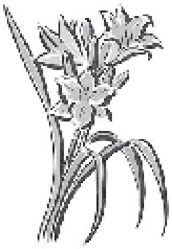
演習やグループ学習が始まるようになると、一緒に食事に行く仲間もでき、講習の話だけでなく、各自の考えや悩みを聞いたり、話したりするようになった。

それまで自分は人にどう思われているんだろうかとか、失敗したらどうしようとか悩むだけで何もしない引っ込み思案な性格だった。年齢や環境も違う人と出会い、どんな人でも悩みながらも前を向いて生きていることを知り、悩んでくよくよするより失敗してもやってみることの大切さを学んだ。そして人間ってみんな違うからいいのだと思うようになり、価値観が異なる人と出会うことに喜びを感じるようになった。

そして縁あって岡山市立中央図書館に就職して30年以上が経過した。

岡山市は田園都市で、山間部も多く図書館サービスに自動車文庫の存在は欠かせない。中でも司書講習のテキスト（『図書館学教育資料集成』３図書館活動論　白石書店　1978 年）にも取り上げられていた実践で、1971 年から実施している肢体不自由の方への家庭配本は、件数こそ少ないが今でもサービスを継続している。最近では外出することが困難な重度の知的障がいの子どもの自宅にも出向き、司書が読み聞かせをするなど新たな取組もはじめ家族からも喜ばれている。

これからも図書館で人生を楽しんだり、豊かにする人のために、そして自分のこと、家族のこと、仕事の事で、行き詰まったり悩んでいる人のために、それぞれが必要とする資料を届け続けていきたい。



パリで座禅

司書　平成３年度修了 北川　恵美子

鶴見大学司書・司書補講習 60 周年、ほんとうにおめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

平成３ (1991) 年度の夏期司書講習に学び、「燃える夏・鶴見！」を乗り越えたのが、つい最近のことのように思います。

東京国立文化財研究所（現・東京文化財研究所）資料室に勤務しながらの受講でした。

猛暑にも台風にもめげず、激しい雷雨の時には、自分がずぶ濡れになっても、テキストやノートだけは決して雨に当たらぬように大切に抱え持ち、無我夢中で学んだのを、とても懐かしく想い起こします。

夏期司書講習の後、9-10 月にも、さらに学校図書館司書教諭の講習に学び、司書と司書教諭の２つの資格を取得することができ、非常に感激しました。

講師の先生方、同期生の皆様には、たいへんお世話になり、ひたすら感謝の気持ちでいっぱいです。心から御礼を申し上げます。

おかげさまで、その後、国立西洋美術館資料室（現・研究資料センター）に、約７年間司書として勤務し、結婚・留学・長男誕生を経て、私立の中高一貫校（北区）の学校図書館に、約3.年間司書教諭として勤務しました。そして、現在は、文京区立千石図書館に司書として勤務して 7 年目になります。

修了式の時、「資格の取得は第一歩。今後の自己鍛錬こそが重要であるから、日々努力を重ねること。」というお話を拝聴し、いつも心に深く刻んで努力し続けています。

パリ留学中、思いがけなく、初めて座禅を体験する機会があり、總持寺が関東で最大の座禅の場であることを初めて知り、私の想いは一気に鶴見大学の司書講習へと駆け抜けました。

これからも、こうした御縁をいっそう大切にして、初心を忘れず、司書としての誇りを胸に、自信を深め、一生懸命、精進していきたいと思います。

夏期講習の思い出

司書　昭和58年度修了 菊地　由美子
（日本図書館協会企画調査部）

私が鶴見大学の司書講習を受講したのは1983年の夏です。学生時代から受講したいと思っていたのですが、それまで勤めていた職場を退職することを決めたので、何か新しいことを始めてみよう、そんな漠然とした気持ちで受講を申込みました。先々に確たるあてもなく、図書館員への狭き門に挑戦する意気込みもなかったのですが、どんな職業に就くにしても講習で学ぶことは役に立つだろう、自分は論文を書くよりもその手伝いをするような仕事が性にあっているのでその勉強ができるのではといった期待がありました。

しかしながら、講習の日々は、現場を知らない私にとって自分には何かが足りないという思いを起させました。無理からぬことですが、個々の授業を結びつけ図書館の運営をイメージすることができず、それを実践に生かして創意工夫しようとかそんな意欲を実感することができなかったのです。現職の方々が溌剌と授業を受けている様子に、場違いな、肩身の狭い気もありました。そんな気持ちもあり、なかなか他の方と交流もできず、課題の提出もひとりぽつんと図書館で取り組んでいました。

とはいえ、あの夏の日々、やはり思い出されるのは諸先生の教室でのおだやかなお顔です。図書館概論の前島重方先生、目録の田辺広先生、分類の芦谷清先生が教壇に立たれ、限られた時間のなかで、私達に図書館学のエッセンスと今後の学習への動機付に心を砕いておられました。何気ない言葉の端々から何とか諸先生のメッセージを受け止めようと努めていました。また諸先生は大学で図書館学を講じられるとともに図書館の発展のために幅広い分野で活躍されていました。

そういった活動に携わるお姿からも図書館とは何だろうと考えるきっかけを与えていただいたと思っています。

夏季講習から一年後、私は現在の職場に就職いたしました。図書館関係団体の事務局です。事務局職員の役割はある種論文を書く手伝いと似たところがあると自分なりに考えています。30年前の私の予感はあながち間違いではなかったと納得しているわけで、この30年の出発点はあの夏の日々ということになります。職業人としての時間は残り少なくなっていますが、事務局職員として責任をまっとうすることで関係者のみなさまのご恩に報いたいと思います。

鶴見大学と夏季講習の今後のご発展を心からお祈り申しあげます。

司書講習受講の思い出：最後の夜間司書講習修了生

司書　昭和59年度修了 鈴木　恵津子
（東京家政大学図書館）

鶴見大学司書・司書補講習様が 60 周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

私が本講習を受講させていただいたのは昭和59年度の夜間司書講習です。この昭和59年度は鶴見大学夜間開講最後の年でした。受講期間は昭和59年５月から昭和60年１月（7,8 月は除く）、月曜から金曜 18 時から 21 時の授業に平日毎日鶴見大学に通いました。後期はこれに加え、参考業務演習やレポートのため土日は都立中央図書館に通い、夜間司書講習の仲間ともどもげっそりやせました。

ともかく、30 年前のこと。60 周年記念誌事務局の方に「昭和 59 年度司書・司書補講習案内」のパンフレットを送っていただきました。以下は当時の夜間司書講習のカリキュラム内容です。

「昭和59年度司書・司書補講習案内」より夜間司書講習の科目と講師

甲群	図書館通論	慶應義塾大学名誉教授	中村初雄
	図書館資料論	東海大学助教授	森　睦彦
	参考業務	慶應義塾大学福沢諭吉研究センター	丸山 信
	同上演習	鶴見大学助教授 横浜市立大学図書館司書	武田元次郎 阿津坂林太郎
	資料目録法	鶴見大学教授	田辺 広
	同上演習	鶴見大学助教授 国立特殊教育総合研究所情報課長補	岡田 靖 節田 益康
	資料分類法	国立国会図書館司書監	丸山昭二郎
	同上演習	神奈川県立川崎図書館資料部長 神奈川県立川崎図書館普及課長	岩崎 厳 池田 孝
	図書館活動	東洋大学教授 関東学院大学教授	石井 敦 久保輝巳
乙群	青少年の読書と資料		平塚禅定
	図書及び図書館史	杉並区立中央図書館長	佐藤政孝
	図書館の施設と設備	図書館計画施設研究所長	菅原 峻
	資料整理法特論	横浜開港資料館	石井光太郎
	情報管理	東洋大学講師	谷 昌博
丙群	マスコミュニケーション	横濱資料普及協会	花井清二良
	視聴覚教育	東京大学社会科学研究所助手	塚越つた子
	社会教育	お茶の水女子大学講師	笹川孝一
	人文科学及び社会科学の書誌解題	鶴見大学教授	関根 透
	自然科学と技術の書誌解題	昭和大学図書館事務長	板橋瑞夫

昭和 59 年当時はカード目録の時代です。「図書館目録法」は日本目録規則新版予備版を習いました。「図書館活動」は、『中小都市における公共図書館の運営』（中小レポート）をまとめられた石井敦先生。石井敦先生はいつも黒のタートルネックをお召しになられていたように記憶します。

現在、東京家政大学図書館に奉職し、22 年になります。この 22 年の間、カード目録は消えOPAC がネットワークにつながり、資料についていえば電子リソースの資料費が占める割合が年々大きくなってきています。

利用者である学生は生まれた時からインターネットがある世代です。図書館の業務委託化も進んでいます。大学図書館は資料の提供だけでなく、積極的な学修支援の場であることも強く求められています。

図書館職員としての業務内容も変化しました。個人的には情報リテラシー教育支援は授業内及び図書館主催の企画 / 実施を担当しています。本学板橋キャンパスの大学１年全員に対し、必修科目で各クラス１回分をいただき「図書館活用法」の授業をさせていただいております。

この数年はゼミ単位の授業で「文献の探し方」の説明をさせていただくことも増えてまいりました。さらに、就職活動支援として就職担当部署との共催で「企業情報の探し方」にもあたっています。

また、機関リポジトリの立ち上げ、学内他部署と協働し機関リポジトリとリンクする研究者データベースの構築に関わるなど、図書館の中だけでなく教員や学内の様々な部署と連携を強化しながら進めていく仕事が多くなりました。

図書館を取り巻く環境の変化に伴い、図書館職員の業務内容が変容しても、22 年変わらぬ原点があります。「図書館通論」での中村初雄先生のご講義が昔も今も不変の哲学を示しています。

ランガナタンの図書館学五原則です。

1．本は利用するためのものである
2．本はすべての人のためにある。または、
　すべての人に本が提供されなくてはならない
3．すべての本をその読者に
4．読者の時間を節約せよ
5．図書館は成長する有機体である

図書館司書としては古参な一人となりました。次世代を担う後輩にそろそろバトンタッチをする時期に入っています。これからは生き残り司書としてわずかながら蓄積してきたことの継承に尽力するとともに、原点を常に意識しながら、様々な人や部署の「つなげる力」を強める活動をしていきたいと思います。

最後になりましたが、鶴見大学司書・司書補講習様がこれからもますますご発展されますよう心より祈念いたします。そして、多くの優れた人材を輩出され、図書館がさらに成長する有機体へと発展していくことを願ってやみません。

鶴見大学の図書館学教育と講習での思い出

司書補　平成２年度修了　橋本　典尚

１・はじめに

90 年代の鶴見大学には、人と資料を大切にする意識が大きかったように思う。1995 年に公開された「耳をすませば」は、主人公が、図書館で借りた本のブックカードを通しての出会いからはじまっている。電子化が進んだ現在では、実感も少ない。だが、手作業だった頃のふれあいには、忘れてしまった何かを思い出させる気がする。そこで、講習での思い出から、少しふれてみることにする。

２・司書補講習での思い出

私ほど、鶴見大学の先生方はじめ職員さんに、進路で心配を頂いた修了生は、いないように思う。講習修了後は、勤務を経て、短期大学・大学に進学、東洋大学大学院を修了して、女子大、医大短大、県立大などで講師の機会を頂いてきた。私にとって、鶴見大学・總持寺とのつながりは、親類の旧青葉学園との関係で、幼い頃から少し縁がある。高校卒業後、すぐに鶴見大で講習を受けようと思ったのには、高校時代の司書、青山令子（鶴見大学司書講習修了）先生と小林美奈子（鶴見女子大学卒業）先生の影響も大きかった。そんな身近な環境から、自然と鶴見大の講習に興味を持った気がする。

久しぶりに、本棚の奥から『一夏会報』を出した。私自身も、第 40・41・44 号に寄稿している。1990 年の当時は、現在の夏期講習と少し違って、ハードスケジュールであった。７月９月は、女子大生の授業と重なり夜２コマ、７月末８月の昼５コマと、びっしりであった。また、メインの 201 教室には、クーラーがなく暑く、司書補 50 名中、10 代は私を含め４名だけで、遠方からの通学もいた記憶がある。朝 8:30 の予鈴前にいらしていた丸山昭二郎（鶴見大学教授）先生の「図書の目録と分類」、新鮮だった「製本と修理」「複写技術」、試験が終わると、合格者一覧が掲示された「ドキドキ」はスリルであった。緊張感がやわらいだ岡田靖（鶴見大学教授）先生の「図書の目録分類演習」、「こんちは」と気にかけて頂いた堀込静香（2003 年逝去）先生の「参考書解題」、物語的であった角家文雄（鶴見大学教授）先生の「図書館史」、「図書館学は人が基本」と話された鹿児島達雄（1999 年逝去）先生の「閲覧と貸し出し」と、共通して、「多くの人と資料をみて知ろうとする」視点があったと感じる。

３・鶴見大学の図書館学教育

2012 年から司書養成機軸が、図書館法（1950）改正によって、大学講習から大学教育に移行した。その間、司書養成を中心的に行ってきたのが東洋大学（1950 ～ 1974）と鶴見大学（1954 ～）である。特に、東洋大学が講習を終了してからは、中心的な役割をはたしてきた。

鶴見大学図書館学教育の特色として、二つあると考える。ひとつには、「ドキュメンテーション意識」である。堀込静香（2003 年逝去）先生は、「資料の収集と情報書誌の重要性」を示唆されていたが、海野雅央 (2014) 先生によると、岡田温（2001 年逝去）先生も「図書館員はとにかく資料を知らなければ始まらないと先生自らが見学を行った」そうである。もう一つには、「有機体として現在意識」である。岩淵泰郎（2004 年逝去）先生によれば、武田虎之助（1974 年逝去）先生は「図書館に定型はない」として「常に変動し発展する社会に存在する」理念が大きかったそうである。そういった意味では、私自身、図書館学教育で、姉妹校と言える鶴見大学と東洋大学で修了・卒業できた経験は、貴重であったと思う。

インターネットなど情報化社会の現在、私自身、「資料収集」「情報書誌」は、やさしくなったように思う。だが、先年、鎌倉の小学校から全国展開した「ネサヨ運動 (1957 ～ 1966)」と、九州で地域展開した「ネハイ運動 (1961 ～ 1965)」について、調査をはじめてから考えが変わった。「おはよう週間」など、各地で行われている学校活動でありながら、図書館にも資料は残ってなく、先の報告まで、詳細は知られていなかった。公文書管理法 (2008) など整った現在、教育資料について、小中高だけでなく大学でも、ほとんど行われていない状況は、図書館学として資料構築をみてこなかった点と言える。

４・むすびに

鶴見大学の司書補講習と図書館学特別講習から約 20 年、当時を知る先生方も旧本館もいまはない。唯一、変わらない大学図書館の雰囲気は、ほっとできる空間でいる。

これからの鶴見大学図書館学教育に求めるものとして、私的に二つある。ひとつには、修了生が投稿できる『一夏会報』の再考である。もう一つは、鶴見大学図書館学講習出身者の教員が鶴見大学で生まれることである。私自身、司書は、短大の時に取得したが、専門領域が複合化する現在、研究教育側の一人として、図書館学教育と国家資格の司書が、どこに向かうのか、今後も見て行きたく思う。

最後に、『鶴見大学司書・司書補講習 60 周年記念誌』の刊行を楽しみにして、鶴見大学図書館学（司書・司書補）講習 60 周年記念のお祝いを述べると共に、人とドキュメンテーション資料意識を大切にする「図書館学の鶴見大学」として、今後の発展を心からお祈り申し上げ、むすびとする。

資　　料

鶴見大学司書・司書補講習年表

網掛けは本学講習関連

西暦	和暦	月 日	事 項
1944	昭和 19	1 月 12 日	学園の経営母体を財団法人総持学園とする。
1950	昭和 25	4 月 30 日	図書館法公布
		7 月 30 日	同法施行
		9 月 6 日	図書館法施行規則公布・施行
1951	昭和 26	3 月 10 日	学校法人総持学園に組織変更
1953	昭和 28	4 月 1 日	鶴見女子短期大学国文科開設 学長　中根環堂　　学監　中野愚堂 図書館長　中根専正
		8 月 8 日	学校図書館法公布
1954	昭和 29	4 月 1 日	同法施行
		4 月 24 日	文部省認定の司書講習、文部大臣委嘱の司書補講習開講（※１） 4 月から 9 月まで（前期）、10 月から 3 月まで（後期）の二コースに分け、土・日曜日に集中的に実施。後期から司書教諭養成コースを設ける。
		12 月	『一夏会報』(いちげかいほう) 発刊
1955	昭和 30	4 月	前期を夜間講習とし、 土・日曜日の講習は、後期のみとした。 夏期講習（7・8 月に集中的）開始
1956	昭和 31	3 月 7 日	司書講習、文部大臣委嘱を受ける。
1961	昭和 36	9 月	『一夏会報』復刊
1962	昭和 37	4 月 1 日	短期大学に保育科・保健科開設
1963	昭和 38	4 月 1 日	鶴見女子大学文学部日本文学科・英米文学科開設
		7 月 1 日	一夏会 (いちげかい) 発足
		9 月 1 日	女子大学開設に伴い、『一夏会報』大学第 1 号刊行
1968	昭和 43	3 月 29 日	図書館法施行規則の一部を改正する省令公布、司書講習の開講科目・単位数が変更される。 司書の必要修得単位数は 13 科目 19 単位 (必修科目 9 科目 15 単位、選択科目 4 科目 4 単位) となる。
		4 月 1 日	同省令施行
1969	昭和 44	4 月 1 日	土・日曜日講習廃止 通年の夜間講習と夏期講習の 2 コースとなる。
1970	昭和 45	4 月 1 日	歯学部歯学科開設
1973	昭和 48	4 月 1 日	鶴見女子大学を鶴見大学と名称変更
1978	昭和 53	4 月 1 日	司書補講習は夜間のみの開講となる。
1979	昭和 54	8 月 25 日	第 1 回図書館学講習特別講演会「わが図書館人生を語る」(講師 加藤宗厚) 開催
1981	昭和 56	8 月	図書館学特別公開講座開催（※２）
1985	昭和 60	4 月 1 日	夜間講習が廃止され、夏期講習のみの開講となる。
1996	平成 8	8 月 28 日	図書館法施行規則の一部を改正する省令公布、司書・司書補講習の開講科目・単位数が変更される。 司書の必要修得単位は 14 科目 20 単位 (必修科目 12 科目 18 単位、選択科目 2 科目 2 単位)、 司書補の修得単位は、必修科目 11 科目 15 単位となる。
1997	平成 9	4 月 1 日	同省令施行
1998	平成 10	4 月 1 日	文学部文化財学科開設
2004	平成 16	4 月 1 日	文学部ドキュメンテーション学科開設
2005	平成 17	8 月 27 日	ドキュメンテーション学会と共催で第 2 回デジタルライブラリー国際セミナー 「学習におけるデジタルライブラリーの活用：G- ポータルの経験」(講師 Lim Ee Peng) 開催（※３）
2008	平成 20	6 月 11 日	図書館法及び図書館法施行規則の一部を改正する法律・省令公布・施行 (但し、一部規定は、2010.4.1 施行)
2009	平成 21	4 月 30 日	図書館法施行規則の一部を改正する省令公布。司書講習の開講科目・単位数が変更される。 司書の必要修得単位数は 13 科目 24 単位 (必修科目 11 科目 22 単位、選択科目 2 科目 2 単位) となる。
2010	平成 22	4 月 1 日	同省令施行 (但し、図書館法施行規則第 4 条の科目・単位数の表は、2012.4.1 施行)
2014	平成 26	9 月 13 日	鶴見大学司書・司書補講習 60 周年記念式典を挙行、『鶴見大学司書・司書補講習 60 周年記念誌』を刊行

講習の呼称

※１鶴見大学の司書・司書補講習は現存する資料によると、昭和 38 年度までは、"図書館学講座"と呼ばれていたようである。その後、"図書館学講習"となり、昭和43年度からは"司書･司書補講習"で、定まった。講習が夏期のみとなったのは昭和 60 年度からだが、呼称は平成 4 年度から"司書・司書補夏期講習"となっている。

※２昭和 56 年度から始まった"図書館学特別公開講座”は、翌 57 年度には"図書館学公開講座"そしてまた翌年の昭和 58 年度には"図書館学特別上級講座"となり、平成 2 年度からは"図書館学特別講座"となった。

※３講習に関連して、昭和 54 年から開催されていた"特別講演会"は、平成 17 年度より"デジタルライブラリー国際セミナー"としてドキュメンテーション学会と共催で行われている。(但し第 1 回と第 3 回はドキュメンテーション学会のみによる開催) また、昨年はデジタルライブラリーに特化しない講演会が久しぶりに開かれた。

いずれも講習・講座案内、及びその他学内刊行物による

一夏会報について

刊行の経緯と状況

一夏会報は、昭和29年12月に受講生の同志により「一夏會」が発刊した。第５号まで前期・後期の終了の度に刊行された後しばらく休刊し、昭和 36 年に復刊第１号が刊行され、昭和 38 年に本学に四年制大学が新設されて以後あらためて１号から定期的に刊行されるようになった。復刊後は夏期講習のみの会報だったが、昭和 48 年度夜間部講習生の申し出以後、夜間講習が廃止された昭和 60 年度前まで、毎年 2 回刊行された。それ以降夏期講習終了後に毎年１回刊行されている。

内　容

創刊当初から講師と受講生の寄稿を主体としていた。同志による創刊より第５号までは、手書きのガリ版印刷で、表紙がカラーだった。復刊以後製本冊子として平成 13 年度まで刊行され、平成14年以後はフルカラーのリーフレットとなった。同志による５号からは講師・受講生の名簿が巻末に付されるようになり、19 号からは講師と受講生の全体写真も掲載されるようになった。受講生の寄せ書きが付されている号もある。また、本学が四年制大学になって以後の号表示は頭に「大学」と記されていたが、次第に記されなくなり 18 号からは号数表示のみとなった。リーフレットとなってからは、一夏会から鶴見大学に発行元が変わっている。

「一夏会」の由来

当時を知る本学元職員講習担当者の言によれば、創刊時の発行者「一夏會」を命名したのは、当時の学監中野愚堂だという。また、「一夏会」は昭和 38 年７月に発足と一夏会報の講習沿革にあり、その初号の巻頭に学監三輪全龍により発足の由縁が書かれている。

補　足

一夏会報は、本学図書館で同志による創刊号から最新号まで、一部コピーのものであるが、すべて所蔵している。また、一夏会報大学第１号から第 44 号までに収載された 1060 篇の論文・記事等を執筆者名・標題・巻号順で掲載された一夏会報・記事索引が試作・準備版としてある。

一夏会報発行詳細

巻号	開講年度	頁	名簿	写真	変遷
創　刊　号	1954 年度 [前]				AB
第　2　号	1954 年度 [後]	24			A
第　3　号	1955 年度 [前]	31			
第　4　号	1955 年度 [後]	22			
第　5　号	1956 年度 [前]	24	○		
復刊 1 号	1961 年度 [夏]	60	○		B
大学 1 号	1963 年度 [夏]	51	○		A
大学 2 号	[1964 年度夏]	37	○		
大学 3 号	1965 年度 [夏]	44	○		
大学 4 号	[1966 年度夏]	30	○		
大学 5 号	[1967 年度夏]	28	○		B
大学 6 号	[1968 年度夏]	40	○		BC
大学 7 号	[1969 年度夏]	44	○		C
大学 8 号	[1970 年度夏]	52	○		
大学 9 号	1971 年度 [夏]	41	○		
大学 10 号	1972 年度 [夏]	68	○		
大学 11 号	1973 年度 [夏]	87	○		
大学 12 号	[1973] 年度 [夜]	35	○		A
大学 13 号	1974 年度 [夏]	68	○		
14 号	1974 年度 [夜]	43	○		
大学 15 号	1975 年度 [夏]	54	○		
16 号	1975 年度 [夜]	28	○		
大学 17 号	1976 年度 [夏]	54	○		
18 号	1976 年度 [夜]	32	○		
19 号	1977 年度夏	72	○	○	
20 号	1977 年度夜	74	○		
21 号	1978 年度夏	75	○	○	
22 号	1978 年度夜	52	○	○	
23 号	1979 年度夏	80	○	○	
24 号	1979 年度夜	41	○	○	
25 号	1980 年度夏	63	○	○	
26 号	1980 年度夜	34	○		
27 号	1981 年度夏	64	○	○	
28 号	1981 年度夜	55	○	○	
29 号	1982 年度夏	29	○	○	

巻号	開講年度	頁	名簿	写真	変遷
30 号	1982 年度夜	28	○	○	
31 号	1983 年度夏	41	○	○	
32 号	1983 年度夜	31	○	○	
33 号	1984 年度夏	49	○	○	
34 号	1984 年度夜	46	○	○	
35 号	1985 年度	48	○	○	C
36 号	1986 年度	59	○	○	
37 号	1987 年度	60	○	○	
38 号	1988 年度	56	○	○	
39 号	1989 年度	75	○	○	
40 号	1990 年度	101	○	○	
41 号	1991 年度	110	○	○	
42 号	1992 年度	165	○	○	
43 号	1993 年度	135	○	○	
44 号	1994 年度	205	○	○	
45 号	1995 年度	176	○	○	
46 号	1996 年度	203	○	○	
47 号	1997 年度	163	○		
48 号	1998 年度	118	○		
49 号	1999 年度	95	○		
50 号	2000 年度	91	○		
51 号	2001 年度	180	○		
52 号	2002 年度	10	○		B
53 号	2003 年度	4			
54 号	2004 年度	8			
55 号	2005 年度	8			
56 号	2006 年度	8			
57 号	2007 年度	8			
58 号	2008 年度	8			
59 号	2009 年度	8			
60 号	2010 年度	8			
61 号	2011 年度	8			
62 号	2012 年度	8			
63 号	2013 年度	8			

変遷

- 変遷 A　発行者：一夏會 (創刊号) → 鶴見女子短期大学図書館学講座一夏会 (2 号 -) → 鶴見女子大学図書館学講座一夏会 (大学 1 号 -) → 鶴見大学図書館学講習一夏会 (大学 12 号 -) → 鶴見大学 (52 号 -)
- 変遷 B　形態・形式等：B5, 手書き , 謄写版 (創刊号 -) → A5, タイプ版 (復刊 1 号 -) → タイプオフ印刷 (大学 5 号 -) → 活版印刷 (大学 6 号 -) → リーフレット , フルカラー (52 号 -)
- 変遷 C　講習形式：通年の土日講習と夏期講習 (1968) → 通年の夜間講習と夏期講習 (1969-) → 夏期講習のみ (1985-)

注

- 項目の「名簿」は講師・受講生名簿の有無、「写真」は講師・受講生集合写真の有無
- 印刷形態については一夏会報記事索引 (準備版) による
- [　] は補記

歴代図書館長／歴代司書・司書補講習主任教授

歴代図書館長

	氏　　名	所　　属	在　任　期　間
初　　代	中　根　専　正	短期大学教授	昭和 28 年 4 月～昭和 38 年　3 月
第　二　代	武　田　虎之助	文学部教授	昭和 38 年 4 月～昭和 49 年 11 月
第　三　代	岡　田　　温	文学部教授	昭和 50 年 4 月～昭和 55 年　3 月
第　四　代	中　村　初　雄	文学部教授	昭和 55 年 4 月～昭和 57 年　3 月
第　五　代	手　崎　政　男	短期大学部教授	昭和 57 年 4 月～昭和 60 年　3 月
第　六　代	池　田　利　夫	文学部教授	昭和 60 年 4 月～昭和 62 年　3 月
第　七　代	千　葉　元　丞	歯学部教授	昭和 62 年 4 月～平成 元 年　3 月
第　八　代	丸　山　昭二郎	文学部教授	平成 元 年 4 月～平成　7 年　3 月
第　九　代	納　冨　常　天	文学部教授	平成　7 年 4 月～平成　9 年　3 月
第　十　代	宇賀治　正　朋	文学部教授	平成　9 年 4 月～平成 11 年　3 月
第十一代	大　森　郁　朗	歯学部教授	平成 11 年 4 月～平成 13 年　3 月
第十二代	露　木　悟　義	短期大学部教授	平成 13 年 4 月～平成 15 年　3 月
第十三代	高　田　信　敬	文学部教授	平成 15 年 4 月～平成 19 年　3 月
第十四代	朝　田　芳　信	歯学部教授	平成 19 年 4 月～平成 24 年　3 月
第十五代	二　藤　　彰	歯学部教授	平成 24 年 4 月～

歴代司書・司書補講習主任教授

	氏　　名	在　任　期　間
初　　代	武　田　虎之助	昭和 38 年 4 月～昭和 49 年 11 月
第　二　代	岡　田　　温	昭和 50 年 4 月～昭和 55 年　3 月
第　三　代	中　村　初　雄	昭和 55 年 4 月～昭和 57 年　3 月
第　四　代	田　辺　　広	昭和 57 年 4 月～昭和 63 年　3 月
第　五　代	角　家　文　雄	昭和 63 年 4 月～平成 元 年　3 月
第　六　代	丸　山　昭二郎	平成 元 年 4 月～平成　9 年　3 月
第　七　代	武　田　元次郎	平成　9 年 4 月～平成 16 年　3 月
第　八　代	岡　田　　靖	平成 16 年 4 月～平成 24 年　3 月
第　九　代	原　田　智　子	平成 24 年 4 月～

鶴見大学図書館学講習特別講演会

回数	年	月 日	曜日	開催時間	講師名・肩書・演題	
1	昭和54年 (1979)	8月25日	土		加藤　宗厚	国立国会図書館上野分館長
					わが図書館人生を語る	
2	昭和55年 (1980)	8月30日	土		岡田　温	前鶴見大学図書館長・図書館学主任教授
					わが図書館人生を語る	
3	昭和56年 (1981)	9月 5日	土		叶沢　清介	前日本図書館協会事務局長
					私の図書館人生を語る	
4	昭和57年 (1982)	9月 4日	土	10：00～ 11：30	石井　富之助	元小田原市立図書館長
					私の図書館人生を語る	
5	昭和58年 (1983)	9月 3日	土	10：00～ 11：30	浪江　虔	私立鶴川図書館館長
					私の図書館人生を語る～農村図書館運動をめぐる実践活動　公立図書館の最近15年間における躍進状況	
6	昭和59年 (1984)	9月 7日	金	10：00～ 11：30	榎　一雄	東洋文庫長、同文庫理事長
					東洋文庫の歴史と現在	
7	昭和60年 (1985)	9月 6日	金		中村　初雄	慶應義塾大学名誉教授・元鶴見大学図書館学主任教授
8	昭和61年 (1986)	9月20日	土	13：30～ 15：00	長野　裕	武蔵野短期大学学長
					わが図書館人生を語る	
9	昭和62年 (1987)	9月19日	土	13：30～ 15：00	高鳥　正夫	東横学園女子短期大学学長
					図書館の新築と利用者の増加	
10	昭和63年 (1988)	9月24日	土	13：00～ 14：30	岡田　温	元鶴見大学図書館長・図書館学主任教授
					私と図書館	
11	平成元年 (1989)	9月16日	土	12：30～ 14：00	手崎　政男	元鶴見大学図書館長
					資料の偶然	
12	平成2年 (1990)	9月28日	金	16：00～ 17：30	澤本　孝久	元慶應義塾大学教授（文学部図書館・情報学科）
					科学技術の調査研究	
13	平成3年 (1991)	9月21日	土	13：00～ 15：00	高橋　徳太郎	日本図書館協会理事長
					日本における調査図書館	
14	平成4年 (1992)	9月19日	土	12：30～ 14：30	栗原　均	日本図書館協会事務局長
					日本図書館協会100年の歩み	
15	平成5年 (1993)	9月18日	土	12：30～ 14：30	武田　英治	元神奈川県立図書館長
					図書館と私	
16	平成6年 (1994)	9月17日	土	12：30～ 15：00	濱田　敏郎	慶應義塾大学名誉教授、現常磐大学教授
					図書館利用教育と私	
17	平成7年 (1995)	9月16日	土	12：30～ 15：00	白石　一哉	情報図書館 RUKIT 館長
					情報図書館の活動とデータベース最新動向	
18	平成8年 (1996)	9月14日	土	12：30～ 14：30	石井　敦	東洋大学名誉教授
					人物から見た図書館の歩み	
19	平成9年 (1997)	9月12日	木	16：30～ 18：00	森　睦彦	東海大学教授
					『日本人物文献目録』の完成に向って	
20	平成10年 (1998)	9月26日	土		藤野　幸雄	図書館情報大学副学長
					図書館員とはいかなる人種か	

鶴見大学図書館学講習特別講演会

回数	年	月 日	曜日	開催時間	講師名・肩書・演題	
21	平成 11 年 (1999)	9 月 17 日	金		今　まど子	中央大学教授
					私の見た世界の図書館	
2000 年度（平成 12）から 2004 年度（平成 16）は未開催 2005 年度（平成 17）からはデジタルライブラリー国際セミナーとして、ドキュメンテーション学会と共催で開催 （但し、第 1 回と第 3 回についてはドキュメンテーション学会のみで開催）						
1	平成 16 年 (2004)	12 月 22 日	水	15：00 〜	Ching-chih Chen	シモンズカレッジ図書館情報学大学院教授
					世界に情報提供 Global Memory Net： 日本の貴重なコンテンツへの海外からのアクセスの可能性を探る (Global Memory Net Offers the World Instantly : Potentials for Universal Access to Invaluable Japanese Contents)	
2	平成 17 年 (2005)	8 月 27 日	土	13：30 〜 15：00	Ee-Peng Lim	ナンヤン工科大学コンピュータ工学部準教授
					学習におけるデジタルライブラリーの活用：G - ポータルの経験 (The Use of Digital Libraries in Learning: the G-Portal Experience)	
3	平成 18 年 (2006)	5 月 30 日	火	18：00 〜	佐藤　純子	国際連合ダグ・ハマーショルド図書館 (収集 / 情報処理課長)
					国際連合ダグ・ハマーショルド図書館 (United Nations Dag Hammarskjöld Library)	
4	平成 18 年 (2006)	8 月 26 日	土	13：30 〜 15：00	Peter Young	米国農商務省国立農学図書館館長
					デジタル時代の米国国立農学図書館の今後のあり方 (US National Agricultural Library in the Digital Age)	
5	平成 19 年 (2007)	9 月 1 日	土	13：30 〜 15：00	Mei-Mei Wu	国立台湾師範大学図書資料学研究所所長
					図書館員のための情報リテラシー教育 (Information Literacy Education for Librarians)	
6	平成 20 年 (2008)	8 月 30 日	土	13：00 〜 15：00	Toni Greider	ケンタッキー大学研究図書館副館長
					デジタル時代における大学図書館・公共図書館の新たな役割 (The Recent Trends of Academic and Public Libraries in United States)	
7	平成 21 年 (2009)	9 月 5 日	土	13：30 〜 15：00	Schubert S.D. Foo	南洋理工大学　ヒューマニティ・アーツ社会科学部副学部長
					シンガポールにおける図書館の最新動向と図書館員の教育 (Library Trends and Library Training in Singapore)	
8	平成 22 年 (2010)	9 月 4 日	土	13：30 〜 15：00	林　志鳳 (Chihfeng P. Lin)	世新大学 副教授
					台湾における公共図書館・学術図書館の動向と図書館員の専門力の育成 (The Trends of Public and Academic Library in Taiwan : Milestones of the LIS Professional Development)	
9	平成 23 年 (2011)	9 月 3 日	土	13：30 〜 15：00	小西　ひさみ　スプリンガー (Hisami Konishi Springer)	ハワイ大学図書館　司書
					ハワイにおける学術・公共図書館の動向と図書館員・情報関連専門職員の育成 (Trends in the Education of Librarians and Information Professionals for Public and Academic Libraries in Hawaii)	
10	平成 24 年 (2012)	9 月 1 日	土	13：30 〜 15：00	アリソン チャン (Allison Zhang)	米国議会図書館 ワールドデジタルライブラリー (メタデータ・マネージャー)
					米国議会図書館が提供する「World Digital Library」 〜現在のサービス内容と将来の方向について語る〜 (Introduction to the World Digital Library)	
11	平成 25 年 (2013)	8 月 31 日	土	13：30 〜 15：00	澤田　大祐	国立国会図書館調査及び立法考査局調査員
					国立国会図書館における立法補佐サービス (ドキュメンテーション学会後援による講習特別講座)	

鶴見大学図書館学特別講座概要

年度	開講日時（日数）			定員	講師名・肩書・演題
昭和 56 (1981)	8 月 15 日（土） ～ 9 月 5 日（土）		4 日間 （土）	１００名	図書館建築の可能性 ・東京大学附属図書館長　裏田武夫教授 ・筑波大学建築学　栗原嘉一郎教授
昭和 57 (1982)	7 月 17 日（土） ～ 8 月 7 日（土）		4 日間 （土）	１００名	図書館の機械化 ・文部省社会教育局社会教育官　田中久文 ・東京工業大学図書館整理課長　浅野次郎
昭和 58 (1983)	8 月 8 日（月） ～ 8 月 12 日（金）	A コース	5 日間	各３０名	図書館の機械化（12 日は、東京工業大学図書館見学） ・慶應義塾大学助教授　上田修一 ・鶴見大学教授　田辺　広
		B コース			古典資料（12 日は、一ツ橋大学古典資料センター見学） ・千葉商科大学教授　細谷新治 ・兵庫教育大学助教授　岡崎義富
昭和 59 (1984)	8 月 6 日（月） ～ 8 月 10 日（金）	A コース 9 時～ 12 時	5 日間	各３０名	図書館の機械化（10 日は、国立国会図書館見学） ・国立国会図書館電子計算課主査　田村貴代子 ・ミシガン大学アジア図書館長補佐　斎藤雅英
		B コース 13 時～ 16 時			古典資料（和書）（10 日は、国文学研究資料館見学） ・国文学研究資料館教授　安澤秀一 ・鶴見大学文学部教授　池田利夫
昭和 60 (1985)	8 月 5 日（月） ～ 8 月 9 日（金）	A コース 9 時～ 12 時	5 日間	各５０名	図書館の機械化Ⅲ（ネットワーク）（9 日は、東京大学文献情報センター見学） ・東京大学文献情報センター助教授　内藤衛亮 ・国際基督教大学図書長補佐　鬼頭当子
		B コース 13 時～ 16 時			古典資料Ⅲ（アジア資料整理）（9 日は、東洋文庫見学） 「東洋文庫の改革と共に様々なアジア関係資料について」など ・東洋文庫主査　渡辺兼庸 ・跡見学園女子大学教授　和泉　新
昭和 61 (1986)	8 月 4 日（月） ～ 8 月 8 日（金）	A コース 9 時～ 12 時	5 日間	各５０名	図書館の機械化Ⅳ（公共図書館の機械化とネットワーク）（8 日は、都立中央図書館見学） ・杉並区立中央図書館長　佐藤政孝 ・都立中央図書館収書課長　長南信生
		B コース 13 時～ 16 時			特殊資料の整理Ⅰ（視聴覚資料）（8 日は、NHK 放送総局資料部見学） ・NHK 放送総局資料部副部長　稲田正康
昭和 62 (1987)	8 月 31 日（月） ～ 9 月 4 日（金）	A コース 9 時～ 12 時	5 日間	各５０名	図書館の機械化Ⅴ（出版と流通）（4 日は、丸善㈱ MASIS センター見学） ・丸善㈱取締役　関根隼治他 ・㈱紀伊國屋書店取締役　坂本徹朗他
		B コース 13 時～ 16 時			特殊資料の整理Ⅱ（西洋古典資料）（4 日は、一橋大学社会科学古典資料センター見学） ・兵庫教育大学助教授　岡崎義富 ・大東文化大学助教授　武者小路信和
昭和 63 (1988)	9 月 5 日（月） ～ 9 月 9 日（金）	A コース 9 時～ 12 時	5 日間	各５０名	図書館の機械化Ⅵ（目録の機械化と NCR1987 年版―NCR の解釈と演習―） ・国立国会図書館図書館研究所長　丸山昭二郎 ・国立国会図書館図書部主査　和中幹雄 ・金沢大学附属図書館情報サービス課長　永田治樹
		B コース 13 時～ 16 時			特殊資料整理Ⅲ（視聴覚資料の整理・保管･運用、システムの利用方法及び著作権法について―現状と将来―） ・㈱東和エンジニアリング教育システム部課長　中村雅男 ・東京情報大学教育研究情報センター主任　伊藤敏朗 ・㈳映像文化製作者連盟理事・事務局長　山本克己
平成元 (1989)	9 月 18 日（月） ～ 9 月 29 日（金）	A コース 18 時～ 20 時	10 日間	各５０名	図書館の機械化Ⅶ（オンライン /CD-ROM 目録－入門と演習） ・㈳日本図書館協会書誌情報センター主幹　遠矢勝昭 ・鶴見大学講師　堀込静香
	9 月 4 日（月） ～ 9 月 8 日（金）	B コース 14 時～ 17 時	5 日間		資料保存Ⅰ（図書館資料保存の歴史と課題―世界的潮流の中で―） ・国立国会図書館協力部国際協力課主査　安江明夫

鶴見大学図書館学特別講座概要

年度	開講日時（日数）			定員	講師名・肩書・演題
平成２ (1990)	９月３日（月） ～ ９月14日（金）	Ａコース 16時～18時	10日間	各５０名	情報処理Ⅰ(オンライン /CD-ROM- 入門と演習 2) ・㈳日本図書館協会書誌情報センター主幹　遠矢勝昭 ・鶴見大学文学部講師　堀込静香
	９月18日､21日､ 25日､28日､ 10月２日、５日､ ９日､12日､ 16日､19日	Ｂコース 18時30分～ 20時30分	10日間 (火・金)		古典資料Ⅰ―漢籍、国書、古筆、歴史、仏書について― ・東洋文庫長　渡辺兼庸 ・鶴見大学教授 岩佐美代子、大三輪龍彦、納冨常天、助教授 高田信敬
	９月１日､８日､ 22日､29日､ 10月６日	Ｃコース 13時～16時	５日間 (土)		資料保存―蔵書保存の課題と対応― ・国立国会図書館収集部資料保存課長　安江明夫 ・CAP 編集室主幹　木部　徹 ・太平製紙㈱　鈴木英治
平成３ (1991)	８月26日（月） ～ ９月６日（金）	Ａコース 16時～19時	10日間	各５０名	情報処理Ⅱ(書誌データベースと検索のしくみ) ・㈳日本図書館協会書誌情報センター主幹　遠矢勝昭 ・鶴見大学助教授 岡田靖 ・鶴見大学講師 堀込静香 ・鶴見大学図書館司書 樋川清司
	８月12日､14日､ 19日､21日､ 26日､28日､ ９月２日、４日､ ９日､11日	Ｂコース 13時～16時	10日間 （月・水）		古典資料Ⅱ(古典資料の取扱い―収集・整理･保存方法など―について) ・東洋文庫長　渡邊兼庸 ・鶴見大学教授 岩佐美代子
	８月24日､31日､ ９月７日､14日､ 21日､28日	Ｃコース 10時～16時	６日間 （土）		資料保存―資料保存の考え方と技術― ・国立国会図書館収集部資料保存課長　安江明夫 ・CAT (Conservation and Technologies) 代表　木部　徹
平成４ (1992)	２月15日（月） ～ ２月26日（金）	Ａコース 14時～17時	10日間	各５０名	情報処理Ⅲ―初心者のための BASIC― ・鶴見大学助教授 岡田靖 ・鶴見大学講師 堀込静香
	９月７日､８日､ ９日､10日､11日､ 16日､17日､18日 ､	Ｂコース 13時～16時	10日間		古典資料Ⅲ　(古典資料の取扱い―収集・整理･保存方法など―について) ・慶應義塾大学三田情報センター課長代理　白石克 ・鶴見大学教授 納冨常天
	９月25日､28日､ 30日､ 10月２日、５日､ ７日､９日､12日､ 14日、16日､ 19日、21日､ 23日、26日､	Ｃコース 18時30分～ 20時30分	15日間 （月・水・ 金）		資料保存(その保存の考え方と技術) ・国立国会図書館逐次刊行物部雑誌課長　安江明夫 ・㈲キャット（CAT）代表　木部　徹
平成５ (1993)	８月６日（月） ～ ９月11日（金） 8/13、14日除く	Ａコース 13時～16時	10日間 (金・土)	各５０名	資料保存(資料保存の考え方と技術) ・日本図書館協会資料保存委員会委員長 二宮嘉須彦 ・㈲キャット（CAT）代表　木部　徹
	９月６日､13日､ 20日､27日､ 10月４日、５日､ 12日､19日､ 26日､30日､	Ｂコース 18時～21時	10日間		古典資料Ⅳ(古典資料の取扱い―収集・整理･保存方法など―) ・大東急記念文庫学芸部長 岡田久司 ・鶴見大学助教授　高田信敬
	平成６年 ２月14日（月） ～ ２月25日（金）	Ｃコース 14時～17時	10日間		情報処理Ⅳ(プログラミング学習とデータベースの作成) ・鶴見大学助教授 岡田靖 ・鶴見大学短期大学部助教授 堀込静香
	10月５日、７日､ ９日、14日､ 16日、19日､ 23日	Ｄコース 火・木 18時30分～ 20時30分 土	７日間 （火･木・ 土）		情報の組織化とアクセス（OPAC 時代の主題検索と NDC9 版の概要） ・慶應義塾大学教授 田村俊作 ・国立国会図書館図書館協力部国際協力課長 平野美惠子 ・国立国会図書館図書部図書整理課著者書名係長 横山幸雄 ・中央大学図書館図書課長 古川肇
平成６ (1994)	８月23日（火） ～ ８月25日（木）	Ａコース ９時30分～ 16時30分	３日間	各５０名	情報の組織化とアクセスⅡ(オンラインネットワークにおける主題検索と情報アクセスの概要) ・慶應義塾大学教授　上田修一 ・図書館情報大学助教授　永田治樹 ・駿河台大学教授　戸田光昭 ・日本大学総合科学研究所教授　田中久文 ・東北大学附属図書館逐次刊行物掛長　佐藤義則 ・図書館情報大学助教授　石井啓豊

鶴見大学図書館学特別講座概要

年度	開講日時（日数）			定員	講師名・肩書・演題
平成６ (1994)	8月29日、 9月5日、12日、 14日、19日、28日、 10月5日、12日、 19日	Ｂコース 18時～21時	10日間 （月・水）	各５０名	古典資料Ⅴ（古典資料の取り扱い―収集・整理・保存方法―)(10月1日（土）は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫見学） ・慶應義塾大学教授　関場　武 ・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫　尾崎　康、山城喜憲 ・鶴見大学教授　大三輪龍彦
	平成7年 2月13日（月） ～24日（金）	Ｃコース 14時～17時	10日間		情報処理Ⅴ　―図書館の演習とサービスのコンピュータ処理― ・鶴見大学助教授　岡田　靖 ・鶴見大学女子短期大学部助教授　堀込静香
平成７ (1995)	8月28日（月） ～ 8月30日（水）	Ａコース 9時30分 ～ 16時30分	3日間	各５０名	情報の組織化とアクセスⅢ　―情報アクセスと学術情報システム （講義と見学・実習）―(29、30日は見学・実習を学術情報センターで） ・学術情報センター教授　宮澤　彰 ・三重県立図書館長　雨森弘行
	9月26日、28日、 10月3日、5日、 12日、17日、 19日、24日、 26日、31日	Ｂコース 18時～21時	10日間 （火・木）		古典資料Ⅵ　古典資料の取り扱い―収集・整理・保存方法―(11/4(土）は㈶大東急記念文庫を見学） ・㈶大東急記念文庫学芸部長　岡崎久司 ・鶴見大学女子短期大学部助教授　石田千尋
	9月18日（月） ～ 9月20日（水）	Ｃコース 9時～16時	3日間		情報処理Ⅵ　―書名と件名・分類の関連を考える（JAPAN - MARCデータをモデルとして）― ・鶴見大学女子短期大学部助教授　堀込静香 ・鶴見大学講師　中馬敏隆
平成８ (1992)	8月27日（火） ～ 8月30日（金）	Ａコース 9時～16時	3日間	各５０名	情報の組織化とアクセスⅣ　―情報アクセスと資料組織、電子図書館― （28、30日に見学　情報処理基盤センター、学術情報センター、日本科学技術情報センター） ・鶴見大学女子短期大学部助教授　堀込静香 ・情報図書館　RUKIT館長　白岩一哉 ・情報処理振興事業協会技術応用事業部調査役　田屋裕之 ・学術情報センター教授　安達　淳 ・日本科学技術情報センター主任情報員　細江孝雄
	9月9日、30日、 10月7日、14日、 21日、30日、 11月6日、13日、 20日、27日	Ｂコース 18時～21時	10日間 （月・水）		古典資料Ⅶ　古典資料の取り扱い―収集・整理・保存方法― ・鶴見大学女子短期大学部教授　廣島まさる ・和紙文化研究会代表　久米康生 ・宮内庁書陵部図書課専門職　櫛笥節男 ・宮内庁書陵部図書課修補係長　吉田敏武
平成９ (1997)	8月26日（火） ～ 8月28日（木）	Ａコース 9時～16時	3日間	各５０名	情報の組織化とアクセスⅣ(27日に見学　慶應義塾大学湘南藤沢校舎メディアセンター) ・鶴見大学女子短期大学部助教授　堀込静香 ・慶應義塾大学湘南藤沢校舎メディアセンター事務長　小川治之 ・科学技術情報事業本部オンライン課長　細江孝雄
	9月24日、 10月1日、15日、 22日、29日、 11月11日、18日、 25日、 12月2日、9日	Ｂコース 18時～21時	10日間 （火・水）		古典資料Ⅷ　―古典資料の取り扱い― ・㈶五島美術館学芸課長　名児耶　明 ・鶴見大学教授　小野正弘
平成10 (1998)	9月21日（月）、 22日（火）	10時～16時	2日間	各５０名	図書館サービスの新展開Ⅰ(22日は見学 パイロット電子図書館） ・慶應義塾大学 大賀裕 ・NEC 東谷憲明 ・NEC 大黒英和
平成11 (1999)	9月24日（金）、 25日（土）	10時～16時	2日間	各５０名	図書館サービスの新展開Ⅱ―第二世代をむかえた「ＯＰＡＣ」(25日は見学 早稲田大学図書館） ・早稲田大学図書館学術情報課 藤巻俊樹 ・早稲田大学図書館学術情報課 奥村佳郎
平成12 (2000)	25日（月）、 26日（火）	10時～16時	2日間	各５０名	図書館サービスの新展開Ⅲ　―公共図書館におけるコンピュータ化の現状 (26日に見学 NEC中央研究所） ・NEC公共ソリューション調査企画職　河原畑由美 ・NEC公共第一システム部図書館担当エキスパート　天井清 ・NEC第二SI部技術担当課長　中塚敏之

※講習案内・学内刊行物等に基づく

司書講習修了者数・期間等一覧

年度 西暦	年度 和暦	実施期間 （夜間）	定員	修了者数	累計	実施期間 （夏期）	定員	修了者数	累計	実施期間 （土·日）	定員	修了者数	累計	合　計 （各年度）	総　計
1954	昭和 29	4.25 ～ 9.26		90	90					10 ～ 3 月				90	90
1955	昭和 30			13	103	7 ～ 8 月		13	13	10 ～ 3 月		73	73	99	189
1956	昭和 31	4. 1 ～ 9.28		29	132			37	50	9.22 ～ 3.17	80	46	119	112	301
1957	昭和 32	4. 8 ～ 9.27	80	29	161	7.13 ～ 9. 2	80	86	136	9.28 ～ 3.31	50	35	154	150	451
1958	昭和 33	4. 7 ～ 9.17	50	32	193	7.13 ～ 9.17	50	151	287	9.27 ～ 3.30	50	47	201	230	681
1959	昭和 34	4.11 ～ 9.30	50	32	225	7.12 ～ 9.15	50	102	389	9.26 ～ 3.30	50	86	287	220	901
1960	昭和 35	4.11 ～ 9.30	50	19	244	7.13 ～ 9.12		72	461			24	311	115	1016
1961	昭和 36	4.20 ～ 9.22	100	11	255	7.13 ～ 9.12		22	483			16	327	49	1065
1962	昭和 37		50	9	264			55	538	9.29 ～ 3.16		12	339	76	1141
1963	昭和 38	4.22 ～ 10.14	50	4	268	6. 1 ～ 9.12	80	63	601	9. 7 ～ 3.29	50	17	356	84	1225
1964	昭和 39	4.20 ～ 9.30	50	16	284	7.13 ～ 9.11	80	77	678	9.26 ～ 3.28	50	8	364	101	1326
1965	昭和 40	4.20 ～ 9.31	50	38	322	7.13 ～ 9.11	80	71	749	9.26 ～ 3.31	50	23	387	132	1458
1966	昭和 41	4.20 ～ 9.30	80	48	370	7.10 ～ 9. 3	80	119	868		50	50	437	217	1675
1967	昭和 42	4.20 ～ 10. 3	80	50	420	7.10 ～ 9.13	80	79	947	9.23 ～ 3.24	80	50	487	179	1854
1968	昭和 43	5.25 ～ 3.31	120	36	456	7.17 ～ 9.10	120	101	1048					137	1991
1969	昭和 44	4.21 ～ 12.26	50	31	487	7.10 ～ 9. 3	120	169	1217					200	2191
1970	昭和 45	4.20 ～ 1.31	50	29	516	7. 6 ～ 8.31	100	112	1329					141	2332
1971	昭和 46	5.17 ～ 1.31	50	36	552	7. 5 ～ 9. 1	100	164	1493					200	2532
1972	昭和 47	5. 8 ～ 1.31	50	53	605	7. 6 ～ 9. 1	100	144	1637					197	2729
1973	昭和 48	5. 8 ～ 1.31	50	80	685	7. 6 ～ 9. 1	100	164	1801					244	2973
1974	昭和 49	5. 7 ～ 1.31	50	97	782	7. 1 ～ 9. 2	100	168	1969					265	3238
1975	昭和 50	5. 7 ～ 1.31	50	90	872	7. 1 ～ 9. 2	100	174	2143					264	3502
1976	昭和 51	5. 7 ～ 1.31	50	95	967	7. 1 ～ 9. 3	120	163	2306					258	3760
1977	昭和 52	5. 9 ～ 1.31	100	126	1093	7. 1 ～ 9. 3	120	178	2484					304	4064
1978	昭和 53	5. 8 ～ 1.31	120	79	1172	7. 1 ～ 9. 2	240	211	2695					290	4354
1979	昭和 54	5. 7 ～ 1.31	120	126	1298	7. 2 ～ 9. 1	240	274	2969					400	4754
1980	昭和 55	5. 6 ～ 1.30	100	114	1412	7. 1 ～ 9.13	200	188	3157					302	5056
1981	昭和 56	5.11 ～ 1.29	100	83	1495	7. 1 ～ 9.12	200	173	3330					256	5312
1982	昭和 57	5.10 ～ 1.28	100	112	1607	7. 1 ～ 9.11	100	119	3449					231	5543
1983	昭和 58	5. 9 ～ 1.27	100	74	1681	7. 1 ～ 9.10	120	103	3552					177	5720
1984	昭和 59	5. 7 ～ 1.25	100	87	1768	7. 2 ～ 9. 7	120	131	3683					218	5938
1985	昭和 60					7. 1 ～ 9. 6	120	145	3828					145	6083
1986	昭和 61					7. 1 ～ 9.30	120	146	3974					146	6229
1987	昭和 62					7. 1 ～ 9.30	120	146	4120					146	6375
1988	昭和 63					7. 1 ～ 9.30	120	134	4254					134	6509
1989	平成 元					7. 1 ～ 9.30	120	141	4395					141	6650
1990	平成 2					7. 2 ～ 9.28	120	151	4546					151	6801
1991	平成 3					7. 1 ～ 9.30	120	150	4696					150	6951
1992	平成 4					7. 1 ～ 9.30	100	128	4824					128	7079
1993	平成 5					7. 1 ～ 9.30	100	131	4955					131	7210
1994	平成 6					7. 1 ～ 9.30	100	119	5074					119	7329
1995	平成 7					7.10 ～ 9.29	120	133	5207					133	7462
1996	平成 8					7. 1 ～ 9.30	120	148	5355					148	7610
1997	平成 9					7. 7 ～ 9.22	120	136	5491					136	7746
1998	平成 10					7. 6 ～ 9.30	120	142	5633					142	7888
1999	平成 11					7. 1 ～ 9.30	120	135	5768					135	8023
2000	平成 12					7. 3 ～ 9.29	120	141	5909					141	8164
2001	平成 13					7. 2 ～ 9.28	120	138	6047					138	8302
2002	平成 14					7.22 ～ 9.26	120	130	6177					130	8432
2003	平成 15					7.22 ～ 9.24	120	129	6306					129	8561
2004	平成 16					7.20 ～ 9.22	120	148	6454					148	8709
2005	平成 17					7.20 ～ 9.22	120	148	6602					148	8857
2006	平成 18					7.19 ～ 9.21	120	113	6715					113	8970
2007	平成 19					7.18 ～ 9.20	120	132	6847					132	9102
2008	平成 20					7.15 ～ 9.17	120	124	6971					124	9226
2009	平成 21					7.16 ～ 9.17	120	130	7101					130	9356
2010	平成 22					7.15 ～ 9.14	120	136	7237					136	9492
2011	平成 23					7.15 ～ 9.15	120	145	7382					145	9637
2012	平成 24					7.12 ～ 9.13	120	117	7499					117	9754
2013	平成 25					7.16 ～ 9.17	120	125	7624					125	9879

※ 講習案内・委嘱願等に基づく
網掛け の実施期間は土日講習

司書補講習修了者数・期間等一覧

年度 西暦	年度 和暦	実施期間 (夜間)	定員	修了者数	累計	実施期間 (夏期)	定員	修了者数	累計	実施期間 (土･日)	定員	修了者数	累計	合 計 (各年度)	総 計
1954	昭和 29	4. 20 ～ 9. 26	100	46	46					10. 2 ～ 3. 14	100			46	46
1955	昭和 30			45	91									45	91
1956	昭和 31	4. 1 ～ 9. 28		28	119					9. 22 ～ 3. 17	80	28	28	56	147
1957	昭和 32	4. 8 ～ 9. 27	80	19	138	7. 13 ～ 9. 2	80	33	33	9. 28 ～ 3. 31	50	65	93	117	264
1958	昭和 33	4. 7 ～ 9. 17	50	27	165	7. 13 ～ 9. 17	50	41	74	9. 27 ～ 3. 30	50	27	120	95	359
1959	昭和 34	4. 6 ～ 9. 30	50	23	188	7. 12 ～ 9. 15	50	79	153	9. 26 ～ 3. 30	50		120	102	461
1960	昭和 35	4. 11 ～ 9. 30		14	202	7. 13 ～ 9. 12		66	219	9. 24 ～ 3. 28	100	4	124	84	545
1961	昭和 36	4. 20 ～ 9. 27	100	20	222	7. 13 ～ 9. 12	150	50	269	10. 1 ～ 3. 25	80	13	137	83	628
1962	昭和 37	4. 20 ～ 9. 30	80	30	252	7. 12 ～ 9. 11	100	132	401	10. 6 ～ 3. 31	70	16	153	178	806
1963	昭和 38	4. 22 ～ 10. 14	50	13	265	6. 1 ～ 9. 12	80	94	495	9. 7 ～ 3. 29	50	12	165	119	925
1964	昭和 39	4. 20 ～ 9. 30	50	15	280	7. 13 ～ 9. 11	80	81	576	9. 26 ～ 3. 28	50	9	174	105	1030
1965	昭和 40	4. 20 ～ 9. 31	50	28	308	7. 13 ～ 9. 11	80	70	646	9. 26 ～ 3. 31	50	27	201	125	1155
1966	昭和 41	4. 20 ～ 9. 30	80	35	343	7. 10 ～ 9. 3	80	68	714	10. 8 ～ 3. 26	80	27	228	130	1285
1967	昭和 42	4. 20 ～ 10. 3	80	32	375	7. 10 ～ 9. 13	80	115	829	9. 23 ～ 3. 24	80	46	274	193	1478
1968	昭和 43	5. 25 ～ 3. 31	120	38	413	7. 17 ～ 9. 10	120	119	948					157	1635
1969	昭和 44	4. 21 ～ 12. 26	50	28	441	7. 10 ～ 9. 3	120	116	1064					144	1779
1970	昭和 45	4. 20 ～ 1. 31	50	43	484	7. 6 ～ 8. 31	100	78	1142					121	1900
1971	昭和 46	5. 17 ～ 1. 31	50	34	518	7. 5 ～ 9. 1	100	123	1265					157	2057
1972	昭和 47	5. 8 ～ 1. 31	50	60	578	7. 6 ～ 9. 1	100	183	1448					243	2300
1973	昭和 48	5. 8 ～ 1. 31	50	51	629	7. 6 ～ 9. 1	100	163	1611					214	2514
1974	昭和 49	5. 7 ～ 1. 31	50	36	665	7. 1 ～ 9. 2	100	129	1740					165	2679
1975	昭和 50	5. 7 ～ 1. 31	50	36	701	7. 1 ～ 9. 2	100	137	1877					173	2852
1976	昭和 51	5. 7 ～ 1. 31	50	46	747	7. 1 ～ 9. 3	120	142	2019					188	3040
1977	昭和 52	5. 9 ～ 1. 31	50	36	783	7. 1 ～ 9. 3	120	105	2124					141	3181
1978	昭和 53	5. 8 ～ 1. 31	50	51	834									51	3232
1979	昭和 54	5. 7 ～ 1. 31	120	64	898									64	3296
1980	昭和 55	5. 6 ～ 1. 30	50	48	946									48	3344
1981	昭和 56	5. 11 ～ 1. 29	50	46	992									46	3390
1982	昭和 57	5. 10 ～ 1. 28	50	43	1035									43	3433
1983	昭和 58	5. 9 ～ 1. 27	50	34	1069									34	3467
1984	昭和 59	5. 7 ～ 1. 25	50	52	1121									52	3519
1985	昭和 60					7. 1 ～ 9. 6	50	53	2177					53	3572
1986	昭和 61					7. 1 ～ 9. 30	50	59	2236					59	3631
1987	昭和 62					7. 1 ～ 9. 30	50	58	2294					58	3689
1988	昭和 63					7. 1 ～ 9. 30	50	63	2357					63	3752
1989	平成 元					7. 1 ～ 9. 30	50	65	2422					65	3817
1990	平成 2					7. 2 ～ 9. 28	50	61	2483					61	3878
1991	平成 3					7. 1 ～ 9. 30	50	52	2535					52	3930
1992	平成 4					7. 1 ～ 9. 30	50	67	2602					67	3997
1993	平成 5					7. 1 ～ 9. 30	50	54	2656					54	4051
1994	平成 6					7. 1 ～ 9. 30	50	62	2718					62	4113
1995	平成 7					7. 10 ～ 9. 29	50	49	2767					49	4162
1996	平成 8					7. 1 ～ 9. 30	50	51	2818					51	4213
1997	平成 9					7. 7 ～ 9. 22	50	58	2876					58	4271
1998	平成 10					7. 6 ～ 9. 30	50	53	2929					53	4324
1999	平成 11					7. 1 ～ 9. 30	50	40	2969					40	4364
2000	平成 12					7. 3 ～ 9. 29	50	40	3009					40	4404
2001	平成 13					7. 2 ～ 9. 28	50	55	3064					55	4459
2002	平成 14					7. 22 ～ 9. 26	50	45	3109					45	4504
2003	平成 15					7. 22 ～ 9. 24	50	54	3163					54	4558
2004	平成 16					7. 20 ～ 9. 22	50	53	3216					53	4611
2005	平成 17					7. 20 ～ 9. 22	50	50	3266					50	4661
2006	平成 18					7. 19 ～ 9. 21	50	39	3305					39	4700
2007	平成 19					7. 18 ～ 9. 20	50	47	3352					47	4747
2008	平成 20					7. 15 ～ 9. 17	50	48	3400					48	4795
2009	平成 21					7. 16 ～ 9. 17	50	50	3450					50	4845
2010	平成 22					7. 15 ～ 9. 14	50	52	3502					52	4897
2011	平成 23					7. 15 ～ 9. 15	50	29	3531					29	4926
2012	平成 24					7. 12 ～ 9. 13	50	24	3555					24	4950
2013	平成 25					7. 16 ～ 9. 17	50	38	3593					38	4988

※ 講習案内・委嘱願等に基づく
網掛け の実施期間は土日講習

司書資格の科目・単位数の変遷

1950 年制定

必修科目	単位数
図書館通論	1
図書館実務	1
図書選択法	1
図書目録法	2
図書分類法	1
レフアレンス、ワーク	1
図書運用法	1
図書館対外活動	1
児童に対する図書館奉仕	1
視聴覚資料	1

群	選択科目	単位数
甲群	学校教育と公共図書館	1
	成人教育と図書館	1
	特殊資料	1
	図書館施設	1
	図書館史	1
乙群	社会学	1
	社会教育	1
	ジヤーナリズム	1
	図書解題及び図書評論	1
	図書及び印刷史	1

資格の要件：14 科目 15 単位以上

1968 年改正

群	科目	単位数
甲群	図書館通論	2
	図書館資料論	2
	参考業務	2
	参考業務演習	1
	資料目録法	2
	資料目録法演習	1
	資料分類法	2
	資料分類法演習	1
	図書館活動	2
乙群	青少年の読書と資料	1
	図書及び図書館史	1
	図書館の施設と設備	1
	資料整理法特論	1
	情報管理	1
丙群	社会教育	1
	社会調査	1
	人文科学及び社会科学の書誌解題	1
	自然科学と技術の書誌解題	1
	マスコミニケーション	1
	視聴覚教育	1

資格の要件：13 科目 19 単位以上

1996 年改正

群	科目	単位数
甲群	生涯学習概論	1
	図書館概論	2
	図書館経営論	1
	図書館サービス論	2
	情報サービス概説	2
	レファレンスサービス演習	1
	情報検索演習	1
	図書館資料論	2
	専門資料論	1
	資料組織概説	2
	資料組織演習	2
	児童サービス論	1
乙群	図書及び図書館史	1
	資料特論	1
	コミュニケーション論	1
	情報機器論	1
	図書館特論	1

資格の要件：14 科目 20 単位以上

2009 年改正

群	科目	単位数
甲群	生涯学習概論	2
	図書館概論	2
	図書館制度・経営論	2
	図書館情報技術論	2
	図書館サービス概論	2
	情報サービス論	2
	児童サービス論	2
	情報サービス演習	2
	図書館情報資源概論	2
	情報資源組織論	2
	情報資源組織演習	2
乙群	図書館基礎特論	1
	図書館サービス特論	1
	図書館情報資源特論	1
	図書・図書館史	1
	図書館施設論	1
	図書館総合演習	1
	図書館実習	1

資格の要件：13 科目 24 単位以上

※制定・改定時の官報に基づき作成した。

司書補資格の科目・単位数の変遷

1950 年制定

必　修　科　目	単位数
図書館概論	1
図書整理法	2
図書の目録と分類	3
閲覧と貸出	2
参考書解題	1
整本と修理	1
視聴覚資料	1
図書館統計	1
複写技術	1

群	選　択　科　目	単位数
甲群	図書館史	1
	図書館施設	1
乙群	社会教育	1
	ジヤーナリズム	1
	速記法	1

資格の要件：11 科目 15 単位以上

1996 年改正

科　目	単位数
生涯学習概論	1
図書館の基礎	2
図書館サービスの基礎	2
レファレンスサービス	1
レファレンス資料の解題	1
情報検索サービス	1
図書館の資料	2
資料の整理	2
資料の整理演習	1
児童サービスの基礎	1
図書館特講	1

資格の要件：11 科目 15 単位

※制定・改定時の官報に基づき作成した。

歴代講師一覧（司書）

	科目名	単位数	昭和29年度 講師名		昭和31年度(後期) 講師名	昭和32年度(前・夏) 講師名	昭和32年度(後期) 講師名	昭和33年度(前・夏) 講師名	昭和33年度(後期) 講師名
必修科目	図書館通論	1	武田虎之助	昭和30年度前期～31年度夏期までは該当資料なし	武田虎之助	武田虎之助	有山　崧	有山　崧	有山　崧
	図書館実務	1	和田　吉人		和田　吉人	和田　吉人	沓掛伊左吉	沓掛伊左吉	沓掛伊左吉
	図書選択法	1	弥吉　光長		弥吉　光長	弥吉　光長	弥吉　光長 藤川　正信	弥吉　光長	弥吉　光長
	図書目録法	2	加藤　宗厚		加藤　宗厚 高橋泰四郎	加藤　宗厚 高橋泰四郎	高橋泰四郎 鈴木　栄二	高橋泰四郎 団野　弘之	高橋泰四郎 団野　弘之
	図書分類法	1	加藤　宗厚		加藤　宗厚	加藤　宗厚	森　清	森　清	森　清
	レファレンス・ワーク	1	弥吉　光長		芝　盛雄	芝　盛雄	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫
	図書運用法	1	北嶋　武彦		北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦
	図書館対外活動	1	沓掛伊左吉		沓掛伊左吉	沓掛伊左吉	石田　清一	石田　清一	石田　清一
	児童に対する図書館奉仕	1	竹田　平		竹田　平	竹田　平	竹田　平	竹田　平	竹田　平
	視聴覚資料	1	鈴木　勉		鈴木　勉 石井富之助	鈴木　勉 石井富之助	鈴木　勉 石井富之助	鈴木　勉 石井富之助	鈴木　勉 石井富之助
甲群	成人教育と図書館	1	—		—	—	—	—	—
	特殊資料	1	武田虎之助		武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助
	図書館史	1	佐藤　博		佐藤　博	佐藤　博	岡田　温 佐藤　博	岡田　温	岡田　温
乙群	社会学	1	半田　孝康		半田　孝康	半田　孝康	半田　孝康	半田　孝康	—
	社会教育	1	石田　清一		石田　清一	石田　清一	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治
	ジャーナリズム	1	中野　愚堂		佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂
	書誌解題	1	—		—	—	—	—	—
	図書及び印刷史	1	松浦　貞俊		—	—	—	—	—
	目録分類演習	1	—		—	—	—	—	—
※	学校図書館通論	1	—		—	—	—	—	—
	学校図書館の利用指導	1	—		—	—	—	—	—

	科目名	単位数	昭和34年度(前・夏) 講師名	昭和34年度(後期) 講師名	昭和35年度(前期) 講師名	昭和35年度(夏) 講師名		昭和37年度(後期) 講師名	昭和38年度(前期) 講師名
必修科目	図書館通論	1	有山　崧	有山　崧	有山　崧	有山　崧	昭和35年度後期～37年度夏期までは該当資料なし	武田虎之助	武田虎之助
	図書館実務	1	沓掛伊左吉	沓掛伊左吉	沓掛伊左吉	沓掛伊左吉		沓掛伊左吉	沓掛伊左吉
	図書選択法	1	弥吉　光長	弥吉　光長	弥吉　光長	弥吉　光長		北嶋　武彦	北嶋　武彦
	図書目録法	2	団野　弘之 鈴木　賢祐	高橋泰四郎 団野　弘之	高橋泰四郎 団野　弘之	高橋泰四郎 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之	加藤　宗厚 団野　弘之
	図書分類法	1	森　清	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚		加藤　宗厚	加藤　宗厚
	レファレンス・ワーク	1	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫		北嶋　武彦	北嶋　武彦
	図書運用法	1	北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦		服部金太郎	服部金太郎
	図書館対外活動	1	石田　清一	石田　清一	石田　清一	石田　清一		石井　敦	石井　敦
	児童に対する図書館奉仕	1	竹田　平	竹田　平	竹田　平	竹田　平		竹田　平	竹田　平
	視聴覚資料	1	石井富之助	石井富之助	石井富之助	石井富之助		関　晶	関　晶
甲群	成人教育と図書館	1	—	—	—	—		有山　崧	有山　崧
	特殊資料	1	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助		武田虎之助	武田虎之助
	図書館史	1	岡田　温	岡田　温	岡田　温	岡田　温		岡田　温	岡田　温
	社会学	1	—	—	—	—		—	—
乙群	社会教育	1	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治		三輪　全龍	三輪　全龍
	ジャーナリズム	1	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂		佐々木秀雄 花井清二良	佐々木秀雄 花井清二良
	書誌解題	1	—	—	—	—		—	—
	図書及び印刷史	1	—	—	—	—		—	—
	目録分類演習	1	—	—	—	—		—	—
※	学校図書館通論	1	—	—	—	—		—	—
	学校図書館の利用指導	1	—	—	—	—		—	—

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科　目　名	単位数	昭和38年度（通年）講師名	昭和39年度前・夏期は該当資料なし	昭和39年度（後期）講師名	昭和40年度前・夏期は該当資料なし	昭和40年度（後期）講師名	昭和41年度（前期）講師名	昭和41年度（夏）講師名	昭和41年度後期は該当資料なし	昭和42年度 講師名
必修科目	図書館通論	1	武田虎之助		武田虎之助		武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助		武田虎之助
	図書館実務	1	沓掛伊左吉		沓掛伊左吉		沓掛伊左吉	沓掛伊左吉	沓掛伊左吉		沓掛伊左吉
	図書選択法	1	北嶋　武彦		北嶋　武彦		北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦		北嶋　武彦
	図書目録法	2	加藤　宗厚 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之	加藤　宗厚 団野　弘之	加藤　宗厚 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之
	図書分類法	1	加藤　宗厚		加藤　宗厚		加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚		加藤　宗厚
	レファレンス・ワーク	1	北嶋　武彦		北嶋　武彦		北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦		中根　専正
	図書運用法	1	服部金太郎		服部金太郎		服部金太郎	服部金太郎	服部金太郎		服部金太郎
	図書館対外活動	1	石井　敦		石井　敦		石井　敦	石井　敦	石井　敦		石井　敦
	児童に対する図書館奉仕	1	竹田　平		竹田　平		竹田　平	竹田　平	竹田　平		竹田　平
	視聴覚資料	1	関　晶		関　晶		関　晶	関　晶	関　晶		関　晶
甲群	成人教育と図書館	1	有山　崧		有山　崧		—	小川　剛	小川　剛		小川　剛
	特殊資料	1	武田虎之助		武田虎之助		武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助		武田虎之助
	図書館史	1	岡田　温		岡田　温		岡田　温	岡田　温	岡田　温		岡田　温
乙群	社会学	1	—		—		—	—	—		—
	社会教育	1	三輪　全龍		三輪　全龍		小川　剛	三輪　全龍	—		—
	ジャーナリズム	1	花井清二良		佐々木秀雄 花井清二良		花井清二良	花井清二良	花井清二良		花井清二良
	書誌解題	1	—		—		—	—	—		渡辺　楳雄 関　宦市 田代三千稔
	図書及び印刷史	1	—		—		—	—	—		—
	目録分類演習	1	—		—		—	小川　剛	—		—
※	学校図書館通論	1	—		—		—	—	—		深川　恒喜
	学校図書館の利用指導	1	—		—		—	—	—		平塚　禅定

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科　目　名	単位数	昭和43年度 講 師 名	昭和44年度 講 師 名	昭和45年度 講 師 名	昭和46年度 講 師 名	昭和47年度 講 師 名	昭和48年度 講 師 名
甲群	図書館通論	2	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助 裏田　武夫	武田虎之助 裏田　武夫	武田虎之助 裏田　武夫
	図書館資料論	2	沓掛伊左吉 竹田　　平	沓掛伊左吉 竹田　　平	沓掛伊左吉 竹田　　平	竹田　　平	竹田　　平	竹田　　平
	参考業務	2	中根　専正	中根　専正	中根　専正	中根　専正	中根　専正	中根　専正
	参考業務演習	1	中根　専正	中根　専正	中根　専正	中根　専正	中根　専正	中根　専正
	資料目録法	2	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之
	資料目録法演習	1	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之
	資料分類法	2	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚
	資料分類法演習	1	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚	加藤　宗厚	岩崎　　巌	岩崎　　巌
	図書館活動	2	石井　　敦 小川　　剛	石井　　敦 前川　恒雄	石井　　敦 久保　輝巳	石井　　敦 久保　輝巳	石井　　敦 久保　輝巳	石井　　敦 久保　輝巳
乙群	青少年の読書と資料	1	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄
	図書及び図書館史	1	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温
	資料整理法特論 （I ※’89 より）	1	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	—	武田虎之助
	資料整理法特論 II	1	—	—	—	—	—	—
	情報管理	1	—	—	—	藤川　正信	藤川　正信	藤川　正信
	図書館の施設と設備	1	—	—	—	—	—	—
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	中根　専正 関　　宦市 田代三千稔	中根　専正 関　　宦市 田代三千稔	中根　専正 関　　宦市 田代三千稔	中根　専正 関　　宦市 田代三千稔	—	中根　専正 志田　延義 田代三千稔 大三輪龍彦
	マス・コミュニケーション	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良
	視聴覚教育	1	関　　晶	関　　晶	関　　晶	関　　晶	関　　晶	関　　晶
	社会教育	1	—	—	—	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教
	自然科学と技術の書誌解題	1	—	—	—	—	—	—
	社会調査	1	—	—	—	—	—	—
※	学校図書館通論	1	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜
	学校図書館の利用指導	1	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科　目　名	単位数	昭和49年度 講 師 名	昭和50年度 講 師 名	昭和51年度 講 師 名	昭和52年度 講 師 名	昭和53年度(夜) 講 師 名	昭和53年度(夏)A 講 師 名
甲群	図書館通論	2	武田虎之助 裏田　武夫	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温
	図書館資料論	2	竹田　　平	竹田　　平	竹田　　平 武田元次郎	竹田　　平 武田元次郎	竹田　　平 武田元次郎	竹田　　平 武田元次郎
	参考業務	2	中根　専正	服部金太郎	服部金太郎	服部金太郎	服部金太郎	服部金太郎
	参考業務演習	1	中根　専正	大野沢緑郎	大野沢緑郎	大野沢緑郎	大野沢緑郎	大野沢緑郎
	資料目録法	2	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之
	資料目録法演習	1	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	矢野　光雄	矢野　光雄
	資料分類法	2	加藤　宗厚 岩淵　泰郎	加藤　宗厚 団野　弘之	団野　弘之	岡田　　温	中村　初雄	芦谷　　清
	資料分類法演習	1	岩崎　　巌 松田　泰明	岩崎　　巌	岩崎　　巌	岩崎　　巌	岩崎　　巌	岩崎　　巌
	図書館活動	2	石井　　敦 久保　輝巳	石井　　敦 久保　輝巳	石井　　敦 久保　輝巳 酒川　　肇	石井　　敦 久保　輝巳 酒川　　肇	石井　　敦 久保　輝巳	久保　輝巳 酒川　　肇
乙群	青少年の読書と資料	1	角家　文雄	角家　文雄	竹田　　平	竹田　　平	竹田　　平	竹田　　平
	図書及び図書館史	1	岡田　　温	岡田　　温	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄
	資料整理法特論 （I ※’89 より）	1	大三輪龍彦	大三輪龍彦	大三輪龍彦	大三輪龍彦	大三輪龍彦	大三輪龍彦
	資料整理法特論 II	1	−	−	−	−	−	−
	情報管理	1	藤川　正信	−	村尾　成允	村尾　成允	村尾　成允	村尾　成允
	図書館の施設と設備	1	−	−	−	−	−	−
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	中根　専正 志田　延義 田代三千稔	−	関根　　透	関根　　透	関根　　透	関根　　透
	マス・コミュニケーション	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良
	視聴覚教育	1	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶
	社会教育	1	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教
	自然科学と技術の書誌解題	1	−	−	−	−	−	−
	社会調査	1	−	−	−	−	−	−
※	学校図書館通論	1	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜
	学校図書館の利用指導	1	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	本橋　久雄	本橋　久雄

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科 目 名	単位数	昭和53年度(夏)B 講 師 名	昭和54年度(夜) 講 師 名	昭和54年度(夏)A 講 師 名	昭和54年度(夏)B 講 師 名	昭和55年度(夜) 講 師 名	昭和55年度(夏)A 講 師 名
甲群	図書館通論	2	神本　光吉 石井　敦	岡田　温 中村　初雄	岡田　温 中村　初雄	神本　光吉 石井　敦	中村　初雄 小野　泰博	中村　初雄 小野　泰博
	図書館資料論	2	大野沢緑郎 飯塚　元英	武田元次郎	武田元次郎	大野沢緑郎 飯塚　元英	黒岩　高明	黒岩　高明
	参考業務	2	永田　清一	服部金太郎	服部金太郎	永田　清一	服部金太郎	黒木　努
	参考業務演習	1	武田元次郎	大野沢緑郎	大野沢緑郎	武田元次郎	武田元次郎 阿津坂林太郎	丸山　信 府川　修次
	資料目録法	2	中村　初雄	団野　弘之	団野　弘之	中村　初雄	団野　弘之	団野　弘之
	資料目録法演習	1	岡田　靖	矢野　光雄	矢野　光雄	岡田　靖	矢野　光雄 節田　益康 桧垣　正也	矢野　光雄 節田　益康 桧垣　正也
	資料分類法	2	鈴木　英二	中村　初雄	芦谷　清	中村　初雄	丸山昭二郎	芦谷　清
	資料分類法演習	1	土屋　隆	岩崎　巌	岩崎　巌	土屋　隆	岩崎　巌 池田　孝 田村　俊作	岩崎　巌 田村　俊作 加藤　宗晴 村井希与子
	図書館活動	2	鹿児島達雄 菅原　峻	石井　敦 久保　輝巳	久保　輝巳 酒川　肇	鹿児島達雄 菅原　峻	石井　敦 久保　輝巳	久保　輝巳
乙群	青少年の読書と資料	1	竹田　平	竹田　平	竹田　平	竹田　平	室伏　武	友野　玲子
	図書及び図書館史	1	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄
	資料整理法特論 （I ※'89より）	1	大三輪龍彦	大三輪龍彦	大三輪龍彦	大三輪龍彦	池田　利夫	池田　利夫
	資料整理法特論 II	1	—	—	—	—	—	—
	情報管理	1	村尾　成允	村尾　成允	村尾　成允	村尾　成允	谷　昌博	谷　昌博
	図書館の施設と設備	1	—	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	関根　透	関根　透	関根　透	関根　透	関根　透	関根　透
	マス・コミュニケーション	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良
	視聴覚教育	1	関　晶	関　晶	関　晶	関　晶	関　晶	関　晶
	社会教育	1	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教	中島　俊教
	自然科学と技術の書誌解題	1	—	—	—	—	板橋　瑞夫	板橋　瑞夫
	社会調査	1	—	—	—	—	—	—
※	学校図書館通論	1	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	深川　恒喜	—
	学校図書館の利用指導	1	本橋　久雄	本橋　久雄	本橋　久雄	本橋　久雄	本橋　久雄	—

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科 目 名	単位数	昭和55年度(夏)B 講 師 名	昭和56年度(夜) 講 師 名	昭和56年度(夏)A 講 師 名	昭和56年度(夏)B 講 師 名	昭和57年度(夜) 講 師 名	昭和57年度(夏) 講 師 名
甲群	図書館通論	2	石井 敦	中村 初雄	中村 初雄 男沢 淳	石井 敦 久保 輝巳	中村 初雄	中村 初雄
	図書館資料論	2	河島 正光 飯塚 元英	武田元次郎	加納 正巳	河島 正光 飯塚 元英	武田元次郎	加納 正巳
	参考業務	2	永田 清一	服部金太郎	河井 弘志	永田 清一	武田元次郎	永田 清一
	参考業務演習	1	武田元次郎 阿津坂林太郎	武田元次郎 阿津坂林太郎	丸山 信 府川 修次	武田元次郎 阿津坂林太郎	武田元次郎 阿津坂林太郎	北原 圀彦 府川 修次
	資料目録法	2	中村 初雄	岩淵 泰郎	岩淵 泰郎	高鷲 忠美	田辺 広	田辺 広
	資料目録法演習	1	岡田 靖 寺田 光孝 渋谷 嘉彦	矢野 光雄 節田 益康 桧垣 正也	矢野 光雄 節田 益康 桧垣 正也	岡田 靖 寺田 光孝 渋谷 嘉彦	矢野 光雄 節田 益康 桧垣 正也	岡田 靖 寺田 光孝 山本 信男 田村 俊作
	資料分類法	2	今 まど子	丸山昭二郎	芦谷 清	今 まど子 渋谷 嘉彦	丸山昭二郎	芦谷 清
	資料分類法演習	1	山本 信男 鮎沢 修 石倉 賢一	岩崎 巌 池田 孝 長田 秀一	岩崎 巌 加藤 宗晴 村井希与子 田村 俊作	菅原 通 伊藤 裕 鮎沢 修	岩崎 巌 池田 孝 長田 秀一	岩崎 巌 伊藤 裕 菅原 通 加藤 宗晴 村井希与子
	図書館活動	2	鹿児島達雄 菅原 峻	石井 敦 久保 輝巳	久保 輝巳	鹿児島達雄 菅原 峻	石井 敦 久保 輝巳	鹿児島達雄 菅原 峻
乙群	青少年の読書と資料	1	友野 玲子	室伏 武	室伏 武	室伏 武	平塚 禅定	平塚 禅定
	図書及び図書館史	1	角家 文雄	角家 文雄	角家 文雄	角家 文雄	角家 文雄	角家 文雄
	資料整理法特論 (I ※'89より)	1	池田 利夫	石井光太郎	石井光太郎	石井光太郎	石井光太郎	石井光太郎
	資料整理法特論 II	1	―	―	―	―	―	―
	情報管理	1	谷 昌博	谷 昌博	谷 昌博	谷 昌博	谷 昌博	谷 昌博
	図書館の施設と設備	1	菅原 峻	菅原 峻	菅原 峻	菅原 峻	菅原 峻	菅原 峻
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	関根 透	関根 透	関根 透	関根 透	関根 透	関根 透
	マス・コミュニケーション	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良
	視聴覚教育	1	関 晶	関 晶	関 晶	関 晶	関 晶	関 晶
	社会教育	1	中島 俊教	中島 俊教	小川 剛	小川 剛	笹川 孝一	笹川 孝一
	自然科学と技術の書誌解題	1	板橋 瑞夫	板橋 瑞夫	板橋 瑞夫	板橋 瑞夫	板橋 瑞夫	板橋 瑞夫
	社会調査	1	―	―	―	―	―	―
※	学校図書館通論	1	―	深川 恒喜	―	―	鈴木 英二	―
	学校図書館の利用指導	1	―	本橋 久雄	―	―	本橋 久雄	―

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科 目 名	単位数	昭和58年度(夜) 講 師 名	昭和58年度(夏) 講 師 名	昭和59年度(夜) 講 師 名	昭和59年度(夏) 講 師 名	昭和60年度 講 師 名	昭和61年度 講 師 名
甲群	図書館通論	2	中村　初雄	前島　重方	中村　初雄	前島　重方	前島　重方	前島　重方
	図書館資料論	2	森　睦彦	加納　正巳	森　睦彦	加納　正巳	森　睦彦	森　睦彦
	参考業務	2	丸山　信	永田　清一	丸山　信	永田　清一	永田　清一	永田　清一
	参考業務演習	1	武田元次郎 阿津坂林太郎	武田元次郎 北原　圀彦 府川　修次	武田元次郎 阿津坂林太郎	渋谷　嘉彦 北原　圀彦 府川　修次	阿津坂林太郎 渋谷　嘉彦 武田元次郎	阿津坂林太郎 堀込　静香 武田元次郎
	資料目録法	2	田辺　広	田辺　広	田辺　広	田辺　広	田辺　広	田辺　広
	資料目録法演習	1	岡田　靖 田村　俊作 節田　益康	岡田　靖 寺田　光孝 山本　信男 田村　俊作	岡田　靖 節田　益康	岡田　靖 武田元次郎 山本　信男	岡田　靖 節田　益康 山本　信男	岡田　靖 節田　益康 山本　信男
	資料分類法	2	丸山昭二郎	芦谷　清	丸山昭二郎	芦谷　清	丸山昭二郎	丸山昭二郎
	資料分類法演習	1	岩崎　巌 池田　孝 長田　秀一	岩崎　巌 伊藤　裕 菅原　通 加藤　宗晴 村井希与子	岩崎　巌 池田　孝	伊藤　裕 菅原　通 長田　秀一	伊藤　裕 菅原　通 長田　秀一	伊藤　裕 菅原　通 長田　秀一
	図書館活動	2	石井　敦 久保　輝巳	鹿児島達雄 菅原　峻	石井　敦 久保　輝巳	鹿児島達雄 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝
乙群	青少年の読書と資料	1	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	角家　文雄	角家　文雄
	図書及び図書館史	1	角家　文雄	角家　文雄	佐藤　政孝	角家　文雄	石井　敦	石井　敦
	資料整理法特論 （I ※'89 より）	1	石井光太郎	石井光太郎	石井光太郎	石井光太郎	石井光太郎 岡﨑　義富	石井光太郎 岡﨑　義富
	資料整理法特論 II	1	—	—	—	—	—	—
	情報管理	1	谷　昌博	石川　徹也	谷　昌博	石川　徹也	佐々木敏雄	佐々木敏雄
	図書館の施設と設備	1	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	関根　透	関根　透	関根　透	関根　透	関根　透	関根　透 岩佐美代子
	マス・コミュニケーション	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良
	視聴覚教育	1	関　晶	関　晶	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子
	社会教育	1	笹川　孝一	笹川　孝一	笹川　孝一	笹川　孝一	笹川　孝一	笹川　孝一
	自然科学と技術の書誌解題	1	板橋　瑞夫	板橋　瑞夫	板橋　瑞夫	板橋　瑞夫	板橋　瑞夫 堀込　静香	板橋　瑞夫 堀込　静香
	社会調査	1	—	—	—	—	—	—
※	学校図書館通論	1	鈴木　英二	—	鈴木　英二	—	柿沼　隆志	柿沼　隆志
	学校図書館の利用指導	1	本橋　久雄	—	本橋　久雄	—	笠原　良郎	笠原　良郎

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科　目　名	単位数	昭和62年度 講 師 名	昭和63年度 講 師 名	平成元年度 講 師 名	平成2年度 講 師 名	平成3年度 講 師 名	平成4年度 講 師 名
甲群	図書館通論	2	前島　重方	前島　重方	丸山昭二郎	丸山昭二郎	丸山昭二郎	丸山昭二郎
	図書館資料論	2	森　　睦彦	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎
	参考業務	2	永田　清一	森　　睦彦	森　　睦彦	森　　睦彦	森　　睦彦	森　　睦彦
	参考業務演習	1	渋谷　嘉彦 堀込　静香 武田元次郎 府川　修次	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次
	資料目録法	2	田辺　　広	浜田　敏郎	前島　重方	前島　重方	前島　重方	前島　重方
	資料目録法演習	1	岡田　　靖 節田　益康 山本　信男	岡田　　靖 節田　益康 山本　信男	岡田　　靖 堀込　静香 山本　信男	岡田　　靖 堀込　静香 山本　信男	岡田　　靖 堀込　静香 山本　信男	岡田　　靖 堀込　静香 山本　信男
	資料分類法	2	丸山昭二郎	丸山昭二郎	浜田　敏郎	浜田　敏郎	浜田　敏郎	浜田　敏郎
	資料分類法演習	1	伊藤　　裕 菅原　　通 長田　秀一	伊藤　　裕 菅原　　通 長田　秀一	伊藤　　裕 菅原　　通 田村　俊作	伊藤　　裕 菅原　　通 田村　俊作	伊藤　　裕 田村　俊作 樋川　清司	伊藤　　裕 田村　俊作 樋川　清司
	図書館活動	2	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝
乙群	青少年の読書と資料	1	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	平塚　禅定	平塚　禅定
	図書及び図書館史	1	石井　　敦	石井　　敦	石井　　敦	石井　　敦	石井　　敦	石井　　敦
	資料整理法特論 （I ※'89より）	1	石井光太郎 岡崎　義富	大三輪龍彦 岡崎　義富	納富　常天 大三輪龍彦	納富　常天 大三輪龍彦	納富　常天 大三輪龍彦	納富　常天 大三輪龍彦
	資料整理法特論 II	1	－	－	岡﨑　義富	岡﨑　義富	岡﨑　義富	岡﨑　義富
	情報管理	1	小松　三蔵	小松　三蔵	石川　徹也	石川　徹也	石川　徹也	堀込　静香
	図書館の施設と設備	1	菅原　　峻	栗原嘉一郎 冨江　伸治	栗原嘉一郎 冨江　伸治	栗原嘉一郎 冨江　伸治	栗原嘉一郎 冨江　伸治	栗原嘉一郎 冨江　伸治
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	関根　　透 岩佐美代子	関根　　透 岩佐美代子	関根　　透 岩佐美代子	関根　　透 岩佐美代子	関根　　透 岩佐美代子	関根　　透 岩佐美代子
	マス・コミュニケーション	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	香内　三郎	香内　三郎
	視聴覚教育	1	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子
	社会教育	1	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男
	自然科学と技術の書誌解題	1	板橋　瑞夫 堀込　静香	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江
	社会調査	1	－	－	笹川　孝一	笹川　孝一	－	笹川　孝一
※	学校図書館通論	1	柿沼　隆志	柿沼　隆志	柿沼　隆志	柿沼　隆志	柿沼　隆志	平塚　禅定
	学校図書館の利用指導	1	笠原　良郎	笠原　良郎	笠原　良郎	笠原　良郎	笠原　良郎	笠原　良郎

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科 目 名	単位数	平成5年度 講 師 名	平成6年度 講 師 名	平成7年度 講 師 名	平成8年度 講 師 名
甲群	図書館通論	2	丸山昭二郎	丸山昭二郎	丸山昭二郎	丸山昭二郎
	図書館資料論	2	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎
	参考業務	2	森　睦彦	森　睦彦	森　睦彦	森　睦彦
	参考業務演習	1	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次	渋谷　嘉彦 堀込　静香 府川　修次	堀込　静香 渡部　満彦 府川　修次	堀込　静香 渡部　満彦 府川　修次
	資料目録法	2	前島　重方	前島　重方	前島　重方	前島　重方
	資料目録法演習	1	岡田　靖 堀込　静香 山本　信男	岡田　靖 山本　信男 渡部　満彦	岡田　靖 渋谷　嘉彦 山本　信男	岡田　靖 渋谷　嘉彦 山本　信男
	資料分類法	2	浜田　敏郎	田村　俊作	田村　俊作	田村　俊作
	資料分類法演習	1	伊藤　裕 樋川　清司 鈴木　誠	伊藤　裕 樋川　清司 鈴木　誠	伊藤　裕 菅原　通 鈴木　誠	伊藤　裕 有倉　久雄 鈴木　誠
	図書館活動	2	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 佐藤　政孝	久保　輝巳 鹿児島達雄
乙群	青少年の読書と資料	1	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定
	図書及び図書館史	1	石井　敦	石井　敦	石井　敦	角家　文雄
	資料整理法特論 （I ※'89 より）	1	納冨　常天 大三輪龍彦	納冨　常天 大三輪龍彦	納冨　常天 大三輪龍彦	納冨　常天 大三輪龍彦
	資料整理法特論 II	1	岡﨑　義富	岡﨑　義富	岡﨑　義富	岡﨑　義富
	情報管理	1	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香
	図書館の施設と設備	1	栗原嘉一郎 冨江　伸治	栗原嘉一郎 冨江　伸治	栗原嘉一郎 冨江　伸治	冨江　伸治
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	1	関根　透 岩佐美代子	関根　透 岩佐美代子	河野眞知郎 岩佐美代子	河野眞知郎 岩佐美代子
	マス・コミュニケーション	1	磯部　成志	磯部　成志	磯部　成志	角家　文雄
	視聴覚教育	1	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子	塚越つた子
	社会教育	1	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男
	自然科学と技術の書誌解題	1	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江	永田　勝久 佐々木史江
	社会調査	1	笹川　孝一	笹川　孝一	笹川　孝一	松山　巖
※	学校図書館通論	1	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定
	学校図書館の利用指導	1	笠原　良郎	武田元次郎	高橋　惣一	高橋　惣一

※は司書教諭科目

歴代講師一覧（司書）

	科目名	単位数	平成9年度 講師名	平成10年度 講師名	平成11年度 講師名	平成12年度 講師名	平成13年度 講師名	平成14年度 講師名
甲群	生涯学習概論	1	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男	佐伯　信男
	図書館概論	2	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎
	図書館経営論	1	田中　久文	田中　久文	田中　久文	田中　久文	田中　久文	田中　久文
	図書館サービス論	2	鹿児島達雄	鹿児島達雄	天野　哲雄	天野　哲雄	小田　光宏	小田　光宏
	情報サービス概説	2	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	堀込　静香	堀込　静香	渋谷　嘉彦
	レファレンスサービス演習	1	渡部　満彦 武田元次郎 府川　修次	堀込　静香 武田元次郎 府川　修次	堀込　静香 武田元次郎 府川　修次	渋谷　嘉彦 早野喜久江 長谷川豊祐	渋谷　嘉彦 早野喜久江 長谷川豊祐	堀込　静香 早野喜久江 吉田千登世
	情報検索演習	1	岡田　靖 堀込　静香 中馬　敏隆	岡田　靖 堀込　静香 渡部　満彦	岡田　靖 堀込　静香 松本　勝久	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之
	図書館資料論	2	前島　重方	小田　光宏	森　智彦	森　智彦	森　智彦	森　智彦
	専門資料論	1	納富　常天 佐々木史江	佐々木史江 石田　千尋	佐々木史江 石田　千尋	佐々木史江 石田　千尋	佐々木史江 石田　千尋	佐々木史江 石田　千尋
	資料組織概説	2	田村　俊作	田村　俊作	渡部　満彦	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖
	資料組織演習	2	山本　信男 堀込　静香 塚越つた子 伊藤　裕 有倉　久雄 鈴木　誠	山本　信男 岡田　靖 塚越つた子 伊藤　裕 松山　巖 鈴木　誠	岡田　靖 塚越つた子 伊藤　裕 松山　巖 鈴木　誠	加藤　好郎 野崎　昭雄 塚越つた子 伊藤　裕 松山　巖 鈴木　誠	加藤　好郎 野崎　昭雄 塚越つた子 伊藤　裕 松山　巖 鈴木　誠	下村　陽子 野崎　昭雄 塚越つた子 伊藤　裕 岡田　靖 堀込　静香
	児童サービス論	1	平塚　禅定	平塚　禅定	小川　俊彦	小川　俊彦	小川　俊彦	小川　俊彦
乙群	図書及び図書館史	1	寺田　光孝	寺田　光孝	若松　昭子	若松　昭子	若松　昭子	寺田　光孝
	資料特論	1	岩下　哲典	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸
	コミュニケーション論	1	下山　剛	下山　剛	下山　剛	下山　剛	下山　剛	吉村　順子
	情報機器論	1	岡田　靖	中馬　敏隆	高林　一美	高林　一美	高林　一美	高林　一美
	図書館特論	1	白岩　一哉	白岩　一哉	白岩　一哉	白岩　一哉	岡田　靖	岡田　靖

	科目名	単位数	平成15年度 講師名	平成16年度 講師名	平成17年度 講師名	平成18年度 講師名	平成19年度 講師名	平成20年度 講師名
甲群	生涯学習概論	1	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯
	図書館概論	2	武田元次郎	原田　智子	原田　智子	原田　智子	原田　智子	原田　智子
	図書館経営論	1	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎
	図書館サービス論	2	小田　光宏	小田　光宏	小田　光宏	小田　光宏	小田　光宏	小田　光宏
	情報サービス概説	2	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦
	レファレンスサービス演習	1	堀込　静香 早野喜久江 吉田千登世	原田　智子 早野喜久江 吉田千登世	原田　智子 早野喜久江 吉田　隆	原田　智子 早野喜久江 吉田　隆	原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子	原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子
	情報検索演習	1	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	渡部　満彦 松本　勝久 須永　和之	松本　勝久 須永　和之
	図書館資料論	2	森　智彦	森　智彦	森　智彦	森　智彦	岡谷　大	森　智彦
	専門資料論	1	佐々木史江 石田　千尋	石田　千尋 長塚　隆	石田　千尋 長塚　隆	石田　千尋 長塚　隆	石田　千尋 長塚　隆	石田　千尋 長塚　隆
	資料組織概説	2	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖
	資料組織演習	2	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 伊藤　裕 竹之内　禎 堀込　静香	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 伊藤　裕 竹之内　禎 増田　和子	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 伊藤　裕 竹之内　禎 増田　和子	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 伊藤　裕 竹之内　禎 田嶋　知宏	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 伊藤　裕 竹之内　禎 田嶋　知宏	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 竹之内　禎 田嶋　知宏 吉田　隆
	児童サービス論	1	小川　俊彦	佐藤　涼子	佐藤　涼子	佐藤　涼子	佐藤　涼子	佐藤　涼子
乙群	図書及び図書館史	1	篠原由美子	篠原由美子	篠原由美子	中山　愛理	中山　愛理	中山　愛理
	資料特論	1	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸
	コミュニケーション論	1	吉村　順子	吉村　順子	吉村　順子	吉村　順子	吉村　順子	吉村　順子
	情報機器論	1	高林　一美	高林　一美	高林　一美	高林　一美	高林　一美	高林　一美
	図書館特論	1	岡田　靖	長塚　隆	長塚　隆	長塚　隆	長塚　隆	長塚　隆

歴代講師一覧（司書）

	科　目　名	単位数	平成21年度 講　師　名	平成22年度 講　師　名	平成23年度 講　師　名
甲群	生涯学習概論	1	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯
	図書館概論	2	原田　智子	原田　智子	渋谷　嘉彦
	図書館経営論	1	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎
	図書館サービス論	2	小田　光宏	小田　光宏	小田　光宏
	情報サービス概説	2	渋谷　嘉彦	渋谷　嘉彦	原田　智子
	レファレンスサービス演習	1	原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子	原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子	原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子
	情報検索演習	1	松本　勝久 須永　和之 山川　恭子	松本　勝久 須永　和之 山川　恭子	松本　勝久 須永　和之 山川　恭子
	図書館資料論	2	森　　智彦	森　　智彦	森　　智彦
	専門資料論	1	石田　千尋 長塚　　隆	石田　千尋 長塚　　隆	石田　千尋 長塚　　隆
	資料組織概説	2	岡田　　靖	岡田　　靖	岡田　　靖
	資料組織演習	2	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 竹之内　禎 田嶋　知宏 岡野　裕行	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 竹之内　禎 田嶋　知宏 岡野　裕行	下村　陽子 野崎　昭雄 榎本裕希子 竹之内　禎 田嶋　知宏
	児童サービス論	1	佐藤　苑生	佐藤　苑生	依田　和子
乙群	図書及び図書館史	1	中山　愛理	中山　愛理	中山　愛理
	資料特論	1	小林　和幸	小林　和幸	小林　和幸
	コミュニケーション論	1	吉村　順子	吉村　順子	吉村　順子
	情報機器論	1	高林　一美	高林　一美	高林　一美
	図書館特論	1	長塚　　隆	長塚　　隆	長塚　　隆

	科　目　名	単位数	平成24年度 講　師　名	平成25年度 講　師　名	平成26年度 講　師　名
甲群	生涯学習概論	2	斎藤　哲瑯	片岡　　了	片岡　　了
	図書館概論	2	渋谷　嘉彦	宮部　頼子	宮部　頼子
	図書館制度・経営論	2	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎
	図書館情報技術論	2	長塚　　隆	長塚　　隆	長塚　　隆
	図書館サービス概論	2	角田　裕之	小田　光宏	小田　光宏
	情報サービス論	2	原田　智子	原田　智子	原田　智子
	児童サービス論	2	依田　和子	依田　和子	依田　和子
	情報サービス演習	2	松本　勝久 須永　和之 山川　恭子 原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子	松本　勝久 須永　和之 山川　恭子 原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子	松本　勝久 須永　和之 山川　恭子 原田　智子 早野喜久江 竹信幾久子
	図書館情報資源概論	2	小山　憲司	小山　憲司	小山　憲司
	情報資源組織論	2	岡田　　靖	岡田　　靖	岡田　　靖
	情報資源組織演習	2	下村　陽子 角田　裕之 榎本裕希子 藤田　節子 竹之内　禎 田嶋　知宏	下村　陽子 角田　裕之 榎本裕希子 藤田　節子 竹之内　禎 田嶋　知宏	下村　陽子 角田　裕之 榎本裕希子 藤田　節子 竹之内　禎 田嶋　知宏
乙群	図書館基礎特論	1	中村　保彦	中村　保彦	中村　保彦
	図書館サービス特論	1	平田　泰子	平田　泰子	平田　泰子
	図書館情報資源特論	1	石田　千尋 長塚　　隆	石田　千尋 長塚　　隆	石田　千尋 長塚　　隆
	図書・図書館史	1	中山　愛理	中山　愛理	中山　愛理
	図書館施設論	1	―	―	―
	図書館総合演習	1	―	―	―
	図書館実習	1	―	―	―

歴代講師一覧（司書補）

	科　目　名	単位数		昭和31年度(後期) 講 師 名	昭和32年度(前･夏) 講 師 名	昭和32年度(後期) 講 師 名	昭和33年度(前･夏) 講 師 名	昭和33年度(後期) 講 師 名	昭和34年度(前･夏) 講 師 名
必修科目	図書館概論	1	昭和29年度～31年度前期までは該当資料なし	武田虎之助	武田虎之助	有山　崧	有山　崧	有山　崧	有山　崧
	図書整理法	2		和田　吉人 弥吉　光長	和田　吉人 弥吉　光長	沓掛伊左吉 弥吉　光長 藤川　正信	沓掛伊左吉 弥吉　光長	沓掛伊左吉 弥吉　光長	沓掛伊左吉 弥吉　光長
	図書の目録と分類	3		加藤　宗厚 高橋泰四郎	加藤　宗厚 高橋泰四郎	高橋泰四郎 鈴木　栄二 森　清	高橋泰四郎 団野　弘之 森　清	高橋泰四郎 団野　弘之 森　清	団野　弘之 鈴木　賢祐 森　清
	閲覧と貸出	2		北嶋　武彦	北嶋　武彦	北嶋　武彦	平塚　禅定	平塚　禅定	北嶋　武彦 平塚　禅定
	参考書解題	1		弥吉　光長	弥吉　光長	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫
	製本と修理	1		古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄
	視聴覚資料	1		鈴木　勉 石井富之助	石井富之助 鈴木　勉	石井富之助 鈴木　勉	石井富之助 鈴木　勉	石井富之助 鈴木　勉	石井富之助
	図書館統計	1		武田虎之助	武田虎之助	浜田　敏郎	浜田　敏郎	井出　翁	井出　翁
	複写技術	1		古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	北之園秋男	北之園秋男	北之園秋男
甲群	図書館史	1		佐藤　博	佐藤　博	岡田　温 佐藤　博	岡田　温	岡田　温	岡田　温
	図書館施設	1		秋岡　梧郎	秋岡　梧郎	—	—	—	—
乙群	社会教育	1		石田　清一	石田　清一	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治
	ジャーナリズム	1		佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂

	科　目　名	単位数	昭和34年度(後期) 講 師 名	昭和35年度(前期) 講 師 名	昭和35年度(夏) 講 師 名	昭和35年度(後) 講 師 名	昭和36年度(前期) 講 師 名	昭和36年度(夏) 講 師 名
必修科目	図書館概論	1	有山　崧	有山　崧	有山　崧	有山　崧	武田虎之助	武田虎之助
	図書整理法	2	沓掛伊左吉 弥吉　光長	沓掛伊左吉 弥吉　光長	沓掛伊左吉 弥吉　光長	沓掛伊左吉 弥吉　光長	沓掛伊左吉 北嶋　武彦	沓掛伊左吉 北嶋　武彦
	図書の目録と分類	3	高橋泰四郎 団野　弘之 加藤　宗厚	高橋泰四郎 団野　弘之 加藤　宗厚	高橋泰四郎 団野　弘之 加藤　宗厚	団野　弘之 加藤　宗厚	加藤　宗厚 団野　弘之	加藤　宗厚 団野　弘之
	閲覧と貸出	2	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定	北嶋　武彦 平塚　禅定	北嶋　武彦 平塚　禅定
	参考書解題	1	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫	裏田　武夫	服部金太郎	服部金太郎
	製本と修理	1	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄
	視聴覚資料	1	石井富之助	石井富之助	石井富之助	石井富之助	関　晶	関　晶
	図書館統計	1	井出　翁	井出　翁	井出　翁	井出　翁	井出　翁	井出　翁
	複写技術	1	北之園秋男	北之園秋男	北之園秋男	北之園秋男	竹内　悊	竹内　悊
甲群	図書館史	1	岡田　温	岡田　温	岡田　温	岡田　温	岡田　温	岡田　温
	図書館施設	1	—	—	—	—	—	—
乙群	社会教育	1	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治	近藤　寿治	有山　崧	有山　崧
	ジャーナリズム	1	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄 中野　愚堂	佐々木秀雄	佐々木秀雄 花井清二良	佐々木秀雄 花井清二良

歴代講師一覧（司書補）

	科目名	単位数	昭和36年度（後期）講師名	昭和37年度 講師名	昭和38年度（前期）講師名	昭和38年度（通年）講師名	昭和39年度前・夏期は該当資料なし	昭和39年度（後期）講師名	昭和40年度前・夏期は該当資料なし	昭和40年度（後期）講師名
必修科目	図書館概論	1	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助	武田虎之助		武田虎之助		武田虎之助
	図書整理法	2	沓掛伊左吉 北嶋　武彦	沓掛伊左吉 北嶋　武彦	沓掛伊左吉 北嶋　武彦	沓掛伊左吉 北嶋　武彦		沓掛伊左吉 北嶋　武彦		沓掛伊左吉 北嶋　武彦
	図書の目録と分類	3	加藤　宗厚 団野　弘之 植松　和彦	加藤　宗厚 団野　弘之 植松　和彦	加藤　宗厚 団野　弘之	加藤　宗厚 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之
	閲覧と貸出	2	北嶋　武彦 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定		服部金太郎 平塚　禅定		服部金太郎 平塚　禅定
	参考書解題	1	服部金太郎	服部金太郎	北嶋　武彦	北嶋　武彦		北嶋　武彦		北嶋　武彦
	製本と修理	1	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄		古野　健雄		古野　健雄
	視聴覚資料	1	関　　晶	関　　晶	関　　晶	関　　晶		関　　晶		関　　晶
	図書館統計	1	井出　　翁	井出　　翁	神本　光吉	神本　光吉		神本　光吉		神本　光吉
	複写技術	1	竹内　　悊	竹内　　悊	竹内　　悊	竹内　　悊		古野　健雄		竹内　　悊
甲群	図書館史	1	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温		岡田　　温		岡田　　温
	図書館施設	1	—	—	—	—		—		—
乙群	社会教育	1	三輪　全龍	有山　　崧	三輪　全龍	三輪　全龍		三輪　全龍		小川　　剛
	ジャーナリズム	1	佐々木秀雄	佐々木秀雄 花井清二良	佐々木秀雄 花井清二良	花井清二良		佐々木秀雄 花井清二良		花井清二良
（本学開講）	成人教育と図書館	1	—	—	—	—		—		—
	図書の目録と分類演習	1.5	—	—	—	—		—		小川　　剛
	参考書解題演習	0.5	—	—	—	—		—		—

	科目名	単位数	昭和41年度（前）講師名	昭和41年度夏・後期は該当資料なし	昭和42年度 講師名	昭和43年度 講師名	昭和44年度 講師名	昭和45年度 講師名	昭和46年度 講師名	昭和47年度は該当資料なし
必修科目	図書館概論	1	武田虎之助		武田虎之助	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	
	図書整理法	2	沓掛伊左吉 北嶋　武彦		沓掛伊左吉 北嶋　武彦	沓掛伊左吉 竹田　　平	沓掛伊左吉 竹田　　平	沓掛伊左吉 竹田　　平	沓掛伊左吉	
	図書の目録と分類	3	加藤　宗厚 団野　弘之		加藤　宗厚 団野　弘之	武田虎之助	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清	
	閲覧と貸出	2	服部金太郎 平塚　禅定		服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	
	参考書解題	1	北嶋　武彦		中根　専正	中根　専正	横尾　太寿	横尾　太寿	横尾　太寿	
	製本と修理	1	古野　健雄		古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	古野　健雄	
	視聴覚資料	1	関　　晶		関　　晶	関　　晶	関　　晶	関　　晶	関　　晶	
	図書館統計	1	神本　光吉		神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	
	複写技術	1	竹内　　悊		竹内　　悊	竹内　　悊	竹内　　悊	古野　健雄	古野　健雄	
甲群	図書館史	1	岡田　　温		岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	
	図書館施設	1	—		小野　泰博	—	—	—	—	
乙群	社会教育	1	小川　　剛		三輪　全龍	—	—	—	—	
	ジャーナリズム	1	花井清二良		花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	
（本学開講）	成人教育と図書館	1	—		小川　　剛	小川　　剛	—	—	—	
	図書の目録と分類演習	1.5	小川　　剛		—	—	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	
	参考書解題演習	0.5	—		—	—	—	—	—	

歴代講師一覧（司書補）

	科　目　名	単位数	昭和48年度 講 師 名	昭和49年度 講 師 名	昭和50年度 講 師 名	昭和51年度 講 師 名	昭和52年度 講 師 名	昭和53年度 講 師 名
必修科目	図書館概論	1	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	武田元次郎	神本　光吉
	図書整理法	2	沓掛伊左吉	岩崎　　巌	大野沢緑郎	大野沢緑郎	大野沢緑郎 飯塚　元英	大野沢緑郎 飯塚　元英
	図書の目録と分類	3	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 芦谷　　清
	閲覧と貸出	2	服部金太郎 平塚　禅定	服部金太郎 平塚　禅定	平塚　禅定 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄
	参考書解題	1	横尾　太寿	横尾　太寿	横尾　太寿	横尾　太寿	横尾　太寿	横尾　太寿
	製本と修理	1	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	団野　弘之	伊藤　　明	伊藤　　明
	視聴覚資料	1	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶
	図書館統計	1	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	神本　光吉	大野沢緑郎	菅原　　峻
	複写技術	1	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	海野　雅央	海野　雅央
甲群	図書館史	1	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温	岡田　　温
	図書館施設	1	—	—	—	—	—	—
乙群（本学開講）	社会教育	1	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章
	ジャーナリズム	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良	花井清二良
	成人教育と図書館	1	—	—	—	—	—	—
	図書の目録と分類演習	1.5	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎 土屋　　隆	岡田　　靖 土屋　　隆	岡田　　靖 土屋　　隆
	参考書解題演習	0.5	—	—	—	—	—	—

	科　目　名	単位数	昭和54年度 講 師 名	昭和55年度 講 師 名	昭和56年度 講 師 名	昭和57年度 講 師 名	昭和58年度 講 師 名	昭和59年度 講 師 名
必修科目	図書館概論	1	神本　光吉	団野　弘之	神本　光吉	田辺　　広	田辺　　広	田辺　　広
	図書整理法	2	大野沢緑郎 飯塚　元英	武田元次郎 飯塚　元英	武田元次郎 飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英
	図書の目録と分類	3	鈴木　英二 芦谷　　清	鈴木　英二 渋谷　嘉彦	鈴木　英二 渋谷　嘉彦	岡田　　靖 渋谷　嘉彦	武田元次郎 渋谷　嘉彦	武田元次郎 渋谷　嘉彦
	閲覧と貸出	2	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄
	参考書解題	1	横尾　太寿	中村　初雄	中村　初雄	丸山　　信	北原　圀彦	北原　圀彦
	製本と修理	1	伊藤　　明	伊藤　　明	伊藤　　明	伊藤　　明	伊藤　　明	伊藤　　明
	視聴覚資料	1	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	関　　　晶	堀江　幸司
	図書館統計	1	菅原　　峻	菅原　　峻	菅原　　勲	菅原　　勲	菅原　　勲	田村　俊作
	複写技術	1	海野　雅央	海野　雅央	海野　雅央	海野　雅央	海野　雅央	海野　雅央
甲群	図書館史	1	岡田　　温	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	佐藤　政孝
	図書館施設	1	—	—	—	—	—	—
乙群（本学開講）	社会教育	1	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章	有岡　　章	菅原　春雄
	ジャーナリズム	1	花井清二良	花井清二良	花井清二良	北原　圀彦	北原　圀彦	北原　圀彦
	成人教育と図書館	1	—	—	—	—	—	—
	図書の目録と分類演習	1.5	岡田　　靖 土屋　　隆	岡田　　靖 寺田　光孝	岡田　　靖 中村　初雄	岡田　　靖 薬袋　秀樹	岡田　　靖 薬袋　秀樹	岡田　　靖 薬袋　秀樹
	参考書解題演習	0.5	大野沢緑郎	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦

歴代講師一覧（司書補）

	科目名	単位数	昭和60年度 講師名	昭和61年度 講師名	昭和62年度 講師名	昭和63年度 講師名	平成元年度 講師名	平成2年度 講師名
必修科目	図書館概論	1	田辺　広	田辺　広	田辺　広	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎
	図書整理法	2	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英
	図書の目録と分類	3	渋谷　嘉彦 薬袋　秀樹	渋谷　嘉彦 岡田　靖	田村　俊作 武田元次郎	田村　俊作 岡田　靖	丸山昭二郎 田村　俊作	丸山昭二郎 渋谷　嘉彦
	閲覧と貸出	2	天野　哲雄 岩崎　巌	天野　哲雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄	天野　哲雄 鹿児島達雄
	参考書解題	1	武田元次郎	武田元次郎	林　杲之介	林　杲之介	林　杲之介	林　杲之介
	製本と修理	1	蒲生　政雄	蒲生　政雄	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英
	視聴覚資料	1	堀江　幸司	堀江　幸司	堀江　幸司	堀江　幸司	堀江　幸司	広瀬　利保
	図書館統計	1	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲
	複写技術	1	武田元次郎	武田元次郎	海野　雅央	海野　雅央	海野　雅央	海野　雅央
甲群	図書館史	1	佐藤　政孝	佐藤　政孝	佐藤　政孝	佐藤　政孝	角家　文雄	角家　文雄
	図書館施設	1	—	—	—	—	菅原　峻	菅原　峻
乙群	社会教育	1	菅原　春雄	菅原　春雄	菅原　春雄	平塚　禅定	平塚　禅定	平塚　禅定
	ジャーナリズム	1	北原　圀彦	北原　圀彦	北原　圀彦	北原　圀彦	北原　圀彦	北原　圀彦
（本学開講）	成人教育と図書館	1	—	—	—	—	—	—
	図書の目録と分類演習	1.5	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	菅原　春雄 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝
	参考書解題演習	0.5	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦

	科目名	単位数	平成3年度 講師名	平成4年度 講師名	平成5年度 講師名	平成6年度 講師名	平成7年度 講師名	平成8年度 講師名
必修科目	図書館概論	1	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎
	図書整理法	2	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英	飯塚　元英
	図書の目録と分類	3	丸山昭二郎 菅原　通	丸山昭二郎 菅原　通	丸山昭二郎 菅原　通	丸山昭二郎 菅原　通	丸山昭二郎 菅原　通	丸山昭二郎 岡田　靖 池田　孝
	閲覧と貸出	2	広瀬　利保 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄	平塚　禅定 鹿児島達雄
	参考書解題	1	武田元次郎	北原　圀彦	北原　圀彦	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香
	製本と修理	1	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英	伊藤　嘉英
	視聴覚資料	1	伊藤　敏朗	伊藤　敏朗	伊藤　敏朗	伊藤　敏朗	伊藤　敏朗	伊藤　敏朗
	図書館統計	1	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲	菅原　勲
	複写技術	1	海野　雅央	小泉　徹	小泉　徹	小泉　徹	小泉　徹	小泉　徹
甲群	図書館史	1	角家　文雄	広瀬　利保	広瀬　利保	寺田　光孝	寺田　光孝	寺田　光孝
	図書館施設	1	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻	菅原　峻
乙群	社会教育	1	平塚　禅定	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯
	ジャーナリズム	1	北原　圀彦	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄	角家　文雄
（本学開講）	成人教育と図書館	1	—	—	—	—	—	—
	図書の目録と分類演習	1.5	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	岡田　靖 池田　孝	—
	参考書解題演習	0.5	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	吉田　道彦	—

歴代講師一覧（司書補）

科　目　名	単位数	平成9年度 講 師 名	平成10年度 講 師 名	平成11年度 講 師 名	平成12年度 講 師 名	平成13年度 講 師 名	平成14年度 講 師 名
生涯学習概論	1	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯	斎藤　哲瑯
図書館の基礎	2	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	森　睦彦	森　睦彦	加藤　好郎
図書館サービスの基礎	2	平塚　禅定 鹿児島達雄	鹿児島達雄	天野　哲雄	天野　哲雄	松林麻実子	松林麻実子
レファレンスサービス	1	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香
レファレンス資料の解題	1	長谷川豊祐	長谷川豊祐	長谷川豊祐	武田元次郎	武田元次郎	長谷川豊祐
情報検索サービス	1	岡田　靖	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香	堀込　静香
図書館の資料	2	小田　光宏	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎	武田元次郎
資料の整理	2	池田　孝	池田　孝	池田　孝	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖
資料の整理演習	1	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	池田　孝	池田　孝	有岡　圭子
児童サービスの基礎	1	平塚　禅定	平塚　禅定	小川　俊彦	小川　俊彦	小川　俊彦	小川　俊彦
図書館特講	1	吉田　道彦	野崎　昭雄	野崎　昭雄	岡田　靖	松本　勝久	松本　勝久

科　目　名	単位数	平成15年度 講 師 名	平成16年度 講 師 名	平成17年度 講 師 名	平成18年度 講 師 名	平成19年度 講 師 名	平成20年度 講 師 名
生涯学習概論	1	小田切武夫	小田切武夫	小田切武夫	小田切武夫	浅野志津子	浅野志津子
図書館の基礎	2	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎
図書館サービスの基礎	2	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子
レファレンスサービス	1	堀込　静香	渡部　満彦	早野喜久江	早野喜久江	吉田　隆	吉田　隆
レファレンス資料の解題	1	長谷川豊祐	長谷川豊祐	長谷川豊祐	早野喜久江	長谷川豊祐	長谷川豊祐
情報検索サービス	1	堀込　静香	渡部　満彦	山川　恭子	山川　恭子	山川　恭子	山川　恭子
図書館の資料	2	武田元次郎	堀川　貴司	堀川　貴司	堀川　貴司	堀川　貴司	堀川　貴司
資料の整理	2	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖
資料の整理演習	1	有岡　圭子	有岡　圭子	鈴木　誠	鈴木　誠	鈴木　誠	鈴木　誠
児童サービスの基礎	1	小川　俊彦	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗
図書館特講	1	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久

科　目　名	単位数	平成21年度 講 師 名	平成22年度 講 師 名	平成23年度 講 師 名	平成24年度 講 師 名	平成25年度 講 師 名	平成26年度 講 師 名
生涯学習概論	1	浅野志津子	浅野志津子	浅野志津子	浅野志津子	片岡　了	片岡　了
図書館の基礎	2	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	加藤　好郎	藤井　昭子
図書館サービスの基礎	2	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子	松林麻実子
レファレンスサービス	1	吉田　隆	吉田　隆	吉田　隆	吉田　隆	吉田　隆	吉田　隆
レファレンス資料の解題	1	長谷川豊祐	長谷川豊祐	長谷川豊祐	長谷川豊祐	角田　裕之	角田　裕之
情報検索サービス	1	山川　恭子	山川　恭子	山川　恭子	山川　恭子	山川　恭子	山川　恭子
図書館の資料	2	堀川　貴司	堀川　貴司	堀川　貴司	堀川　貴司	堀川　貴司	伊倉　史人
資料の整理	2	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖	岡田　靖
資料の整理演習	1	鈴木　誠	鈴木　誠	鈴木　誠	鈴木　誠	鈴木　誠	鈴木　誠
児童サービスの基礎	1	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗	黒沢　克朗
図書館特講	1	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久	松本　勝久

開講科目・講師依拠資料

現存する司書・司書補の講習案内に基づく。

昭和 29 年度から昭和 41 年度に関しては司書・司書補講習委嘱願・講習終了報告書・　文部省通知等に基づく。

注：昭和 57 ～ 59 年度講師は、担当部署保管の資料に依拠した。

あ　と　が　き

本誌は、鶴見大学司書・司書補講習 60 周年を記念して、本学における講習が開講して以来、はじめて編集された記念誌です。

巻頭の、講習の創成期、本学講習の歩みと将来展望の二つの論考では、講習と本学講習の全体像が概観できます。また、座談会では、講習の60年間に渡る関係者一同の努力の足跡を紹介しました。さまざまな年代の講師と修了生の方々には、それぞれの講習にかかわる思い出をご寄稿いただきました。個々の思い出からは、講習の果たしてきた役割や、現在から今後の展開を実感できるのではないでしょうか。

後半の資料編は、関係者の地道な資料収集により完成しました。修了生の方々にとっては、歴代講師一覧などの資料により、受講当時のさまざまな思い出が蘇ることと思います。しかし、散逸した資料や書類も多く、資料編の更なる充実は、次回の記念誌編集の宿題となります。

関係者の皆様のご協力とともに、本誌発行の趣旨に賛同し、本学司書・司書補講習の思い出を快くご執筆いただきました講師と修了生の皆様には厚く御礼を申し上げます。本誌が、鶴見大学司書・司書補講習の更なる発展の礎の一端となれば幸いです。

実行委員長　原田　智子

鶴見大学司書・司書補講習60周年記念事業実行委員会

◆ 委員長

原田智子　　文学部教授　司書・司書補講習主任教授

◆ 学内委員

角田裕之　　文学部教授　司書・司書補講習担当講師
長塚　隆　　文学部教授　司書・司書補講習担当講師
落合一恵　　事務局長
小島信道　　総務部長
瀧川　孝　　教育研究支援センター事務部長
丸山素雄　　地域連携推進課長
長谷川豊祐　学術情報事務長
佐々木健瑛　キャリア支援課長

◆ 学外委員

岡田　靖　　鶴見大学名誉教授
有岡　章　　元入試センター事務部参与
吉田道彦　　元入試キャリアセンター事務部長
海野雅央　　元短大部教学課専門職

学校法人総持学園 創立90周年記念
鶴見大学司書・司書補講習60周年記念誌

平成26年9月13日発行

編　集　鶴見大学司書・司書補講習60周年
記念事業実行委員会

発　行　鶴見大学
〒230-8501
横浜市鶴見区鶴見2-1-3

印刷所　㈲牛尾印刷